

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第296集

高槻市

井 尻 遺 跡 3

一般国道170号（十三高槻線）道路築造事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2019年3月

公益財団法人 大阪府文化財センター

高槻市

井 尻 遺 跡 3

一般国道 170 号（十三高槻線）道路築造事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



212 落込み出土土器



195 竪穴建物壁溝出土石釧

序 文

本書は公益財団法人大阪府文化財センターが一般国道 170 号（十三高槻線）道路築造事業に伴い、平成 30 年に井尻遺跡でおこなった埋蔵文化財発掘調査の報告書です。この道路築造事業に伴う発掘調査は平成 25 年におこなわれた試掘調査から始まり、本調査では今回が 3 次目となります。これまでの調査では中世前期の屋敷地に伴うとみられる区画溝や、古墳時代中期の掘立柱建物とそれに近接する祭祀遺構、集落跡から出土した石釧など、きわめて重要な調査成果がみられます。

井尻遺跡が位置する高槻市の北東部は、北に西国街道が走り南に淀川が流れるという、水陸ともに交通の要衝を占める位置にあたります。少なくとも官道である山陽道が定められた奈良時代には、この地が交通の要衝となったことがわかっています。そして、これまでの発掘調査による出土資料から、文献史料の残っていない古墳時代以前も、各地の物資がこの地を行き交っていた様子があきらかになりつつあります。そして今回の発掘調査でも、これまでの調査成果を補完して余ほどの成果が得られました。

平成 25 年から始まった井尻遺跡の発掘調査では、非常に実りの多い成果が得られたといえますが、この成果が学問的な意味合いだけでなく、淀川北岸の歴史を考えるうえでの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にあたって大阪府茨木土木事務所、大阪府教育庁、高槻市教育委員会、地元自治会、高槻市立五領小学校、高槻市立五領中学校をはじめとする関係各位より多大なご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。

今後とも当センターの実施する埋蔵文化財発掘調査へのご理解とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

平成 31 年 3 月

公益財団法人 大阪府文化財センター
理事長 田邊 征夫

例 言

1. 本書は、大阪府高槻市井尻1丁目に所在する井尻遺跡の発掘調査報告書である。本調査は公益財団法人大阪府文化財センターが管理する調査番号では井尻遺跡18-1にあたる。
2. 発掘調査は、一般国道170号（十三高槻線）道路築造事業に伴い、大阪府茨木土木事務所より委託を受け、大阪府教育庁文化財保護課の指導の下、公益財団法人大阪府文化財センターが実施した。
3. 調査及び整理に関する受託名称・調査名・受託期間・調査体制は、以下の通りである。
受託名称：「一般国道170号（十三高槻線）道路築造事業に伴う井尻遺跡埋蔵文化財調査業務委託（その3）」
調査名：井尻遺跡18-1
受託期間：平成30年5月1日～平成31年3月15日
調査体制：事務局次長兼調整課長 岡本茂史、調査課長 三好孝一、調査課長補佐 亀井聡
主査 合田幸美、副主査 奥村茂輝
4. 現地調査の写真撮影は合田・奥村が、遺物写真撮影は調査課写真室が行った。
5. 発掘調査および整理事業の過程で、以下の方々ならびに諸機関にご指導・ご教示を賜った。記して感謝の意を表したい（敬省略）。
岡本敏行（大阪府教育庁）、早川圭・三好裕太郎・濱野俊一（高槻市教育委員会）
牟田憲一郎・内海正浩（大阪府茨木土木事務所）
6. 本書の執筆・編集は奥村が担当した。
7. 本書に関わる遺物・写真・実測図などの資料類は公益財団法人大阪府文化財センターにおいて保管しており、広く活用されることを希望する。

凡 例

1. 遺構図及び断面図に示した標高は、東京湾平均海面（T.P.）を使用している。図中の標高は、すべて東京湾平均海面（T.P.）からのプラス値である。
2. 座標値は世界測地系（測地成果 2000）による平面直角座標系第Ⅵ系に基づき表示し、単位はすべてmである。
3. 全体図及び遺構図の方位は、いずれも平面直角座標系第Ⅵ系の座標北を示す。
4. 現地調査及び遺物整理に際しては、当センターの『遺跡調査基本マニュアル』2010 に準拠した。
5. 土層断面図の土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2006 年度版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修を用いた。その記載方法は記号・土色名・土質名の順とする。（例：10Y4/2 オリーブ灰 シルト）
6. 遺構は、アラビア数字を用いて通し番号で名称を付けており、アラビア数字の後ろに遺構の形態・種類を表す文字を付している。例) 45 溝
7. 遺構番号は調査時に付した番号をそのまま用いる。したがって報告書中の本文・遺構挿図・遺構写真中の遺構番号は、調査時に作成した遺構図面、遺物ラベル、写真・遺物・図面台帳に記されている遺構番号と同一である。
8. 遺構の断面図・平面図は、対象により適宜縮尺を変えて掲載しており、図ごとにスケールバーと縮尺を表示している。
9. 遺物実測図の縮尺は 4 分の 1 を基本とし、図ごとにスケールバーを表示している。写真図版の遺物はスケールを統一していない。
10. 出土遺物の断面表現については、黒塗りが須恵器、白塗りが弥生土器・土師器・瓦器・陶磁器である。
11. 掲載遺物は通し番号を与えて表示し、本文・挿図・写真図版ともに一致する。
12. 遺跡分布図や調査位置図で用いた地図は、平成 10（1998）年 12 月国土地理院発行 25,000 分の 1 地図「大阪東北部」、もしくは大阪府地図情報システムから得た地図データを使用している。なお個々の挿図に原図の出典を記している。

目 次

序 文
例 言
凡 例
目 次

第1章	調査に至る経緯と経過	1
第2章	調査の方法	3
	第1節 発掘調査	3
	第2節 整理作業	4
第3章	遺跡の位置と環境	6
	第1節 位置と地理的環境	6
	第2節 歴史的環境	6
	第3節 これまでの調査について	7
第4章	調査成果	9
	第1節 基本層序	9
	第2節 検出された遺構面	13
第5章	まとめ	50

挿 図 目 次

図1	調査地の位置	1	図12	4区・5区第1面遺構配置図	16
図2	調査区割と既往の調査地	2	図13	6区第1面遺構配置図	17
図3	地区割りの方法	3	図14	2区第1面遺構平・断面図	19
図4	地区割と調査区配置	4	図15	6区第1面遺構平面図	20
図5	周辺の遺跡分布図	8	図16	6区遺構断面図	21
図6	1区西壁・2区北壁断面図	10	図17	第1面検出遺構内出土遺物	22
図7	3区西壁・4区北壁・5区東壁断面図	11	図18	第1面遺構検出時出土遺物 (第3層出土遺物)	22
図8	6区東壁断面図	12	図19	1区・2区北半第2面遺構配置図	24
図9	2区・6区東西断面図	13	図20	2区南半・3区第2面遺構配置図	25
図10	1区・2区北半第1面遺構配置図	14	図21	4区・5区第2面遺構配置図	26
図11	2区南半・3区第1面遺構配置図	15			

図 22 6区第2面遺構配置図	27	図 35 1区・2区北半第3面遺構配置図	38
図 23 2区 233 井戸平・断面図	28	図 36 2区南・3区第3面遺構配置図	39
図 24 2区 235 井戸平・断面図	29	図 37 4区・5区第3面遺構配置図	40
図 25 2区 212 落ち込み平・断面図	30	図 38 6区第3面遺構配置図	41
図 26 2区 147 溝平・断面図、150 土器出土 状況図	31	図 39 2区第3面検出溝断面図	42
図 27 3区 239 溝平面・断面図	31	図 40 5区 29 溝・30 溝断面図	42
図 28 6区 118 土坑、101・102 溝平面 ・断面図	32	図 41 5区 29・30 溝土器出土状況	43
図 29 第2面検出遺構内出土遺物	32	図 42 6区 186・187 竪穴建物平面・ 断面図	44
図 30 2区 212 落ち込み出土須恵器	33	図 43 6区 194 竪穴建物平面・断面図	45
図 31 2区 212 落ち込み出土土師器	34	図 44 6区 195 竪穴建物平面・断面図	45
図 32 3区 239 溝出土遺物	34	図 45 第3面検出遺構内出土遺物	46
図 33 2区 233 井戸出土木製品、235 井戸枠 使用板材	35	図 46 195 竪穴建物壁溝出土石製品	46
図 34 第2・第3面遺構検出時出土遺物 (第4-1・第4-2層出土遺物)	36	図 47 5区 29 溝・30 溝出土遺物	47
		図 48 古墳時代中期～中世の全体遺構 配置図	49
		図 49 調査区北半古墳時代前期の遺構 配置図	51

写真目次

写真1 現地調査および整理作業風景	5
-------------------	---

写真図版目次

巻頭カラー図版	2.4区 北壁断面(南西から)
上段 212 落ち込み出土土器	3.6区 中央部東西断面(南から)
下段 195 竪穴建物壁溝出土石釧	図版3 遺構
図版1 遺構	1.6区 中央部西壁断面(南東から)
1.2区 北壁断面(南西から)	2.6区 中央部南寄り西壁断面(南東から)
2.2区 東西断面(南西から)	3.6区 南端西壁断面(南東から)
3.3区 西壁断面南側(南東から)	図版4 遺構
図版2 遺構	1.2区 北半第1面(南西から)
1.3区 西壁断面北側(南東から)	2.2区 南半第1面(北から)

- 図版5 遺構
- 1.2区 南半第1面（南から）
- 2.5区 第1面（北から）
- 図版6 遺構
- 1.3区 第1面（南から）
- 2.4区 第1面（南東から）
- 3.6区 北端第1面（南西から）
- 図版7 遺構
- 1.6区 北半第1面（北から）
- 2.6区 中央部第1面（北から）
- 3.6区 南半第1面（南から）
- 図版8 遺構
- 1.6区 51 溝断面（北東から）
- 2.6区 53 溝断面（北から）
- 3.6区 221 柱穴断面（東から）
- 4.2区 204 溝土器出土状況（南から）
- 5.2区 北半第2面全景（南西から）
- 図版9 遺構
- 1.2区 南半第2・第3面全景（南から）
- 2.4区 第2面全景（東から）
- 図版10 遺構
- 1.5区 第2・第3面全景（北から）
- 2.5区 第2・第3面全景（南から）
- 図版11 遺構
- 1.1区 南側調査区第2面全景（南から）
- 2.4区 第2面全景（南東から）
- 3.6区 北側部分第2面全景（北から）
- 図版12 遺構
- 1.6区 中央部北側第2面全景（北から）
- 2.6区 中央部南側第2面全景（北から）
- 3.6区 南側第2面全景（南西から）
- 図版13 遺構
- 1.2区 212 落ち込み検出状況（北西から）
- 2.2区 212 落ち込み土器出土状況①（南西から）
- 3.2区 212 落ち込み土器出土状況②（南から）
- 図版14 遺構
- 1.2区 233 井戸上層断面（西から）
- 2.2区 233 井戸下層断面（西から）
- 3.2区 235 井戸上層断面（東から）
- 図版15 遺構
- 1.2区 235 井戸枠検出状況（西から）
- 2.2区 235 井戸枠内遺物出土状況（東から）
- 3.2区 235 井戸断面（東から）
- 図版16 遺構
- 1.2区 235 井戸底検出状況（西から）
- 2.2区 北半第3面（南西から）
- 3.2区 北半第3面（北から）
- 図版17 遺構
- 1.3区 第3面（北東から）
- 2.5区 29・30 溝遺物検出状況（北から）
- 3.5区 29 溝遺物検出状況（南から）
- 図版18 遺構
- 1.5区 30 溝遺物検出状況（南から）
- 2.5区 29 溝断面（南から）
- 3.5区 30 溝断面（西から）
- 図版19 遺構
- 1.5区 29 溝177 出土状況（東から）
- 2.5区 29 溝178 出土状況（東から）
- 3.5区 30 溝191 出土状況（東から）
- 4.5区 30 溝188 出土状況（東から）
- 5.5区 30 溝190 出土状況（東から）
- 6.5区 30 溝179 出土状況（東から）
- 7.5区 30 溝186 出土状況（東から）
- 8.5区 150 土器出土状況（南東から）
- 図版20 遺構
- 1.6区 中央部第3面全景（西から）
- 2.6区 中央部第3面全景（東から）
- 3.6区 186 竪穴建物検出状況（西から）
- 4.6区 186 竪穴建物完掘状況（西から）
- 5.6区 186 竪穴建物火処（西から）
- 6.6区 186 竪穴建物火処横断面（西から）
- 7.6区 194・195 竪穴建物周辺（西から）
- 8.6区 194・195 竪穴建物周辺（北西から）
- 図版21 遺構
- 1.6区 195 竪穴建物（西から）
- 2.2区 236（右）・237（左）溝（南から）

3.2区 236 溝 (南から)
4.2区 237 溝 (南から)
5.2区 234 溝 (南から)
6.2区 232 溝 (南東から)
7.2区 228 溝 (南東から)
8.2区 229 落ち込み (北西から)
図版 22 出土遺物
図版 23 出土遺物
図版 24 出土遺物

図版 25 出土遺物
図版 26 出土遺物
図版 27 出土遺物
図版 28 出土遺物
図版 29 出土遺物
図版 30 出土遺物
図版 31 出土遺物
図版 32 出土遺物
図版 33 出土遺物

第1章 調査に至る経緯と経過

本書は、大阪府高槻市において実施した「一般国道170号（十三高槻線）道路築造事業に伴う井尻遺跡埋蔵文化財調査業務委託（その3）」の成果をまとめた報告書である。

井尻遺跡は、一般国道170号（十三高槻線）道路築造事業に先立ち、公益財団法人大阪府文化財センターが平成25年度に実施した試掘調査によって新たに発見・周知された遺跡である。試掘調査では、道路予定範囲のうち、上牧遺跡の南西に隣接するエリアでの遺跡の有無を確認するため、井尻1丁目と国道171号から分岐する地点より南西に約1.2kmの長さの範囲に12箇所のトレンチが設定された。調査の結果、事業区域の北東部に設置した10～12トレンチの3箇所のトレンチにおいて溝、土坑、小穴とともに中世を主体とする多量の遺物が出土したことから遺跡の存在が明らかとなり、「井尻遺跡」と命名された。その後、平成25年11月～平成26年5月の間に道路予定地の第1次調査（その1調査）[公益財団法人大阪府文化財センター2015、以下センターと略記]が、平成27年12月～平成28年5月の間に第2次調査（その2調査）[センター2017]がおこなわれた。今回の発掘調査は第1・2次調査での未調査区を対象としており、一般国道170号（十三高槻線）の築造事業に伴う調査としては第3次となる。調査箇所は6箇所（1～6区）に分かれ、合計の調査面積は3894㎡である（図2）。

調査はまず5月1日より6区の機械掘削を開始し、その後5区・2区・4区・1区・3区の順で調査を進めた。2区と3区と6区では合計3面の、1区・4区・5区では合計2面の遺構面の調査をおこなった。各調査区の最終面では大阪府教育庁文化財保護課による立会を受け、8月31日にすべての調査工

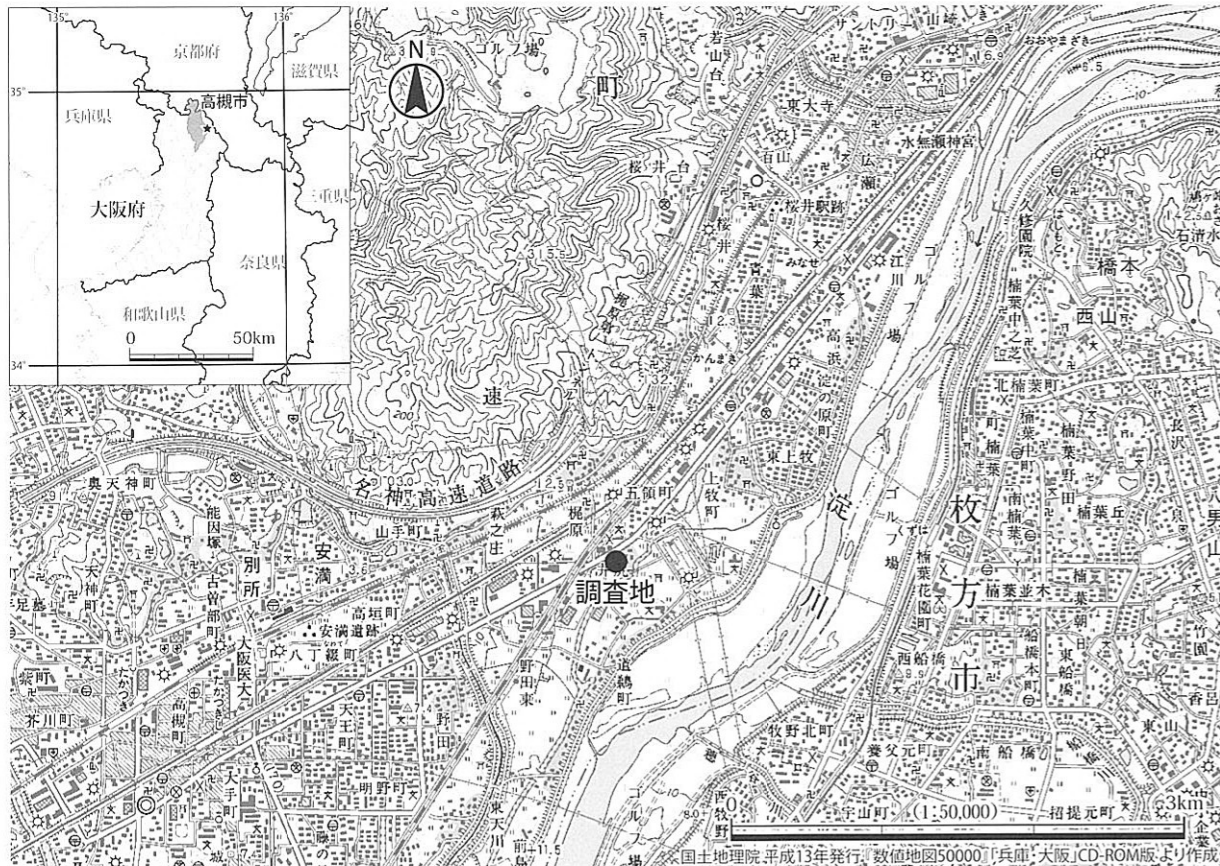


図1 調査地の位置

程を終了した。ただし2区では、電柱の移設ができなかった箇所について、大阪府教育庁文化財保護課から電柱移設後確認調査をするよう指示を受けた。この箇所については、電柱移設後の10月30日・31日の2日間で確認調査をおこなった。また、調査期間中の8月4日には周辺住民の方々に調査成果を広く周知するため現地公開を実施し、当日は80名の参加を得た。公開の場所は後述する2区の南半で、古墳時代の流路を公開した。なお、調査中には遺物洗浄・図面整理などの基礎整理作業をおこなった。

遺物整理作業は平成30年9月3日より開始し、平成30年12月28日までおこない、平成31年3月15日の本報告書刊行をもって作業を完了した。

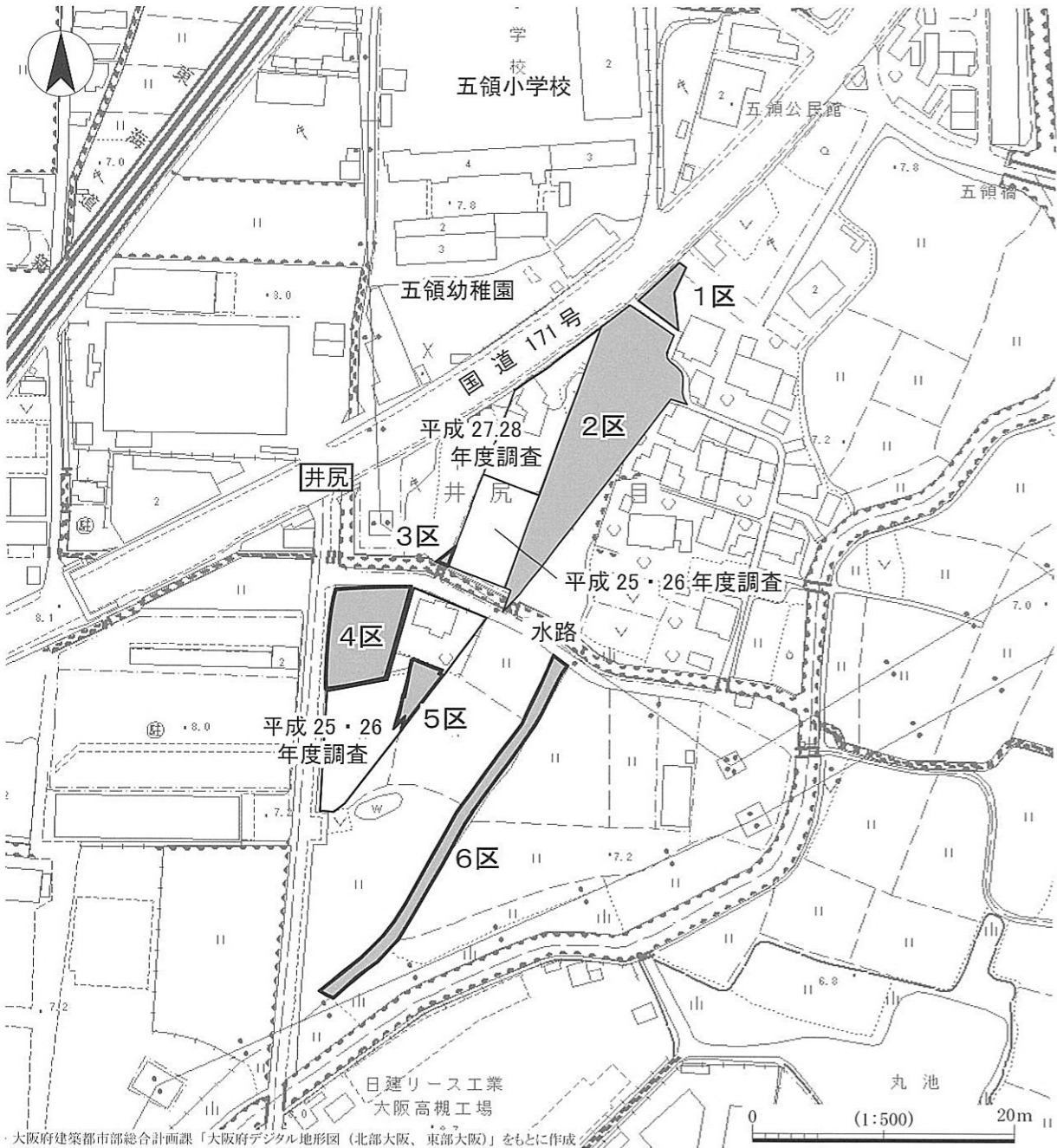


図2 調査区割と既往の調査地

第2章 調査の方法

第1節 発掘調査

(1) 調査区名の設定

調査対象地は6つの区画に分かれており、北東から南西の順で1区から6区の順に調査区番号を付した(図2・4)。

(2) 現地調査

調査地では旧家屋の基礎や木の根、アスファルトなどが残されていたため、これらを機械により除去した。また、場所によっては厚さ約1m程度の盛り土が確認されたため、盛り土についても機械掘削で除去した。その後、旧表土の耕作土層および近世の耕作土層を機械により掘削した。続いてスコップ・鋤簾などを使った人力による遺物包含層の掘削、遺構面の精査によって遺構を検出し、遺構面・遺構の確認・検出および遺物の回収に努めた。遺物の取り上げ、遺構図面の作成、写真撮影などの作業については、当センター作成マニュアル『遺跡調査基本マニュアル』2010に準拠しておこなった。

(3) 地区割り・遺物取り上げ

地区割りについては、世界測地系に則った平面直角座標系第VI系を基準とし、I～Vの大小5段階の区画を設定した(図3・4)。これは大阪府内全域に共通する地区割りである。第I区画は大阪府の南西部を通る $X = -192,000 \text{ m}$ ・ $Y = -88,000 \text{ m}$ を起点に、府域を南北15(A～O)、東西9(0～8)

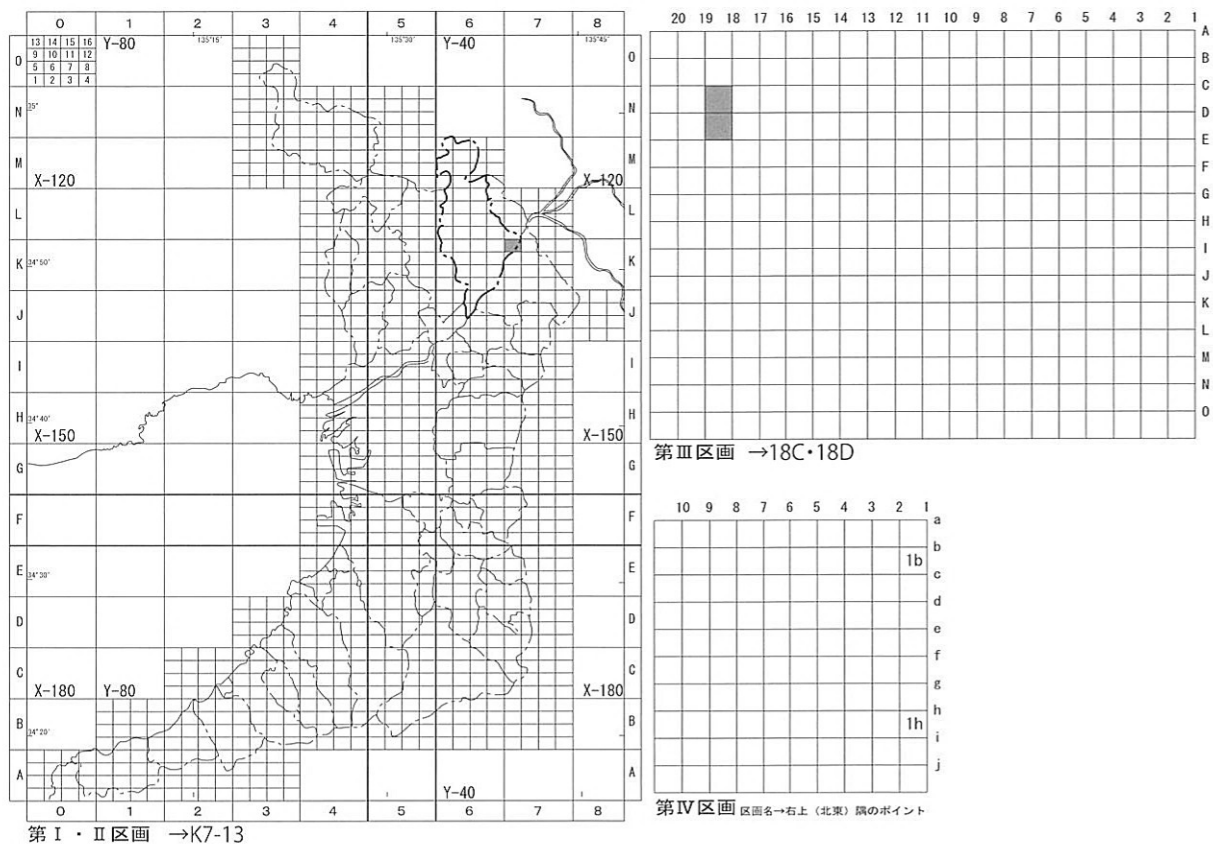


図3 地区割りの方法

区画に分割したもので、一区画は南北6km、東西8kmとなる。第Ⅱ区画は第Ⅰ区画を東西、南北各4分割の、計16区画(1~16)に分けたもので、一区画は縦1.5km、横2.0kmとなる。第Ⅲ区画は第Ⅱ区画を東西20(1~20)分割、南北15(A~O)分割する一辺100mの区画である。第Ⅳ区画は第Ⅲ区画をさらに東西、南北ともに10(東西1~10、南北a~j)分割した一辺10mの区画である。上記の方法で区画した場合、井尻遺跡で使用する第Ⅰ・Ⅱ区画は、「K7(第Ⅰ区画) - 13(第Ⅱ区画)」となり、第Ⅲ区画は「17C・D」「18C・D・E・F」「19D・E・F」となる(図4)。遺物の取り上げ作業は、この地区割りをを用い、基本的に第Ⅳ区画の10m区画ごとにおこなった。遺物取上げ用ラベルへの記入は、煩雑となるため第Ⅰ・Ⅱ区画は省略し、第Ⅲ区画以降を記入した。地区割りの詳細は図4に示した。

(4) 写真撮影

遺構の写真撮影は、6×7カメラ、35mmカメラを使用し、それぞれ黒白フィルム、リバーサルフィルムを用いておこなった。また、写真台帳作成用にデジタルカメラを併用して撮影をおこなった。調査区の全景を撮影するような場合には、高所作業車を使用して高位置からの写真撮影をおこなった。

(5) 遺構図作成

遺構全体の平面測量は、4級基準点を4点設置し、それをもとに100分の1の遺構全体図を作成した。これ以外に、遺物出土状況など各遺構の詳細な図面や、土の堆積状況を示す断面図などについては必要に応じて、20分の1・10分の1の図面を作成した。これらの遺構図面はすべて世界測地系に準拠して作成している。方位は座標北を使用し、水準はすべて東京湾平均海面(T.P.)を用いた。以上の作業で作成した記録図面はA2判で90枚である。

(6) 遺構番号

遺構の種類に関わらず、1番から通し番号で振り、遺構の種類は遺構番号の後ろに付した(例:1溝、2土坑など)。

第2節 整理作業

整理作業の対象となった遺物は、55×35×15cmの収納コンテナで36箱にのぼる。これらの遺物の整理作業を当センターマニュアル『遺跡調査基本マニュアル』2010に準拠しておこなった。

出土遺物は洗浄し、遺物登録台帳と照合できるよう注記作業をおこなった。遺物への注記は、マニユ

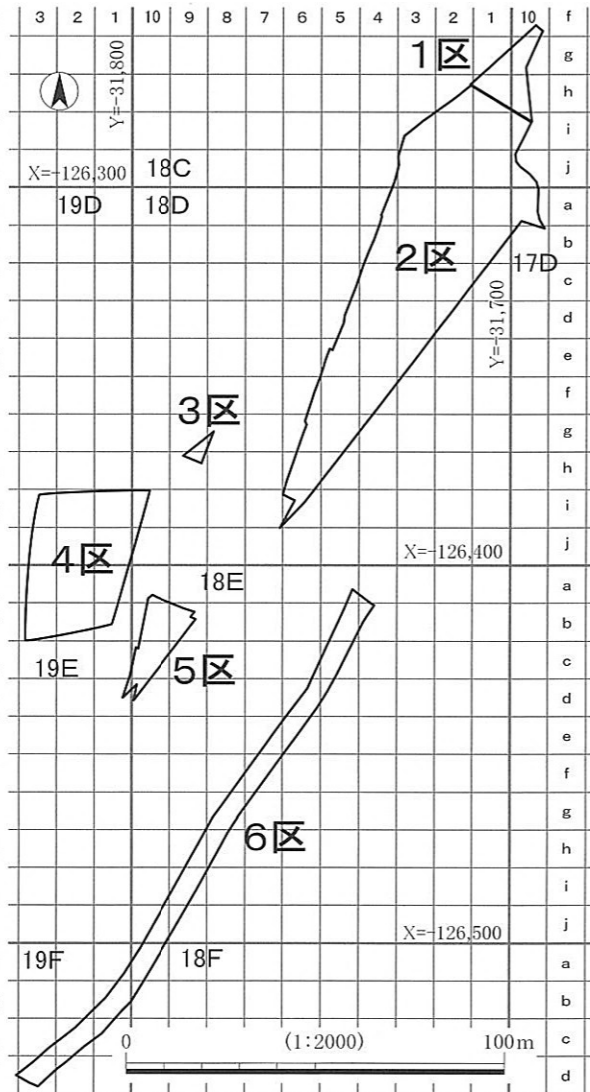


図4 地区割と調査区配置



機械掘削



人力掘削



平面図作成



大阪府教育庁立会



現地説明会（調査区前パネル）



現地説明会（出土遺物展示）



遺物接合



遺物実測

写真1 現地調査および整理作業風景

アルに従い、「イジリ 18—1—□」（□は遺物登録番号）として各遺物に記入した。破片が小さく記入できない場合や木製品などは、登録番号がわかるよう袋にまとめ、ラベルとともに封入した。遺物は登録番号ごとにデジタルカメラで撮影し、台帳に登録した。その後接合作業をおこない、必要に応じて石膏を用いて復元作業をおこなった。同時に実測可能な遺物をピックアップし、順次実測作業をおこない、瓦などについては拓本を採った。遺物実測数は瓦や木製品なども含め約 230 点となった。実測した遺物については、遺物登録台帳とは別に掲載遺物台帳とリンクした実測遺物台帳を作成した。

上記の手順で作成した遺物実測図は、スキャナーで原図を取り込み、adobe 社製 IllustratorCS5 を用いてトレースし、必要に応じてデジタル化した拓本などのデータを貼り込み、挿図を作成した。最終的には実測した遺物のうちの 191 点を本書に掲載することとした。現地調査で作成した遺構図は、遺物同様の手順でデジタルトレースをおこない挿図を作成した。報告書掲載の挿図は、遺構図・遺物実測図ともにデジタルデータによって作成した。現地で撮影した遺構面および個別遺構の写真に関しては、報告書に掲載するものを選別し、デジタル化作業をおこなった。また、出土遺物についても実測作業の後、選別したものを写真撮影し、デジタル化作業をおこなった。遺物写真については、中部調査事務所の写真室において撮影をおこなった。以上の作業と併行して報告文章を作成し、編集作業をおこなった。また、編集作業と併行して出土遺物は、報告書掲載遺物と未掲載遺物に分類し収納作業をおこなった。併せて、現地にて作成した遺構図面や撮影した遺構写真の整理・収納をおこない、これらも台帳に登録した。

第 3 章 遺跡の位置と環境

第 1 節 位置と地理的環境

井尻遺跡は、高槻市の東部に位置し、北を北摂山地、南を淀川に挟まれた、幅約 1 km ほどの狭小な沖積平野上に位置する（図 1・2・5）。井尻の地名は井（灌漑用水路）の尻（末端部）に由来するといわれるが、現在も縦横に走る用水路はまさにこれを物語る。数千年前にはこの付近は淀川の河口であったため、いくつかの流路に分かれ古来より島と呼ばれた中州が発達した。井尻周辺には内ヶ池・大野池など淀川の分流の名残を留める河跡湖と考えられる池もある。このことから、井尻の集落は淀川分流路および、北摂山地から流れる小河川により形成された自然堤防上に立地しているものといえる。現在では山地から流れる小河川のほとんどは水路となっているが、埋没した旧流路や微高地は現在でも不定形な耕地区画として痕跡を留めている。

第 2 節 歴史的環境

今からおよそ 6,400 年前の縄文時代前期の縄文海進最盛期の頃は、この付近が河内湾に注ぐ淀川河口であったと考えられている。弥生時代の遺跡としては、井尻遺跡の 1 km 程西方の桧尾川右岸の安満遺跡が前期から後期まで存続する拠点集落として知られている。井尻遺跡の北東に接する梶原南遺跡では、弥生時代中期の土坑・方形周溝墓、後期の竪穴住居跡や溝などが検出された。東に隣接する上牧遺跡では庄内式期の竪穴建物が検出されている。また、井尻遺跡の北西に位置する梶原西遺跡では中期前

葉の方形周溝墓が約 10 基検出されている。さらにその西に位置する萩之庄南遺跡では、弥生時代末から古墳時代初頭頃の竪穴建物跡や方形周溝墓が検出されている。また、これまでの調査で、井尻遺跡でも弥生時代中期の遺物が確認されている。古墳時代前期にはいと前方後円墳の萩之庄 1 号・2 号墳、方墳の安満宮山古墳が北摂山地中に築かれる。井尻遺跡東隣の上牧遺跡では、古墳時代前期から中期にかけての竪穴建物などの遺構が確認されている。古墳時代後期にはいと、付近の梶原山尾根上において安満山古墳群・梶原古墳群・萩之庄古墳群・磐手杜古墳群などの群集墳が築かれた。また、梶原南遺跡では古墳時代後期の竪穴建物や掘立柱建物が検出されている。

古代の遺跡としては梶原南遺跡で奈良時代の多数の建物群とともに「新屋首乙賣（にいやのおびとおとめ）」と記された木簡や製塩土器、鑄造関連遺物などが発見されている。梶原南遺跡は古代山陽道の駅家のひとつ、大原駅の推定地でもある。北摂山地の裾では 7 世紀後半に梶原寺が創建され、東大寺に瓦を供給した梶原瓦窯跡、萩之庄瓦窯跡などが付属する。梶原寺については『正倉院文書』中に収められた天平勝宝九歳（757 年）の「摂津職解」に記載がある。「摂津職解」には、造東大寺司が摂津職に依頼し、さらに摂津職から梶原寺に東大寺大仏殿歩廊用の瓦 4000 枚の製作を依頼したことが書かれる。現在でも畑山神社の境内には塔心礎をはじめとする礎石が幾つか残っている。遺跡付近における条里地割は、梶原西遺跡周辺にその痕跡を認めるのみで、井尻遺跡の西端を画する道路に踏襲された土地区画のラインが、その条里地割に含まれる可能性はあるが、それ以東の範囲には条里の痕跡らしい土地区画は確認できない。

当遺跡の東隣の上牧遺跡では大量の瓦器椀が良好な状態で発見され、瓦器椀編年の基準資料となった。また、井尻遺跡から西に離れた安満遺跡でも 13 世紀から 15 世紀の集落が確認されている。調査事例以外に目を向けると、文献史料によれば 9 世紀末以降中世にかけては、淀川沿いには牧が散在していた。『小右記』に見られる「楠葉牧」はこの付近までも含むという説もある。他に「鳥飼牧」の名や、応永 4 年（1397 年）には「井尻牧」の名も見える。周辺には今も「上牧」の他、「三箇牧」「牧野」「牧田」「河原牧」などの地名が残る。淀川流域には牧以外に藤原氏の荘園も多くあり、これらは 13 世紀初頭以降、春日若宮に寄進されていく。今も淀川沿いに春日系統の神社が多いのはその名残である。井尻遺跡の南側の淀川河川敷は「鶴殿の葦原」として昭和 20 年（1945 年）まで宮内庁雅楽寮に葦を納めていた土地で、その地名は紀貫之の『土佐日記』にも宿泊地として見える。14 世紀以降には武士による荘園支配が進み、この地域では真上氏、溝咋氏が有力御家人として勢力をふるった。鎌倉時代末、真上氏が滅びると芥川氏が西国御家人として台頭してくる。その後は三好氏、高山氏らの戦国大名へと支配は受け継がれた。

第 3 節 これまでの調査について

すでに述べたように井尻遺跡は、平成 25 年におこなわれた試掘調査によって、その存在が明らかになった。これまでの調査は、平成 25 年 11 月～平成 26 年 5 月におこなわれたものが第 1 次調査（その 1 調査）[センター 2015]、平成 27 年 12 月～平成 28 年 5 月におこなわれたものが第 2 次調査（その 2 調査）[センター 2017] で、今回報告する調査が第 3 次調査となる。

第 1 次調査では中世の遺構としては、溝によって方形に区画された 11 世紀後半の屋敷地と考えられる遺構が検出され、溝の中からは大量に投棄された黒色土器・瓦器・土師器が共伴して出土した。出土資料は時期的に瓦器が出現する直前のもので、同時代性を有する資料群として重要である。また、青磁

碗や青白磁盒子などを副葬した13世紀初頭頃の土壙墓も2基発見されている。そして、13世紀後半には現代に踏襲される水路・耕地区画が成立することが確認された。他に、弥生時代中期の土坑や古墳時代中期の溝なども検出されており、少なくとも弥生時代中期以降、当地での人々の営みがあったことが明らかにされている。第2次調査では中世の遺構としては、11世紀～13世紀代の掘立柱建物・溝・土坑が検出されている。古代の遺構としては、奈良時代から平安時代（8～10世紀）の掘立柱建物・溝・土坑などが検出されている。特に当遺跡から離れているにも関わらず、梶原寺の所用瓦がまとまって出土していることは注目に値する。古墳時代の遺構としては、古墳時代中期（5世紀）の掘立柱建物・溝・落ち込みなどが検出されている。特筆すべきは、調査区の北端で大量の土師器高杯・滑石製模造品・鉄器などが出土した溝が検出されたことで、この付近が古墳時代中期の祭祀場であった可能性がある。

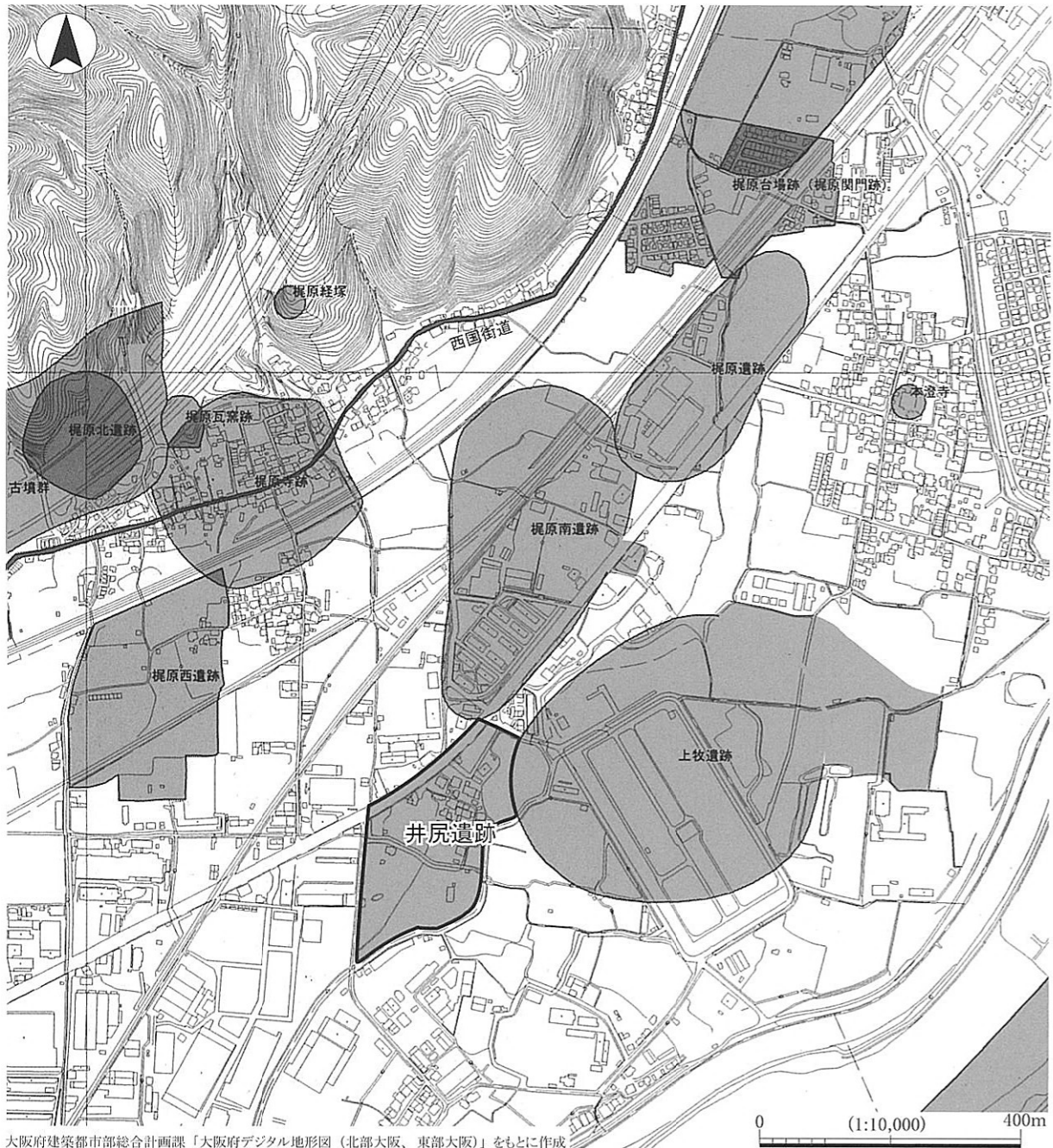


図5 周辺の遺跡分布図

第4章 調査成果

第1節 基本層序

調査では現代の盛り土およびその下層の近世以降の耕作土層（第1層）を機械（バックホー）によって掘削した。それ以下を人力により掘削し、上から下へ第2層、第3層、第4層・・・と順番に層位番号を付与した（図6～9、図版1～3）。

盛り土：1区、2区北半、3区、4区で認められた。国土地理院地図（GSI Maps）の1948年の空中写真を参照する限り上記の調査区は水田であるため、これ以降に宅地化・道路化するにあたって施された盛り土と考えられる。層厚20～90cm前後を測る。宅地化・道路化がなされていない2区南半、5区、6区には盛り土は認められない。

第1層（近世以降の耕作土）：1区、2区北半、3区では盛り土の直下、2区南半、5区、6区では現地表面直下で確認できる。上層である褐色のシルト層（耕作土）と、下層である灰黄色の細砂（床土）に分かれる。6区以外では上層は近世以降に削平されたためか、下層のみが残存していた。上下層共に17世紀以降の遺物を包含する。

第2層：第2層は黄灰色ないしは黄褐色の極細砂または細砂で構成される。層厚は5cm～20cm前後である。第2層は南側の低所にあたる4・5・6区では複数に細分できる。中世後半以降の耕作土層と考えられる。

第3層：第3層は灰黄の細砂～シルトを主体とする。層厚は15～20cm前後である。層の上部にはマンガ斑の沈着が顕著にみられる。第3層は第2層同様、南側の低所にあたる4・5・6区では複数に細分できる。第3層を除去した面を第1面として調査した。出土遺物から中世（12～15世紀）の耕作土層と考えられる。

第4層：褐灰色ないしは暗褐色の極細砂または細砂で構成される安定した土壌である。第4層は2区南半、3・6区の低地部分で2層に分かれ、上層を第4-1層、下層を第4-2層とした。また、1区と2区の北半、3区でも第4層が2層に分かれ、便宜上第4-1・4-2層とした。しかし後者の第4-2層は前者のそれと異なり、やや不安定な中粒砂を含む層であるため、同一であるかどうかは確言できない。第4-1層の層厚は15～20cm前後、第4-2層の層厚は20cm前後である。第4-1層を除去した面を第2面として、第4-2層を除去した面を第3面として調査した。第4-1層中には古墳時代の須恵器・土師器から黒色土器・瓦器が含まれており、その上限は5世紀代に下限は11世紀代にもとめることができる。第4-2層は第4-1層と比べるとやや淡い褐色を呈する層である。層中には古代の土器や瓦器は含まれず、古墳時代の土器のみである。

第5層：青灰色の細砂から極細砂で構成される。無遺物層である。1・2・6区では確認できたが、これより西側の3・4・5区では確認できなかった。

第6層：褐色の極細砂からシルトで構成される。3・4・5区で確認できたが、これより東側の1・2・6区では確認できなかった。以上のことを踏まえると、直接の連続関係は捉えられなかったが、第5層と第6層は同一である可能性が高く、西側で褐色が強くなり粒径が細くなるようである。

第7層：黒褐色のシルトで構成される。無遺物層である。4・5区および、2区の近世水路により削平

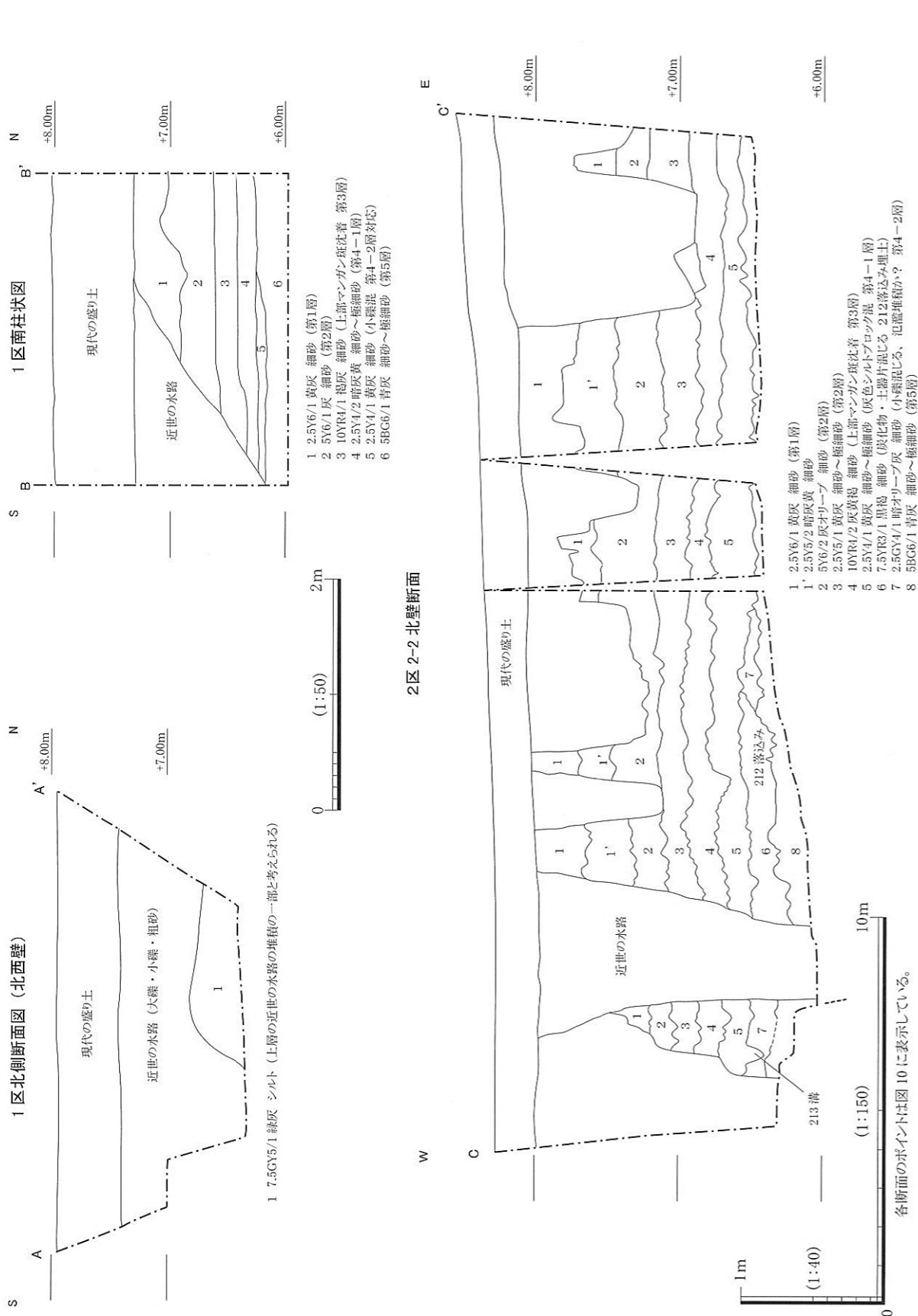


図6 1区西壁・2区北壁断面図

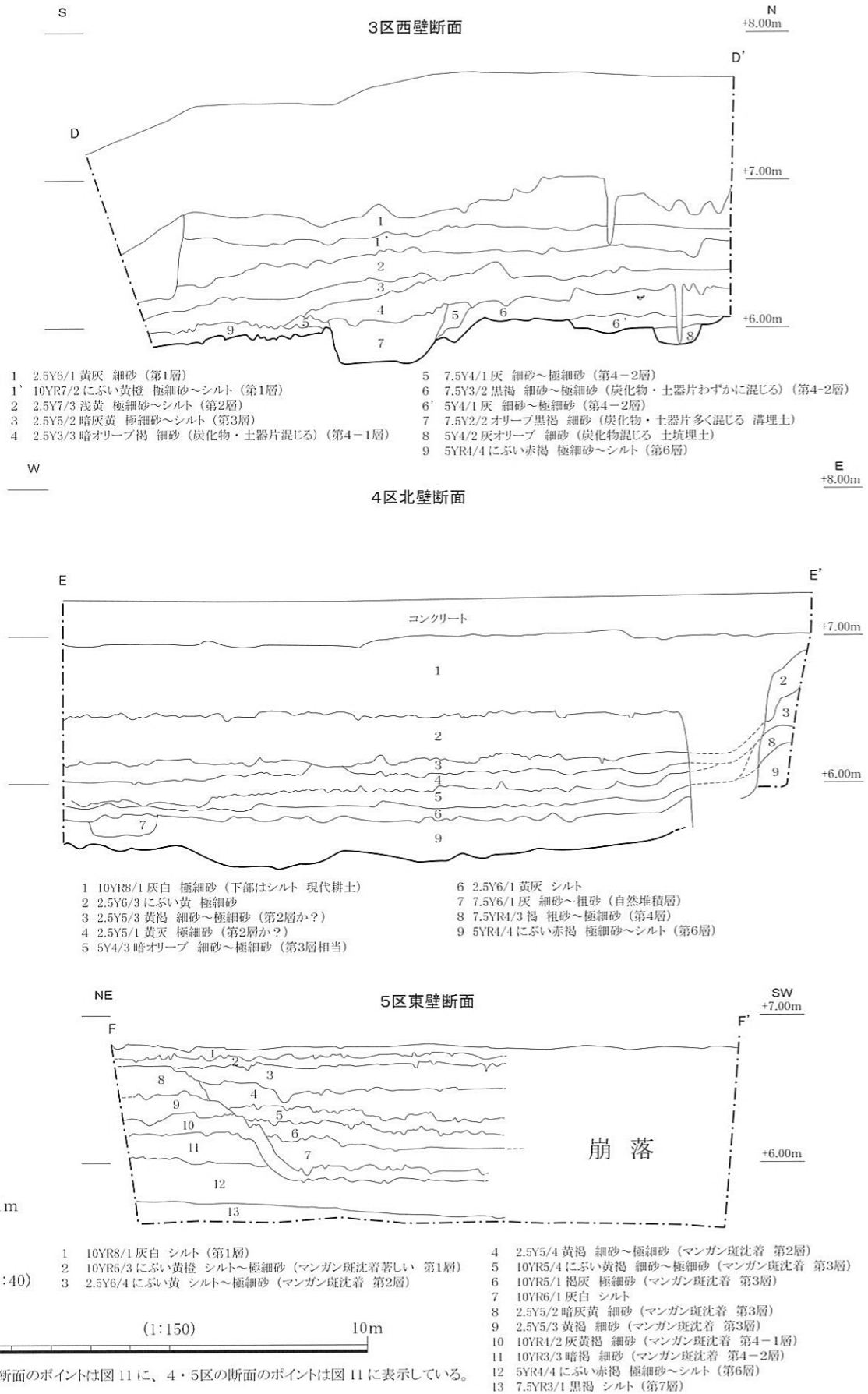


図7 3区西壁・4区北壁・5区東壁断面図

6区北壁断面

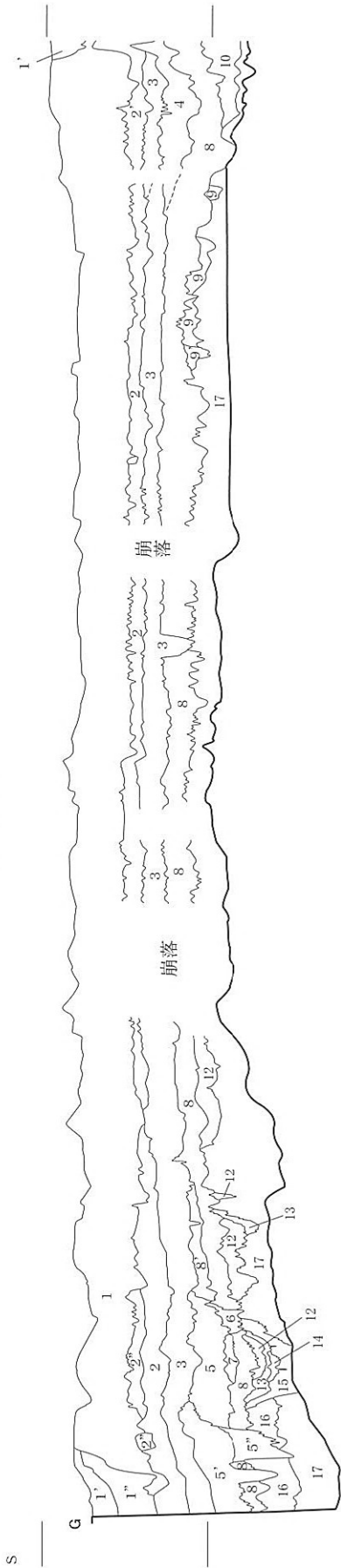
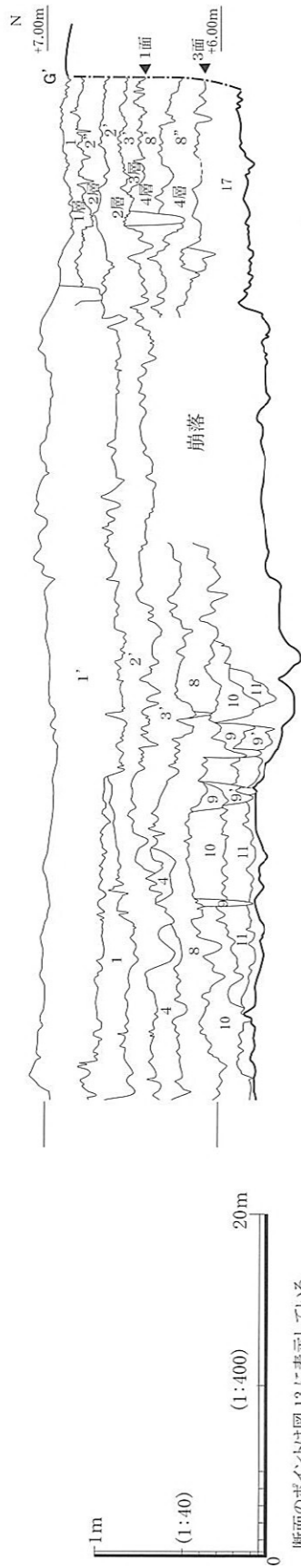


図8 6区東壁断面図



断面のポイントは図13に表示している。

- | | | | |
|-----|---------------|---------|-------------------------------|
| 1 | 10YR6/1 褐灰 | シルト | (層全体にマンガン斑沈着・止水状態の堆積層か?) |
| 1' | 2.5Y3/1 黒褐 | 細砂 | (礫混・現代耕作土と盛土の混成土・最近形成された層) |
| 1" | 10YR5/1 褐灰 | シルト | (近世の耕作土) |
| 2 | 2.5Y5/3 黄褐 | 極細砂 | 〜細砂 |
| 2' | 10YR5/2 灰黄褐 | 微砂混シルト | マンガン斑含む・(近世の耕作土・第2層) |
| 2" | 10YR5/3 黄褐 | 微砂混シルト | マンガン斑含む・(近世の耕作土・第2層) |
| 3 | 2.5Y5/2 暗灰黄 | 細砂 | (層の上部にマンガン斑沈着・近世の耕作土・第3層) |
| 3' | 10YR5/1 褐灰 | 〜灰黄褐 | 微砂混シルト |
| 4 | 2.5Y5/2 暗灰黄 | 極細砂 | (層の上部にマンガン斑沈着・3と4の違いは粒径の違いか?) |
| 5 | 5Y6/1 灰 | シルト | (層全体にマンガン斑沈着・止水状態の堆積層か?) |
| 5' | 5Y5/2 灰 | オリープ | シルト |
| 5" | N5/ 灰 | シルト | (止水状態の堆積層か?) |
| 6 | 2.5Y5/2 灰黄 | 細砂 | (φ1cm程度の砂礫混・第3層) |
| 7 | 10YR4/3 にぶい黄褐 | 細砂 | 〜極細砂 |
| 8 | 2.5Y4/2 暗灰黄 | 細砂 | (第4-1層) |
| 8' | 10YR4/2 灰黄褐 | 微砂混 | 〜微砂 |
| 8" | 10YR4/1 褐灰 | 〜灰黄褐 | 微砂混 |
| 9 | 7.5YR4/2 灰褐 | 細砂 | |
| 9' | 7.5YR4/1 褐灰 | 細砂 | |
| 10 | 10YR4/3 にぶい黄褐 | 細砂 | |
| 10' | 10YR4/3 にぶい黄褐 | しまったシルト | (古墳包含層・第4-1層) |
| 11 | 10YR5/3 にぶい黄褐 | 細砂 | (灰白色の極細砂ブロック混じる) |
| 12 | 2.5Y4/1 黄灰 | 細砂 | 〜極細砂 |
| 13 | 5Y4/1 灰 | 極細砂 | (第4-2層) |
| 14 | 7.5Y4/1 灰 | シルト | |
| 15 | 7.5Y3/1 オリーブ | 黒 | シルト |
| 16 | 2.5GY5/1 オリーブ | 灰 | シルト |
| 17 | 5B/G6/1 青灰 | 細砂 | 〜極細砂 |

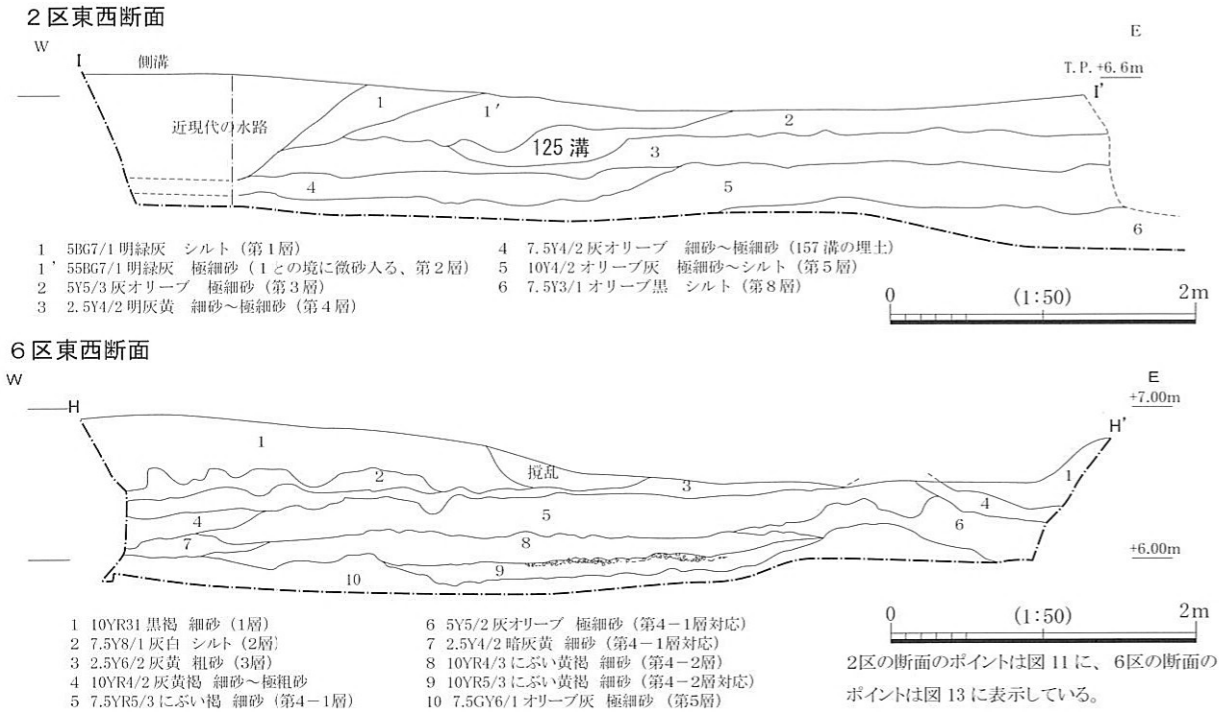


図9 2区・6区東西断面図

を受けた旧地盤にて確認した。

第2節 検出された遺構面

(1) 第1面

中世後半の遺物包含層である第3層を除去し検出された遺構面で、概ね第4層の上面にあたる。ただし、6区の東側では第4層が削平され無遺物層である第6層以下が露出している箇所もあった。今回報告する第1面は、第1次調査の第4-1面、第2次調査の第3面に相当する。これより上面は第2層中から18世紀後半の陶磁器が出土したため、遺構面の調査はおこなっていない。

① 1区 (図10)

1区北側調査区は全体が近世以降の水路の中にあたり、遺構面は残存していなかった。1区南側調査区では土坑5基を検出した。出土遺物は土師器・瓦器の細片のみであった。

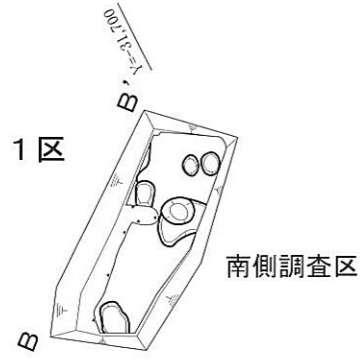
② 2区 (図10、図版4-1・2、図版5-1)

2区は調査区の中央を縦断する形で近世以降の水路が走っており、遺構面は水路の両側のみで確認できた。検出した遺構は北半では土坑と溝が主であるが、南半では溝のみである。これはおそらく地表面の高低差に関係するとみられ、南側は排水目的の溝が数多伸びていたとみられる。また、2区自体が直近の水田区画そのもので、2区の西壁とこれまでの調査区(第1次・第2次調査)との境には、近世の大畦畔とそれに伴う水路が伸びていたと考えられる(図9)。

133 土坑 (図10・14) 2区の中央部西側で検出した土坑である。土坑の東半分は近世の水路により削平されており、残存しているのは西側の半分のみである。検出面での規模は直径1.8m、深さ30cmである。133土坑からは8・9(図17)の遺物が出土している。8は瓦器碗の底部片である。高台の形状から13世紀前半のものと考えられる。9は土師器皿で、時期は10世紀後半である。



北側調査区



1区

南側調査区

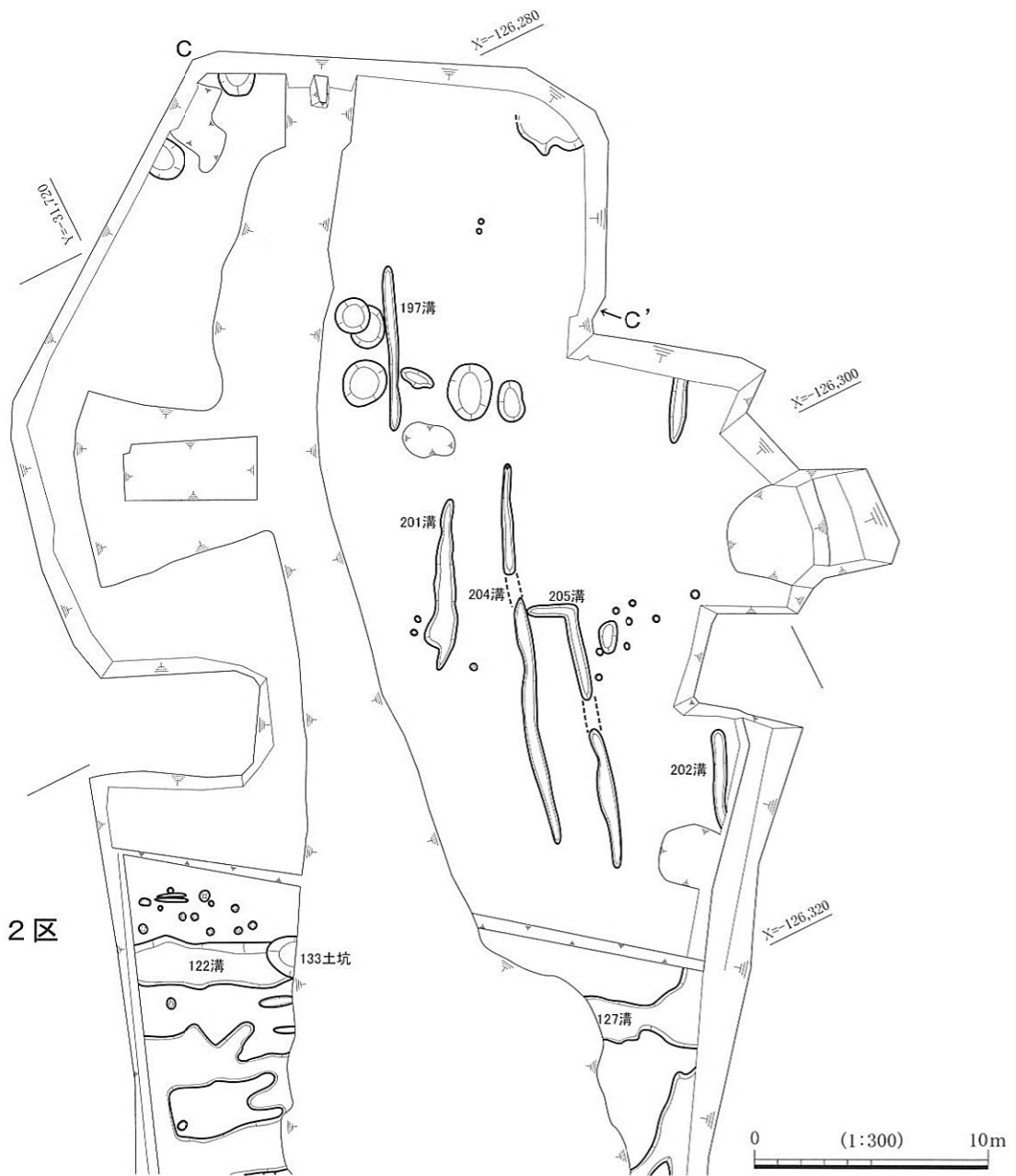


図10 1区・2区北半第1面遺構配置図

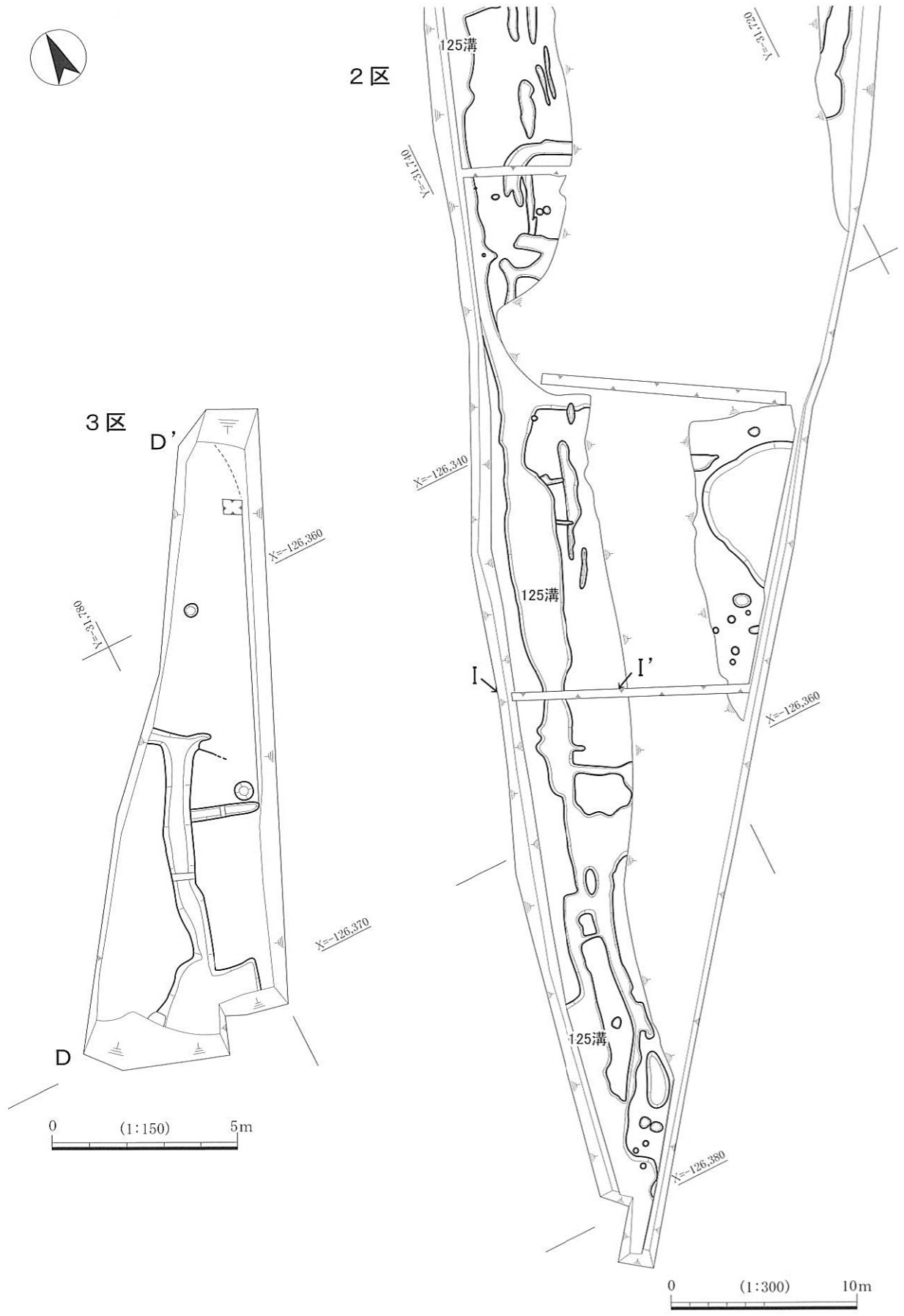


图 11 2区南半・3区第1面遺構配置図

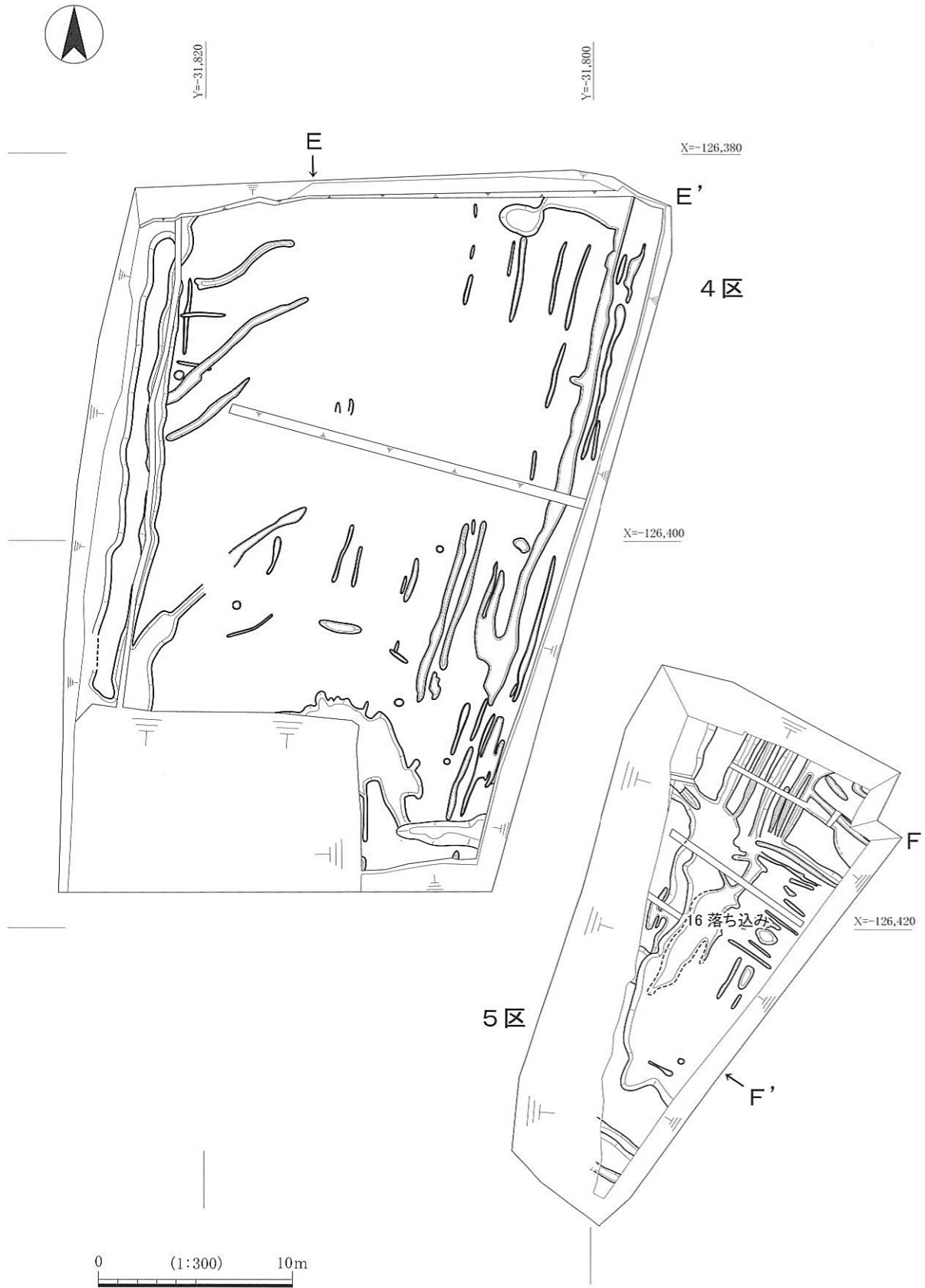


图 12 4区・5区第1面遺構配置图

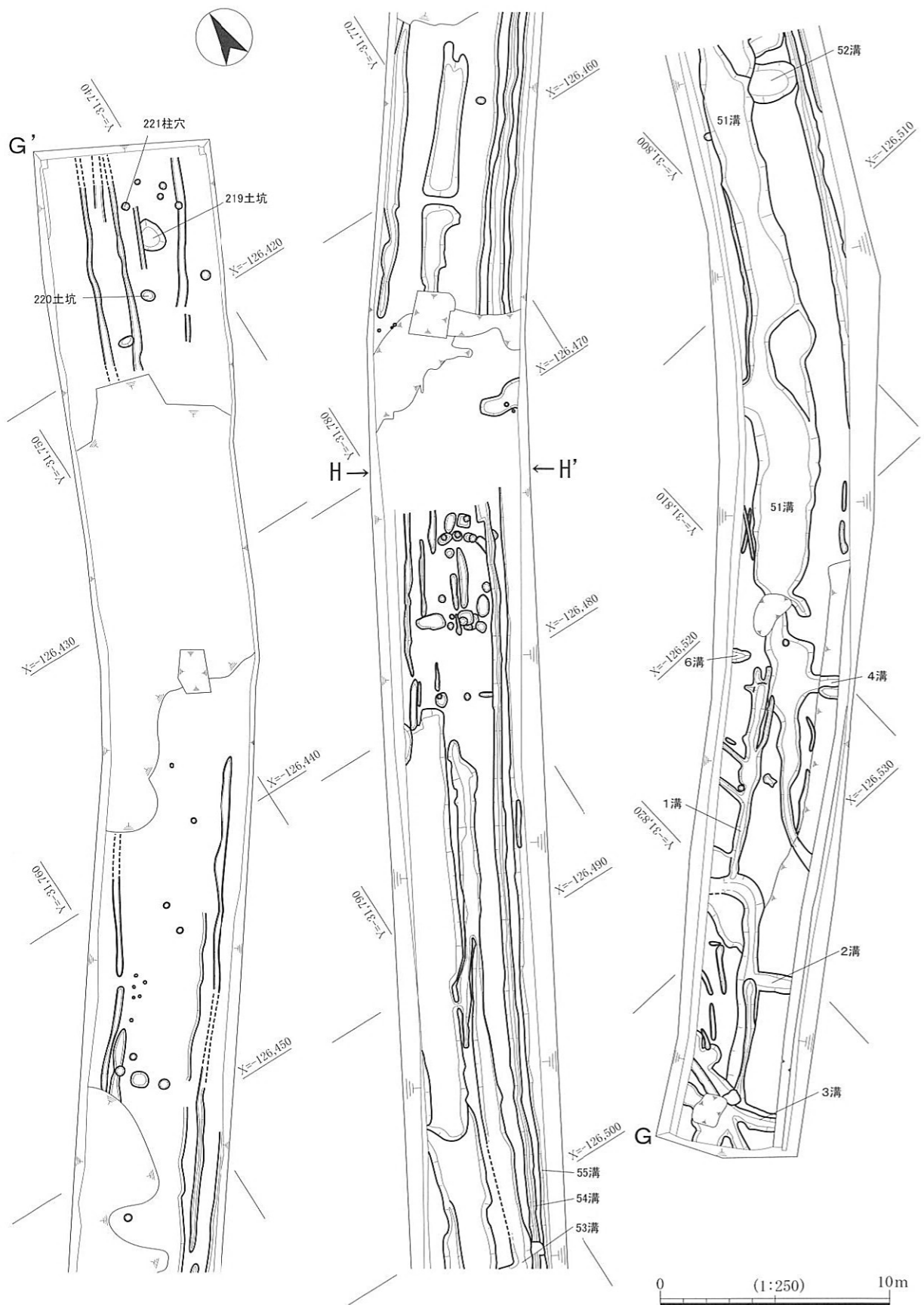


图 13 6区第1面遺構配置図

122 溝 (図 10・14) 2区の中央部西側で検出した溝である。検出面での規模は最大幅 1.9 m、最も深い東端で深さ 15cm を測る。溝の東端は 133 土坑によって削平されている。この溝をほぼ直線上に伸ばせば 127 溝に繋がるため、近世の水路によって大きく削平されているものの、本来は 122 溝と 127 溝は一続きだった可能性が考えられる。122 溝からは 12・18 (図 17) の遺物が出土している。12 は平瓦片で 8・9 世紀代のものか。18 は須恵器播鉢の底部片である。東播系の播鉢と考えられるが、断面三角形の高台を貼り付けている点が通有の東播系播鉢と異なる。

125 溝 (図 11) 2区の南半西側で検出した溝で、ほぼ調査区境と並行に走る。長大な溝で 2 区の北半で調査区外に出るまでほぼ 70 m 分確認した。この溝の西側には畦畔があったものと考えられるが、上層の 1・2 層で削平されているため残存はしていない。調査区そのものが、現代の水田区画 1 つ分であるため、その区画の初源を示す溝といえる。ただし、出土した遺物は瓦器碗の細片や土師器皿の細片ばかりで時期を確定できるものはなかった。

127 溝 (図 10・14) 2区の中央部東側で検出した溝である。前述したようにこの溝は 122 溝と一続きであった可能性が考えられる。検出面での規模は広がっている東端で幅 3.0 m、最も深い部分で深さ 16cm を測る。127 溝からは 1～3 (図 17) の遺物が出土している。1 (図版 23) は白磁碗Ⅳ類の高台片である。2 は土師器皿の口縁部から胴部にかけての破片である。11 世紀前半のものか。3 は瓦器碗の口縁から胴部の破片で、13 世紀前代のものか。

204・205 溝 (図 10・14、図版 8－4) 2区の北側で検出した溝である。この 2 条の溝は並行しており、埋土もほぼ似通うことから同時併存していたとみられる。また、204 溝の西の 201 溝、北西の 197 溝、205 溝の東の 202 溝もこれらの溝と並行しているため、同時併存していたと考えられる。検出面での規模は 204 溝が最大幅 0.6 m、205 溝が最大幅 0.8 m で、深さはどちらの溝も概ね 8 cm である。204 溝からは 20 (図 17) の土師器皿が、205 溝からは 7 (図 17) の土師器皿が出土している。7・20 はいずれも 12 世紀前半のものである。20 は溝の中に恣意的に置かれたような状態で出土したため (図 14、図版 8－4)、土器の時期は溝が機能した時期を表しているといえる。

③ 3区 (図 11、図版 6－1)

3区では南北正方位から東に 10° 前後傾いた向きの溝と、それに直交する溝、土坑 2 基を検出している。遺構内から時期を決定付ける遺物が出土していないため、各遺構の正確な時期は不明である。

④ 4区 (図 12、図版 6－2)

4区では 3区同様、南北正方位から東に 10° 前後傾いた向きの溝を多数と、南北正方位から東に 60° 前後傾いた向きの溝を 4 条検出している。遺構の重複関係からみて後者の溝が前者の溝に先行するようである。各遺構の正確な時期は不明だが、第 1 面の遺構検出時に第 3 層中から 29・38 (図 18) の遺物が出土している。29 は黒色土器 B 類碗の底部片で 10 世紀後半のものである。38 は瓦器碗の口縁部片で 14 世紀代のものと考えられる。

⑤ 5区 (図 12、図版 5－2)

5区でも 3区・4区同様、南北正方位から東に 10° 前後傾いた向きの溝と、それに直交する溝を多数検出した。溝は耕作に伴うものとみられ、溝内の埋土に含まれる遺物は土師器や瓦器の細片が殆どであった。

16 落ち込み (図 12) 5区の中央部分で検出した落ち込みである。5区は周辺から中央に向かって落ち込んでおり、16 落ち込みはその最深部分である。地形的に見て北側の溝からの排水がこの落ち込み

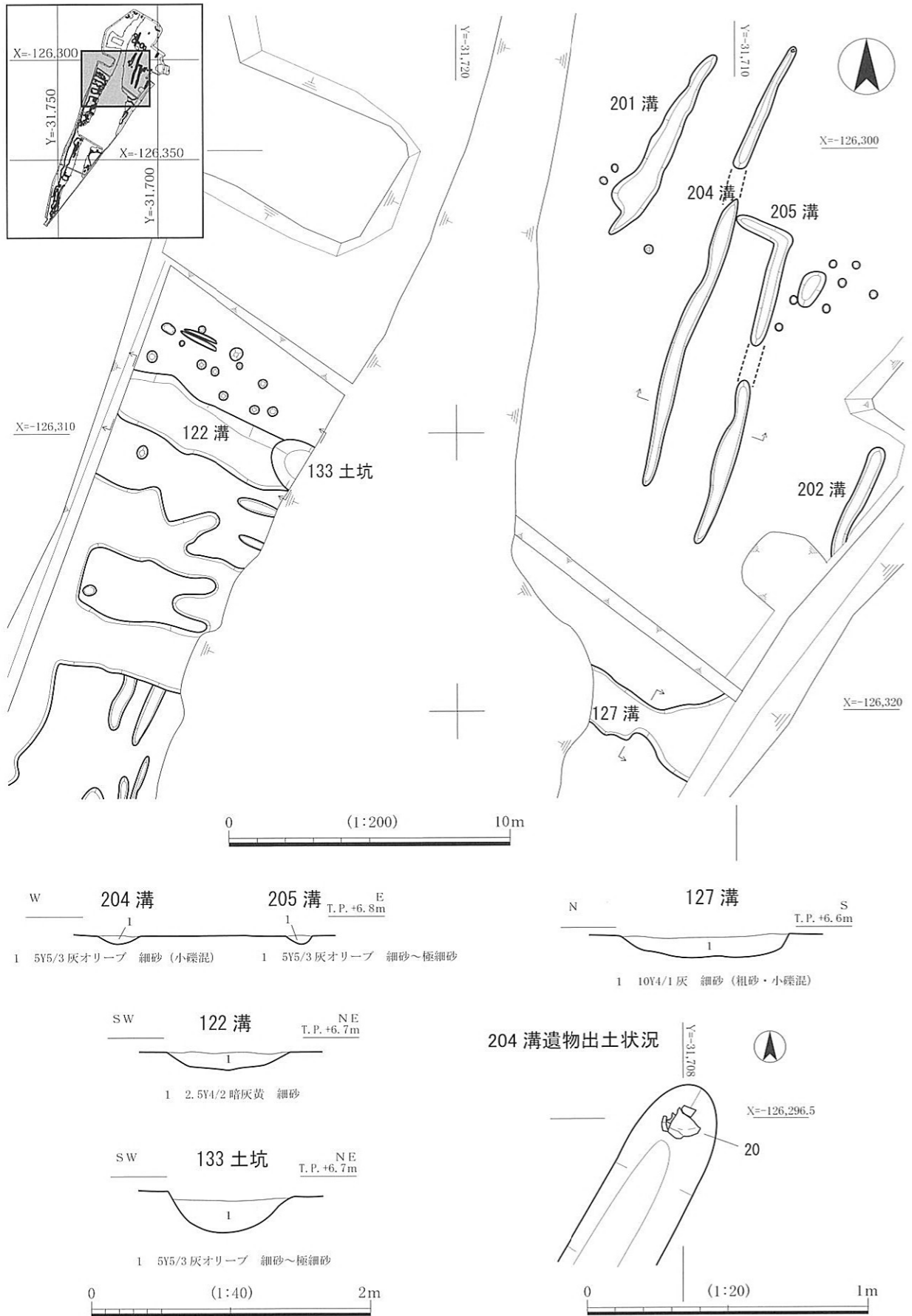


図 14 2区第1面遺構平・断面図

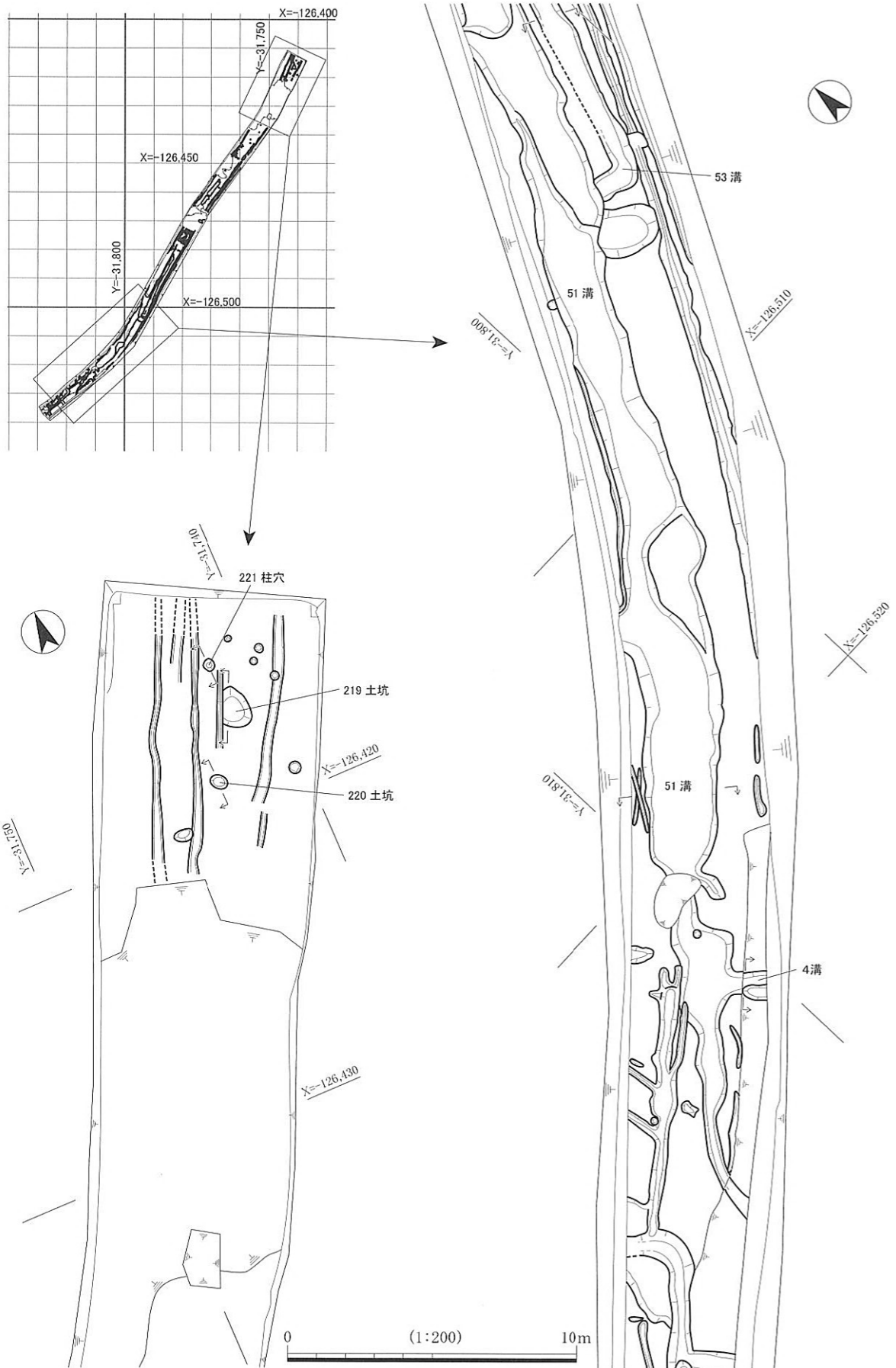


图 15 6区第1面遺構平面图

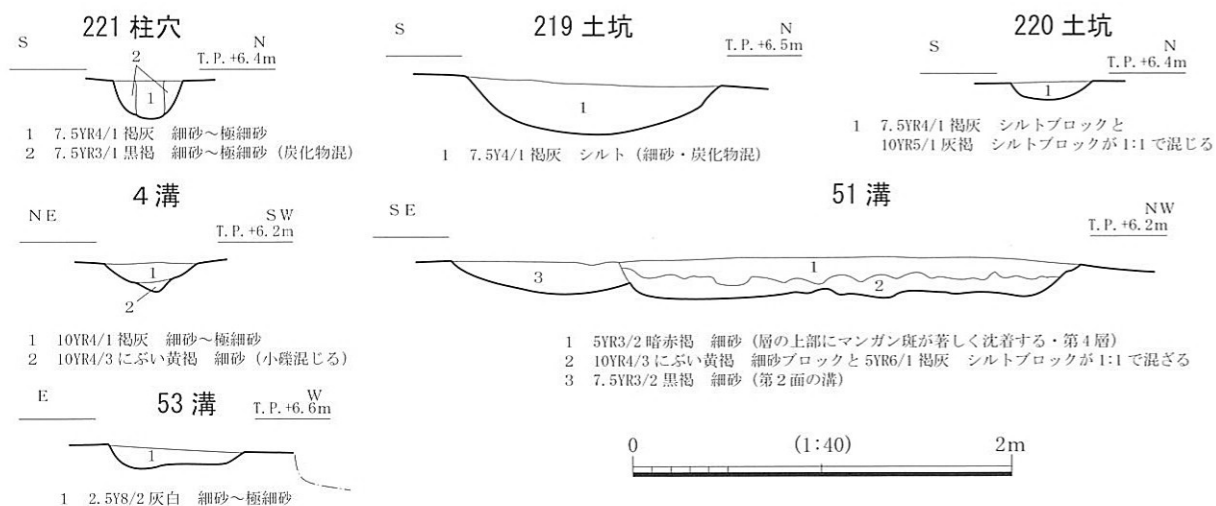


図 16 6区遺構断面図

に流れ込んだものと想像される。また、この落ち込みは下面で検出した 29 溝の埋没過程の最終段階と捉えることもできる。16 落ち込みからは 13・17・22・23 (図 17) の遺物が出土している。13 は瓦器碗で高台の形状から 12 世紀代のもの、17 は土師器皿で 11 世紀の前半のもの、22・23 は瓦質土器の羽釜、おそらく三足の脚付きで 15 世紀代のものである。

⑥ 6区 (図 13、図版 6-3、図版 7-1~3)

6区は調査前、南北正方位から東に約 30° 振れた方向に走る農道であった。この農道の方向は、近辺の水田区画の方向と同一であり、この区画がいつまで遡り得るかが今回の調査で明らかになった。検出した遺構の殆どは溝である。

219 土坑 (図 15・16) 6区の北端で検出した土坑である。いびつな円形の土坑で検出面での規模は直径が 1.3 m と大きい。埋土中に土器の細片や炭化物を多く含む。219 土坑からは 5・6 (図 17) の遺物が出土している。5・6 は土師器皿の破片で、5 は 11 世紀前半、6 は 11 世紀後半のものである。

220 土坑 (図 15・16) 6区の北端で検出した土坑である。平面形は楕円形で検出面での規模は長軸が 65cm、短軸が 45cm である。埋土は褐灰色のシルトブロックで構成されており、人為的に埋められたものといえる。220 土坑からは 21 (図 17、図版 24) の須恵器鉢が出土している。21 は篠窯産須恵器で 10 世紀後半のものである。後述するように第 1 面の遺構の時期は 12~15 世紀と考えられるため、21 の鉢は土坑が埋め戻される際に周辺の包含層から混入したものとみられる。

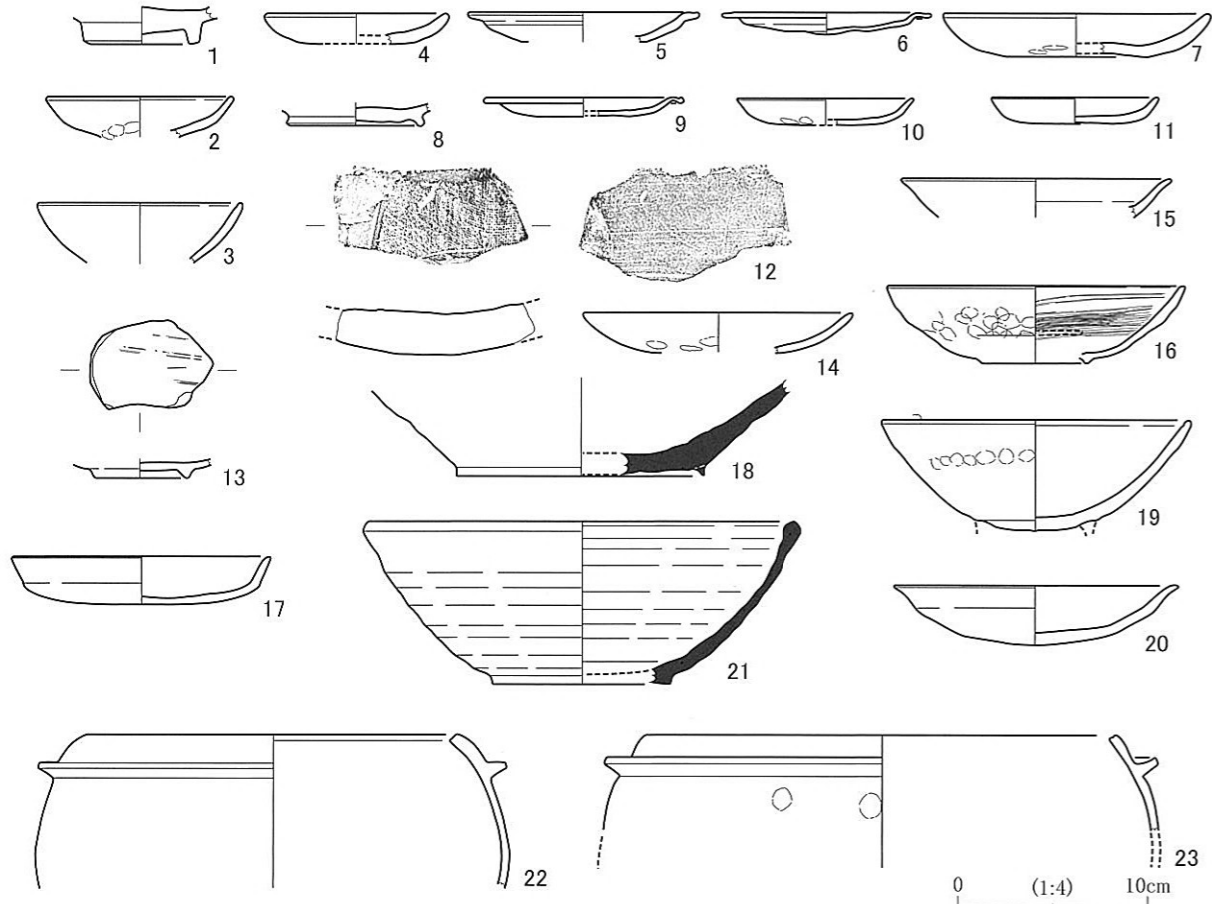
221 柱穴 (図 15・16、図版 8-3) 6区の北端で検出した柱穴である。平面形は円形で検出面での規模は直径 30cm である。中心に柱痕跡が残る。221 土坑からは 19 (図 17) の瓦器碗が出土している。13 世紀前半のものと考えられる。

4 溝 (図 15・16) 6区の南側で検出した溝である。検出面での規模は最大幅 0.7 m、深さ 16cm である。後述する 51 溝からの排水を南西に流す役割があったとみられることから、51 溝と一体であった可能性がある。4 溝からは 14 (図 17) の土師器皿が出土している。14 は 11 世紀後半のものと考えられる。

51 溝 (図 15・16、図版 8-1) 6区の南端近くから中央部にかけて検出した長大な溝で、北西端は調査区外に伸びる。検出面での規模は最大幅 2.8 m、最も深い部分で深さ 25cm を測る。調査前は農道であった 6 区の方角とほぼ同じ方向に走る。このことから、51 溝の開削時期が現今の農道の地割の初源を示すものとみられる。51 溝からは 10・11・15・16 (図 17) の遺物が出土している。10・11 は土師器皿の口縁部から胴部の破片で 13 世紀前半のもの、15 (図版 23) は白磁皿の口縁部片で 12 世

紀前半のもの、16は瓦器碗で13世紀前半のもの。伝世の可能性が考えられる白磁皿が12世紀代で、残りの土師器・瓦器碗はいずれも13世紀代前半となる。

53溝(図15・16、図版8-2) 6区の中央部で検出した溝である。検出面での規模は最大幅1.0m、最も深い部分で深さ15cmを測る。上述の51溝に先行するものの、方向はほぼ同じであるため、開削



1～3: 127溝、4: 53溝、5・6: 219土坑、7: 205溝、8・9: 133土坑、10・11・15・16: 51溝、12・18: 122溝
13・17・22・23: 16落ち込み、14: 4溝、19: 221柱穴、20: 204溝、21: 220土坑、22: 61柱穴

図17 第1面検出遺構内出土遺物

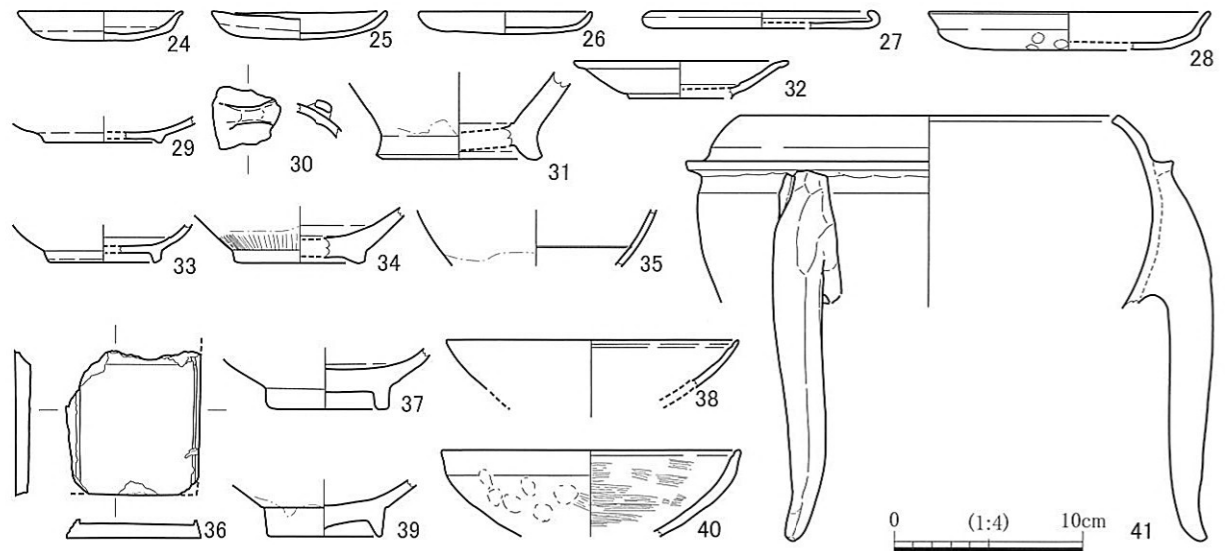


図18 第1面遺構検出時出土遺物(第3層出土遺物)

時期は近接している可能性がある。53 溝からは 4 (図 17) の土師器皿が出土している。4 は 13 世紀前半のものと考えられる。

⑦包含層出土遺物 第 1 面の遺構検出時、すなわち第 3 層掘削時に 24～41 (図 18) の遺物が出土した。24～28 は土師器皿で 24～26 は 14 世紀代、27 は 12 世紀前半、28 は 10 世紀後半のもの。29 と 38 は 4 区の項で紹介した。30 (図版 23) は白磁四耳壺の耳部片、31 (図版 23) も白磁四耳壺の底部片、ともに 12 世紀後半のもの。32 (図版 23) は白磁皿、33・35 (図版 23) は白磁碗Ⅱ類の底部片と胴部片、34 (図版 23) は白磁碗Ⅳ類の底部片、37 (図版 23) は青磁碗の底部片で龍泉窯の倣製品とみられる。39 (図版 23) は白磁碗Ⅴ類の底部片である。以上の輸入陶磁器はいずれも 12 世紀代のもの。40 は瓦器碗の口縁部から胴部にかけての破片で 13 世紀代のもの。36 (図版 22) は石製の硯片で陸の部分が 9 割近く残るが、海の部分は上部が僅かに残るのみである。41 (図版 22) は瓦質土器の三足羽釜で 15 世紀代のもの。以上のように第 3 層出土遺物は 12 世紀前半を上限として、下限は 15 世紀代に求めることができる。第 1 面で検出された遺構の多くが溝であることから、第 3 層は 12 世紀から 15 世紀までの耕作土層といえよう。

(2) 第 2 面

古墳時代から中世前期の遺物包含層である第 4-1 層を除去した遺構検出面で、第 4-2 層の上面または、無遺物層である第 5 層ないしは第 6 層の上面になる。全調査区を通じていえるのは、第 2 面で検出した遺構の多くが、溝と落ち込みであったことである。ただし 2 区の北側で井戸が、2 区の中央北西側と 6 区の中央北側では小規模な柱穴や土坑が集中してみられた。第 2 面は第 1 次調査の第 5・6 面、第 2 次調査の第 4 面に相当する。

① 1 区 (図 19、図版 11-1)

1 区では南側調査区で土坑 2 基を検出したが、出土遺物は須恵器や土師器の細片ばかりであったため、遺構の明確な時期はわからない。

② 2 区 (図 19・20、図版 8-5、図版 9-1)

2 区は第 1 面同様、調査区の中央を縦断する形で近世の水路が走っており、遺構面は水路の両側のみで確認できた。検出した遺構は溝と落ち込みが主であるが、北半では井戸 2 基と土坑の集中がみられた。なお以下で述べる 233 井戸と 235 井戸は、調査時に第 3 面と認識していたため、全体写真では図版 16-1・2 中に写っている。

233 井戸 (図 19・23、図版 14-1・2) 2 区の北半で検出した井戸である。掘方はいびつな方形を呈しており、検出面での規模は長辺 3.1 m、短辺 2.8 m で、深さは 1.6 m を測る。当該遺構は形状から井戸としたが、底部はシルト層で止まっており、湧水層には達していない。ただし断面を見る限り、井戸枠内の埋土と裏込土とが明確に分かれるため、掘削途中で井戸枠が抜かれ放棄された可能性が考えられる。井戸枠内の埋土上層からは 47 (図 29、図版 23) の土師器皿が出土している。8 世紀末 9 世紀前半のものと考えられる。同じ層からは 135 (図 33) の木製品が出土している。135 は輓の両端を二次加工して欠いたものか、井戸に用いる釣瓶の止棒か、正確な用途はわからない。

235 井戸 (図 19・24、図版 14-3、図版 15-1~3、図版 16-1) 2 区の北半で検出した井戸である。233 井戸と近接した位置にある。掘方は不整形な円形で、検出面での規模は直径 3.0 m、深さ 1.8 m を測る。井戸底部は極粗砂～中粒砂層まで掘りぬいており、湧水層まで達している。掘方内で横四方組の

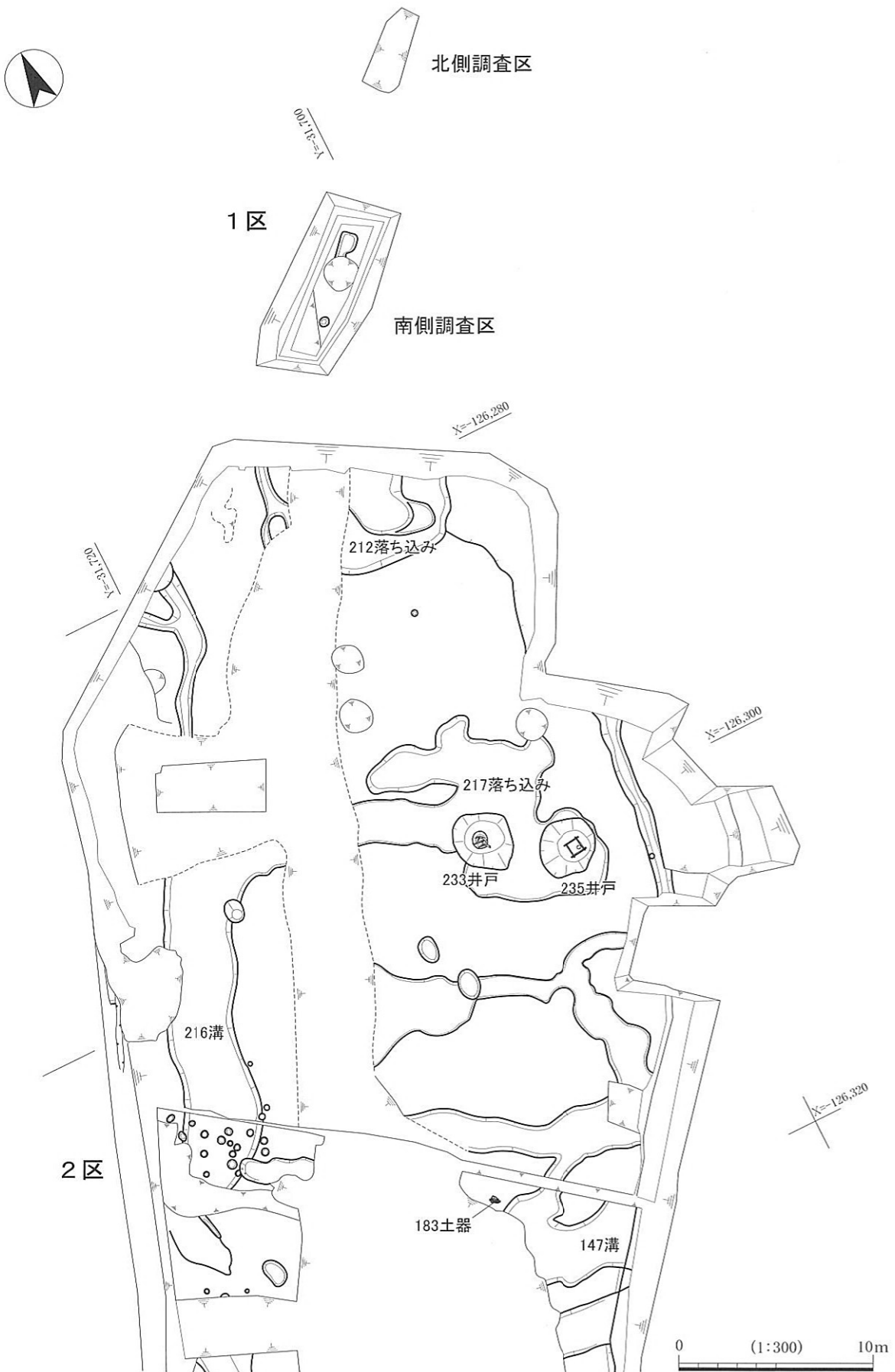


图 19 1区・2区北半第2面遺構配置图

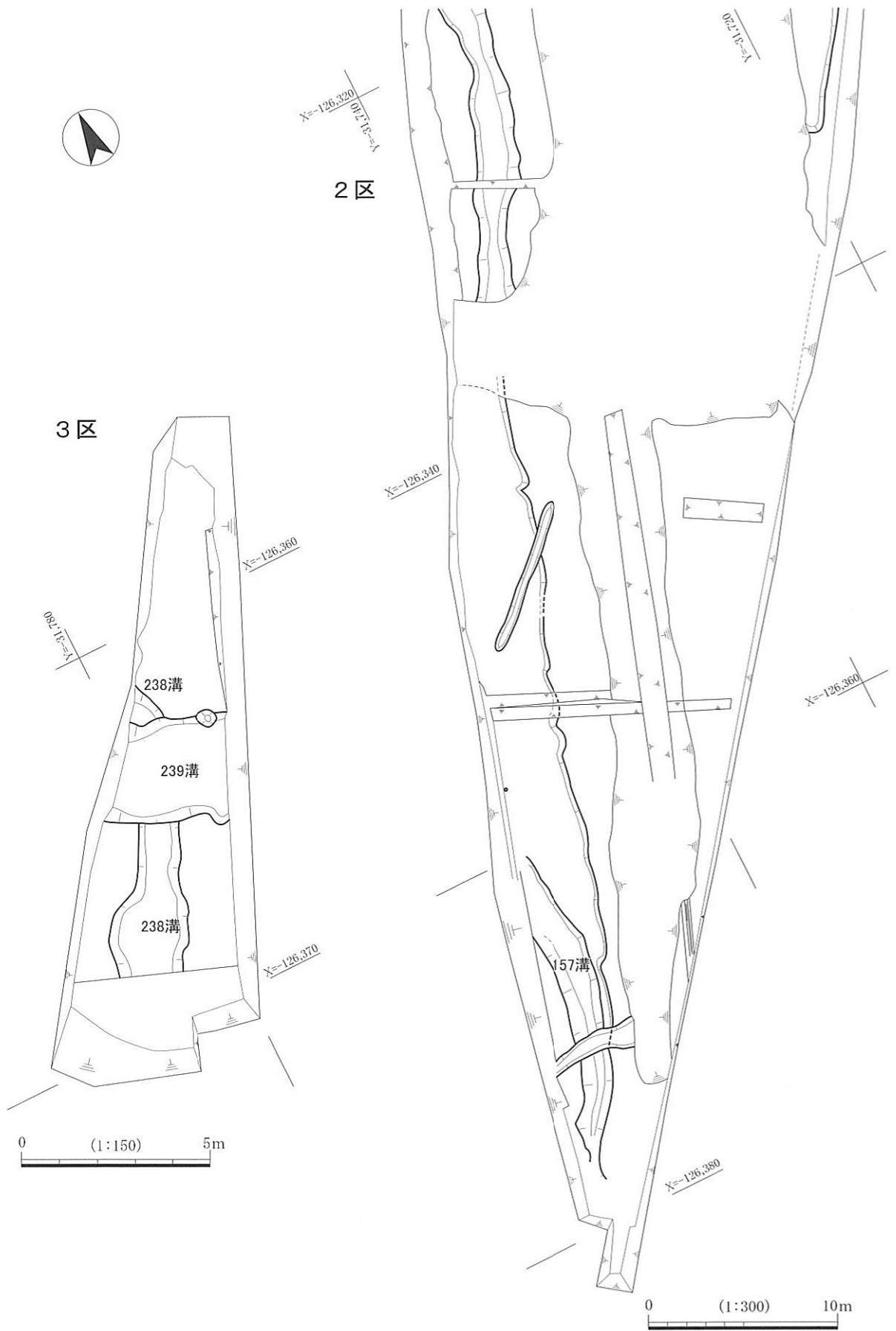


图 20 2区南半・3区第2面遺構配置図

井戸枠を検出した。構造は横板を井籠組に東西辺が7段、南北辺が6段に組まれている。組み方は板材両端部の上下に合い欠きを作り、合い欠き同士を嵌め込み組んで直方体状の井戸枠を組み上げるやり方である。ただし、最下部にあたる東西の7段目と南北の6段目の下側には合い欠きはなく、上側だけに作り出す。図33に残存状態の良い板材を図示した。平面図はいずれも井戸枠内側から見たものである。129は東辺の4段目、130は東辺の5段目の板材である。130には図の上部の合い欠きと合い欠きの

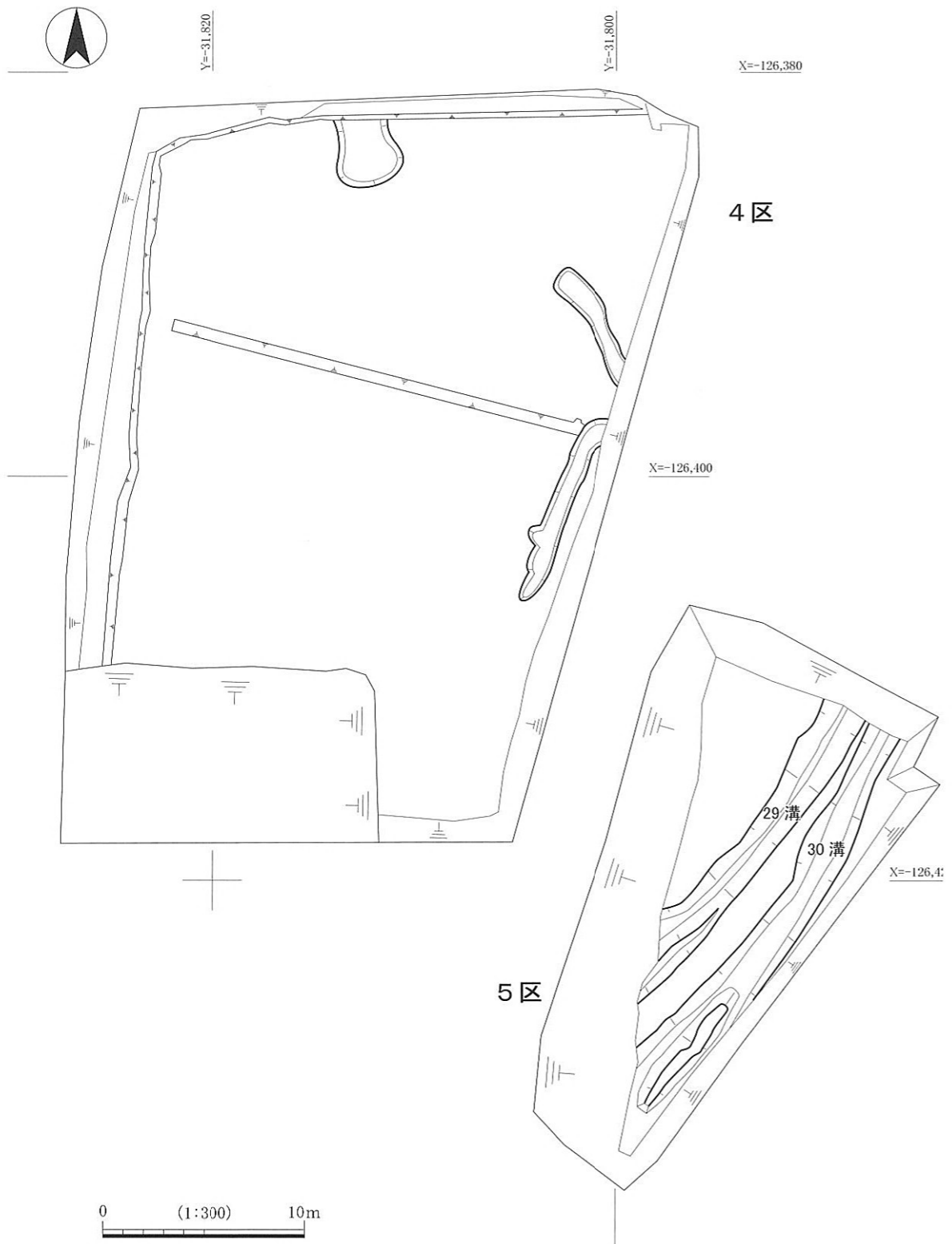


図 21 4区・5区第2面遺構配置図

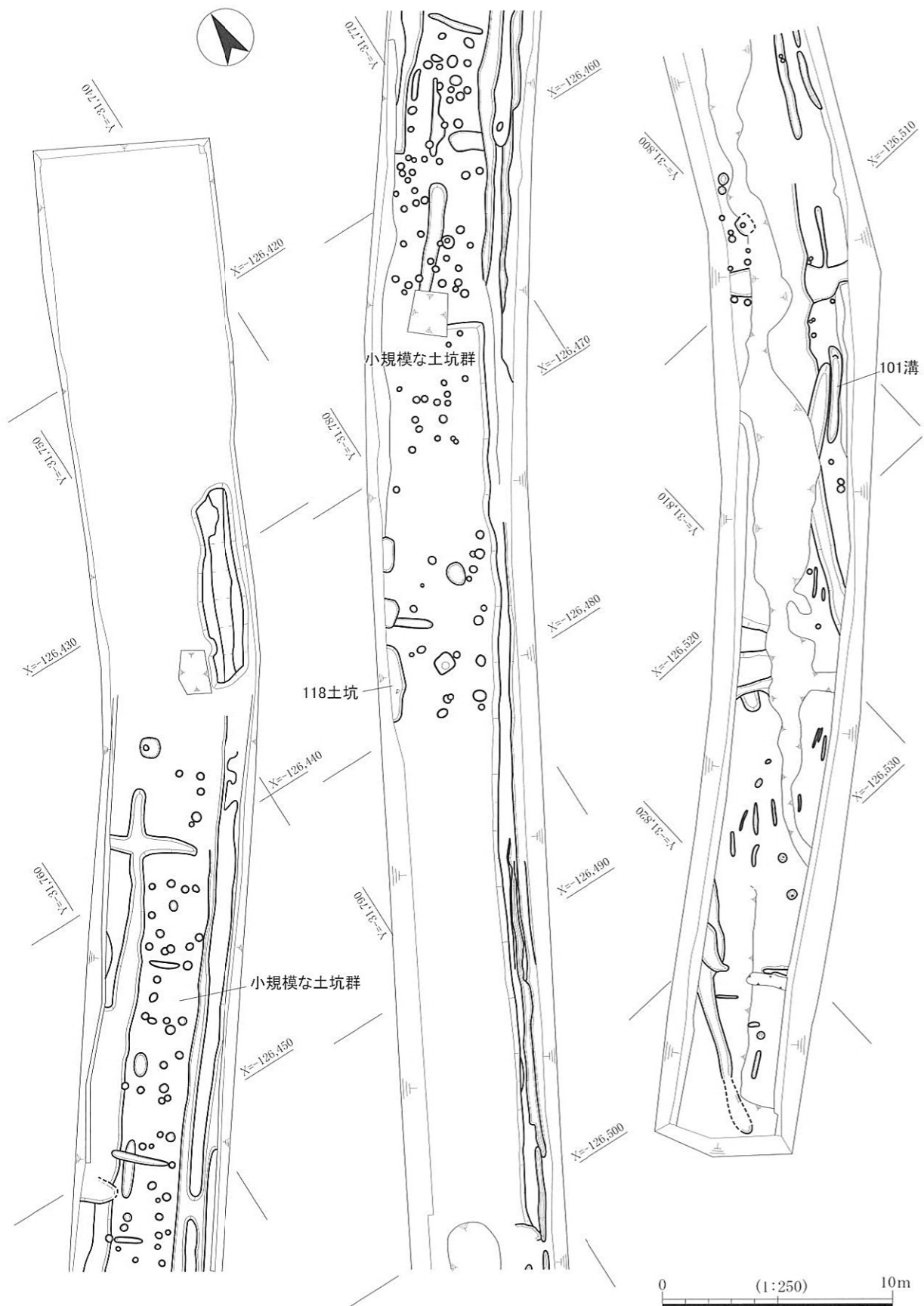


图 22 6区第2面遺構配置図

間に、正方形の線刻がある。もともとは建築材で継ぎ手を施そうとした痕跡か。131は西辺の4段目、132は西辺の7段目の板材である。132は最下段のため地面に接地する面には合い欠きがない。133は東辺の6段目、134は南辺の4段目である。

井戸の埋土は井戸枠の裏込土、井戸枠内の堆積土、井戸廃絶後の堆積土の3種類に分けることができる。調査時は湧水が著しく断面観察に困難をきたしたが、少なくとも井戸枠の裏込は大きく三段階にわたっておこなわれたことがわかる。最初の裏込めは、底から東西辺の枠板で数えて下から5段目までの高さまでなされている。その後6段目で一回、7段目で一回裏込めがなされている。ただし安定性など

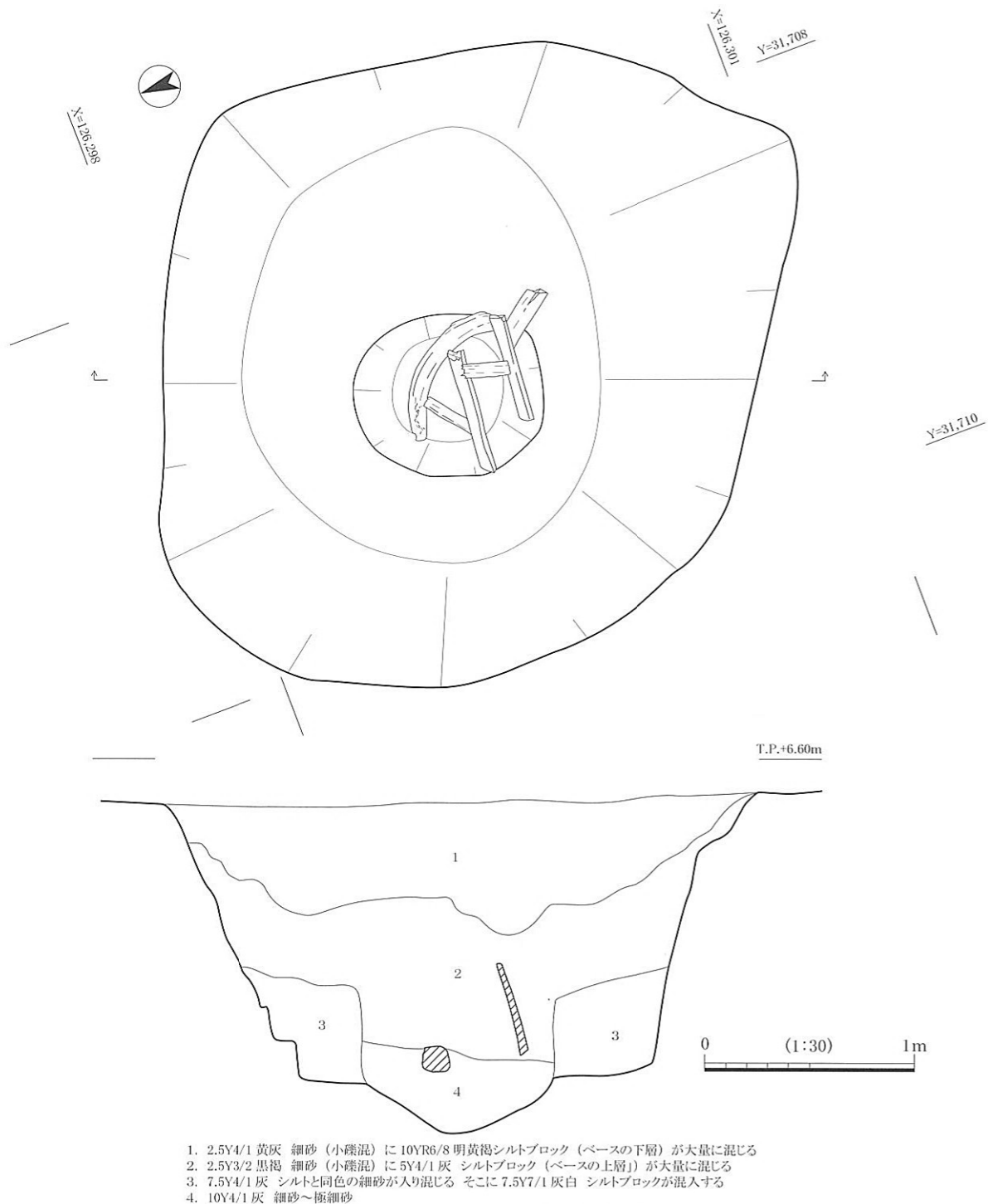


図 23 2区 233 井戸平・断面図

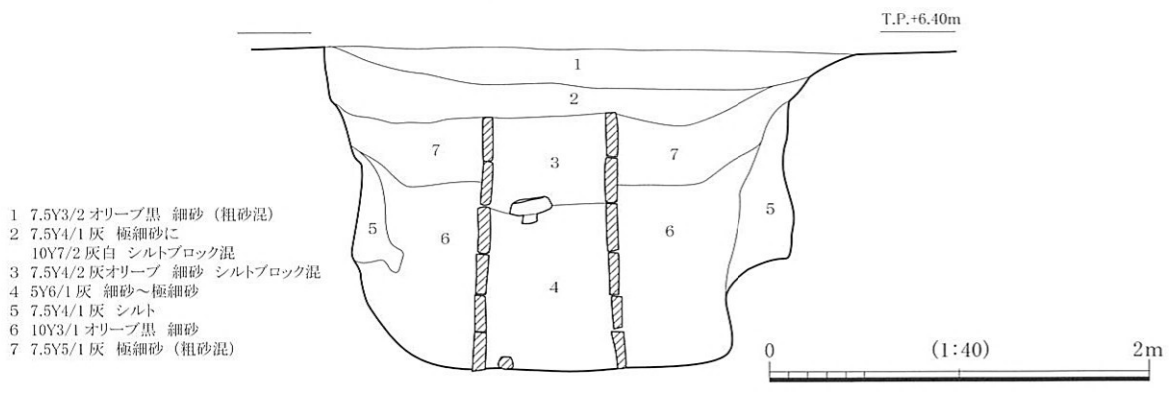
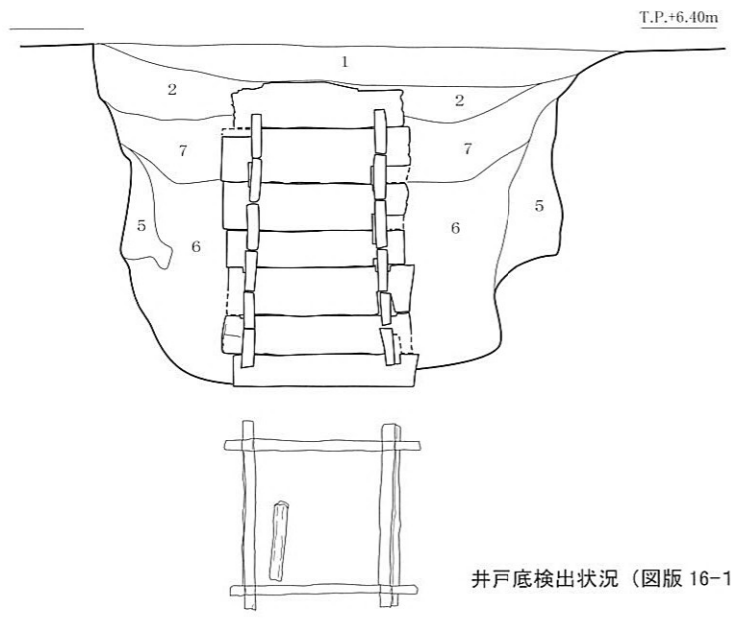
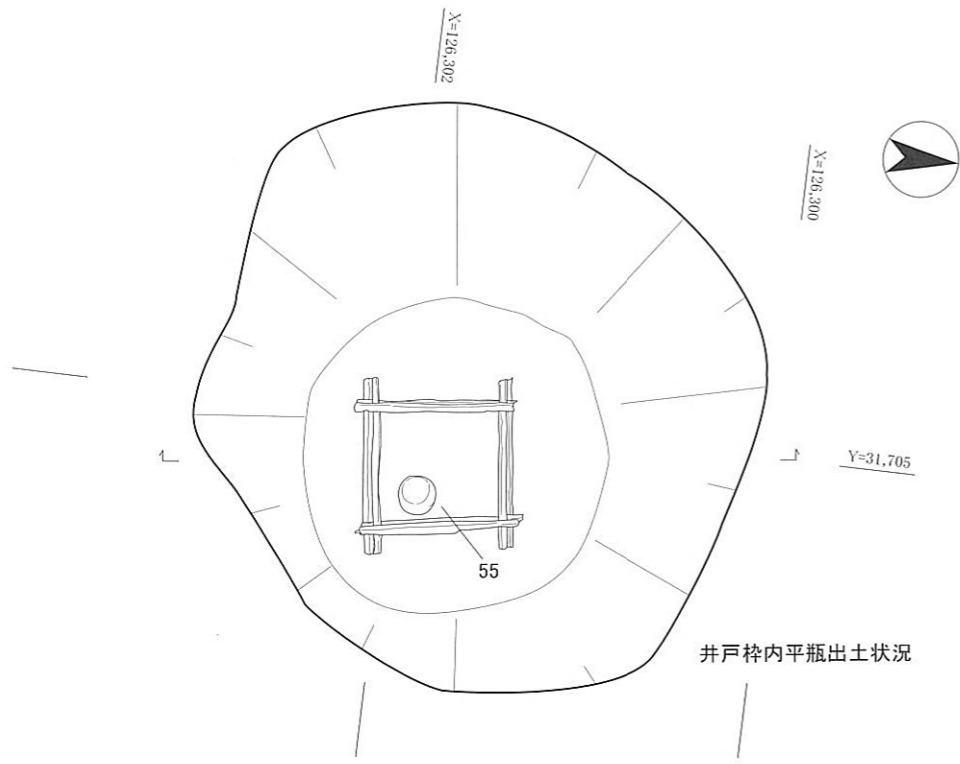


図 24 2区 235 井戸平・断面図

を考えると、最初の裏込めはもっと低い位置でおこなわれた可能性もある。井戸が機能していた段階の堆積土（図 24 の 4）は水はけの良い粗砂混じりの中粒砂で、廃絶後の堆積土と考えられる層（図 24 の 3）は、粘性の高いシルト混じりの細砂である。両層の境目からは 55（図 29、図版 15 - 2、図版 24）の須恵器平瓶が出土している。55 は把手の付かない平瓶で 8 世紀末から 9 世紀前半のものと考えられる。

147 溝（図 19・26） 2 区の中央北西部で検出した溝である。近世の水路により殆どが削平されている。検出面での規模は最大幅 1.0 m、最も深い東端で深さ 15cm を測る。途中二股に分かれ調査区外の東に伸びる。深さからみて西から東へ排水する目的があったと考えられる。147 溝からは 42・46・49・50・53（以上すべて図 29）の遺物が出土している。42～46 は土師器皿で、42 は 9 世紀後半のもの、

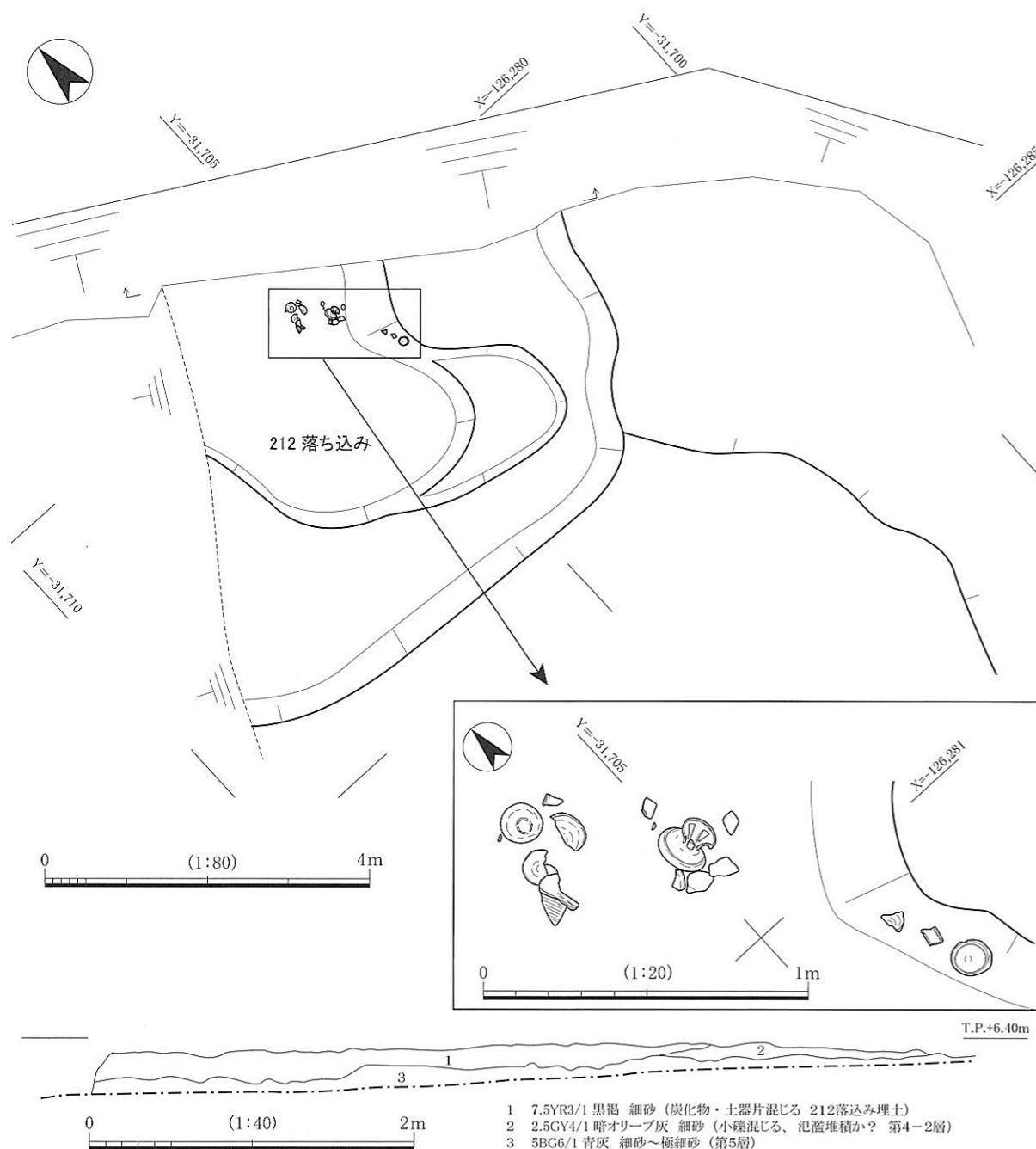


図 25 2区 212 落ち込み平・断面図

43～46・50（図版 23）は 10 世紀中頃から後半のものである。49（図版 22）は黒色土器 B 類の椀、53 は土師質の鍋でいずれも 10 世紀代のものである。

150 土器（図 26、図版 19－8） 147 溝の肩部から北西に 0.4 m 離れた地点で 150（図 34、図版 31）の甗が出土している。残存状況はほぼ半分である。第 4 層掘削当初から出土状況が確認できた

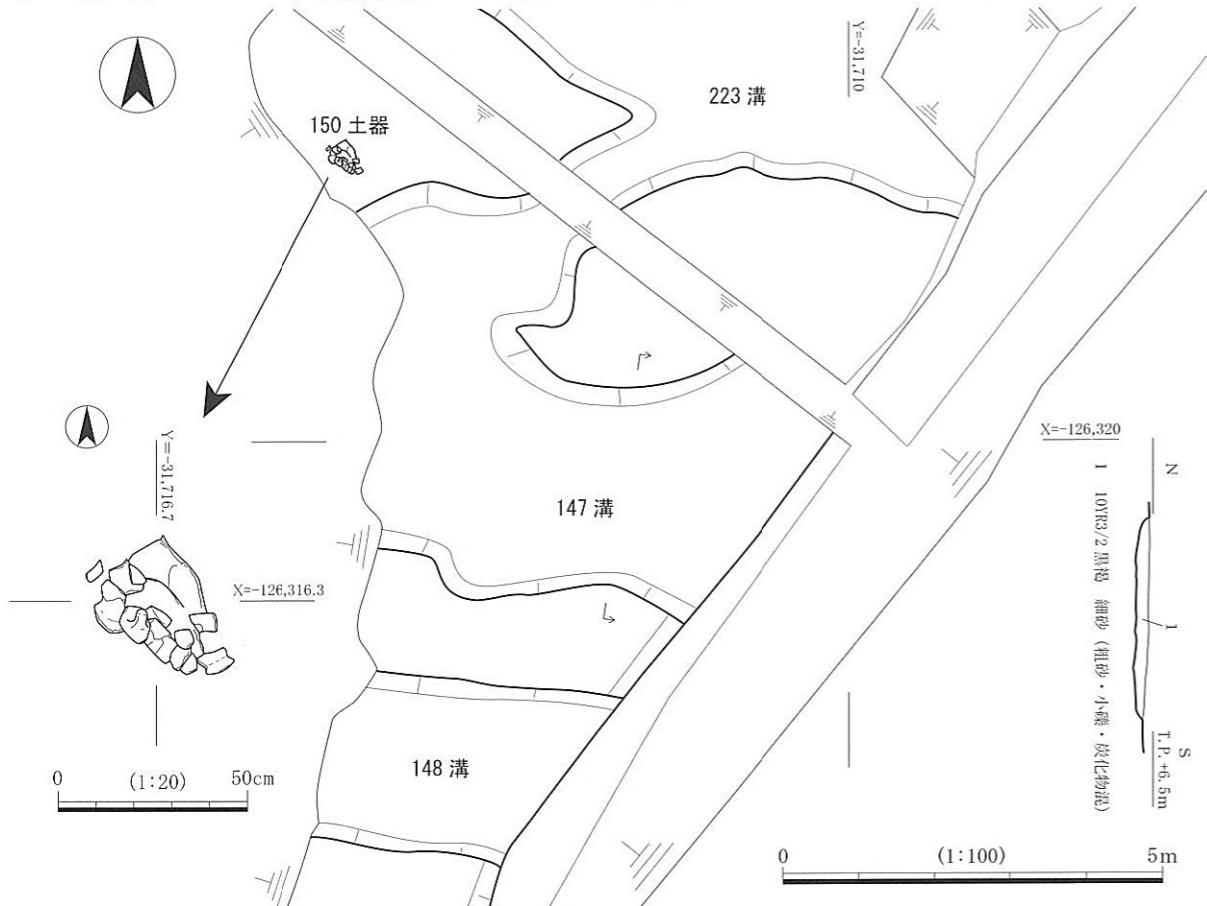


図 26 2区 147 溝平・断面図、150 土器出土状況図

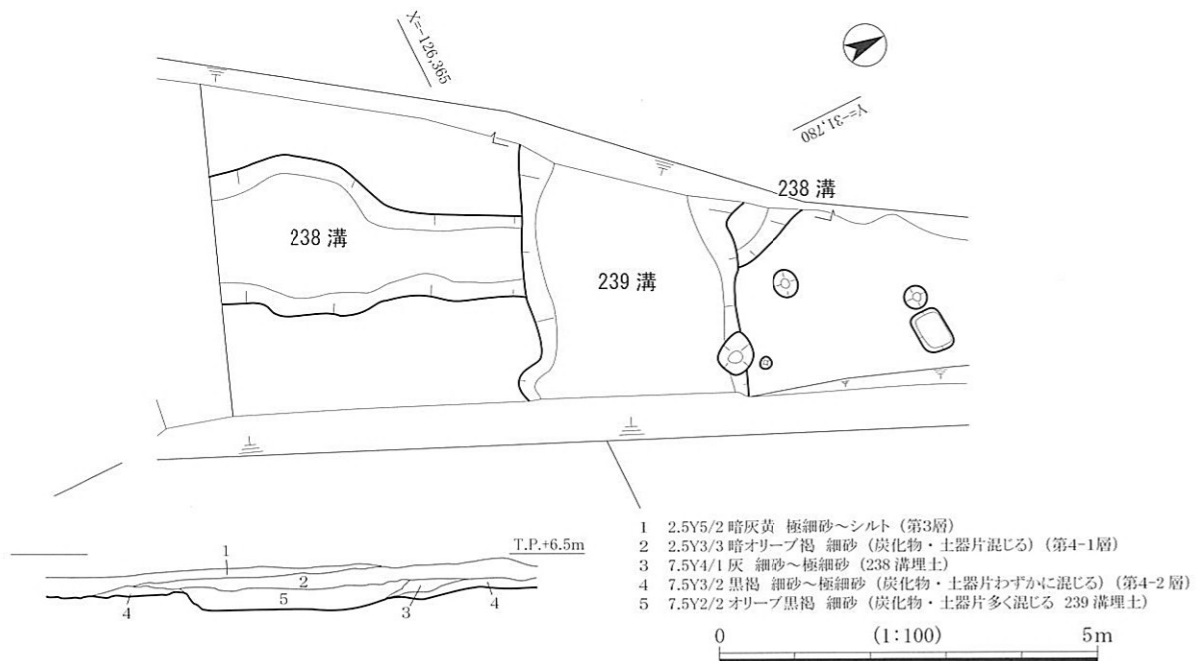


図 27 3区 239 溝平面・断面図

め、残りの半分は中世の耕作土である第3層により失われた可能性がある。周囲に埋納土坑の痕跡がないか確認したが検出できなかった。150は把手が2つとも残存している。底部の孔の数は不明である。底部付近には煤が吸着している。

157 溝 (図 20) 2区の南半西側で検出した溝である。調査時は第2面に帰属すると認識していたが、調査後に土層断面・出土遺物・既往の調査成果との照合をおこなった結果、第2面・第3面のいずれにも帰属することがわかった。断面観察から第2面の段階でも157溝は埋没過程にありながらも機能していたと考えられる。出土遺物などは第3面の項で扱う。

212 落ち込み (図 19・25、図版 13-1~3) 2区の北端で検出した落ち込みである。本来は円形の落ち込みであったと推測されるが、西側の半分近くが近世の水路の攪乱を受けていることと、北側は調

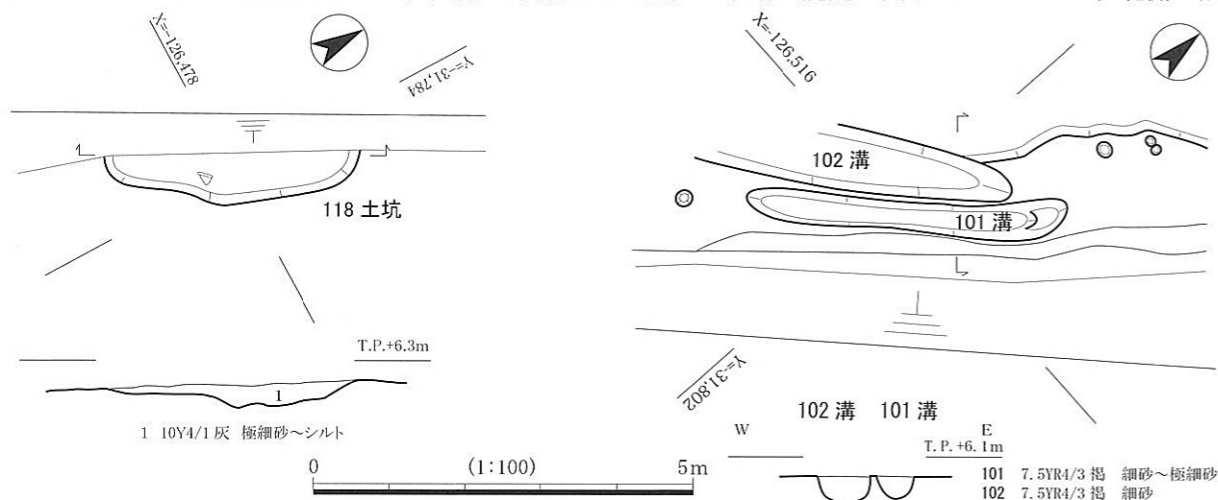
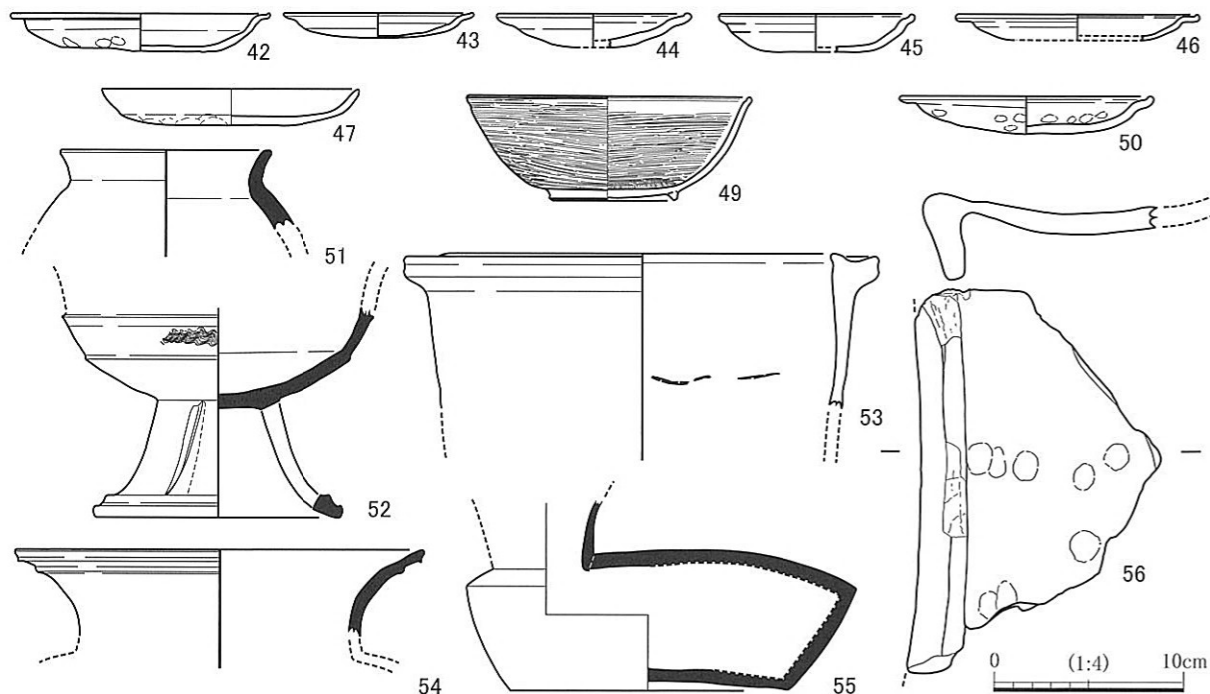


図 28 6区 118 土坑、101・102 溝平面・断面図



42 ~ 46・49・50・53 : 147 溝、47 : 233 井戸、51 : 101 溝、52・54 : 217 落ち込み、55 : 235 井戸、56 : 118 落ち込み

図 29 第2面検出遺構内出土遺物



図30 2区 212 落ち込み出土須恵器

査区外に出るため、遺構全体の3分の1ないしは4分の1を調査できたのに留まる。確認できた限り、半径約4.0mの円形の落ち込みの一部を調査した形になる。落ち込み内の埋土は黒褐色の細砂で、炭化物や土器片が多く混じる。落ち込み内からは多数の須恵器と土師器が僅かながら出土した(図30・31、巻頭図版上段、図版26～29)。57～59は須恵器杯蓋、60～67は須恵器杯身、67にはヘラ記号を施す。身の数に比して蓋の割合が低い。68～70は須恵器高杯の蓋、71～84は須恵器高杯の身。80は小さな縦長方形のスカシを4方向に持つ(図版28)。82の口縁部には意図的な欠損痕跡がみられる(図版28)。これも杯身同様、身の数に比して蓋の割合が低い。85・88・90は須恵器甕の口縁部片、甕は口縁部片は確認できたが胴部片が圧倒的に少ない。86・87・89は須恵器器台の口縁部と胴部の破片である。杯身や高杯は完形に近い状態で投棄されているものが多いが、甕や器台といった大形器種は破片ばかりであった。このことから、小形器種はこの落ち込みに直接投棄されたが、大形器種は別の場所で投棄されていたものが、二次的にこの落ち込みに投棄されたと想像される。同様のことは土師器でもいえ91は土師器甕、92は土師器鍋であるが、これも破片のみである(図31)。92は通有の広口の

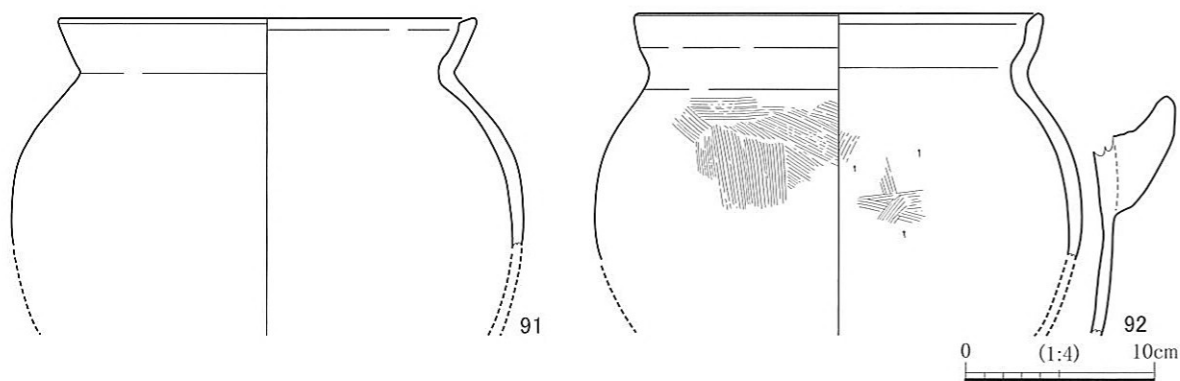


図31 2区212落ち込み出土土師器

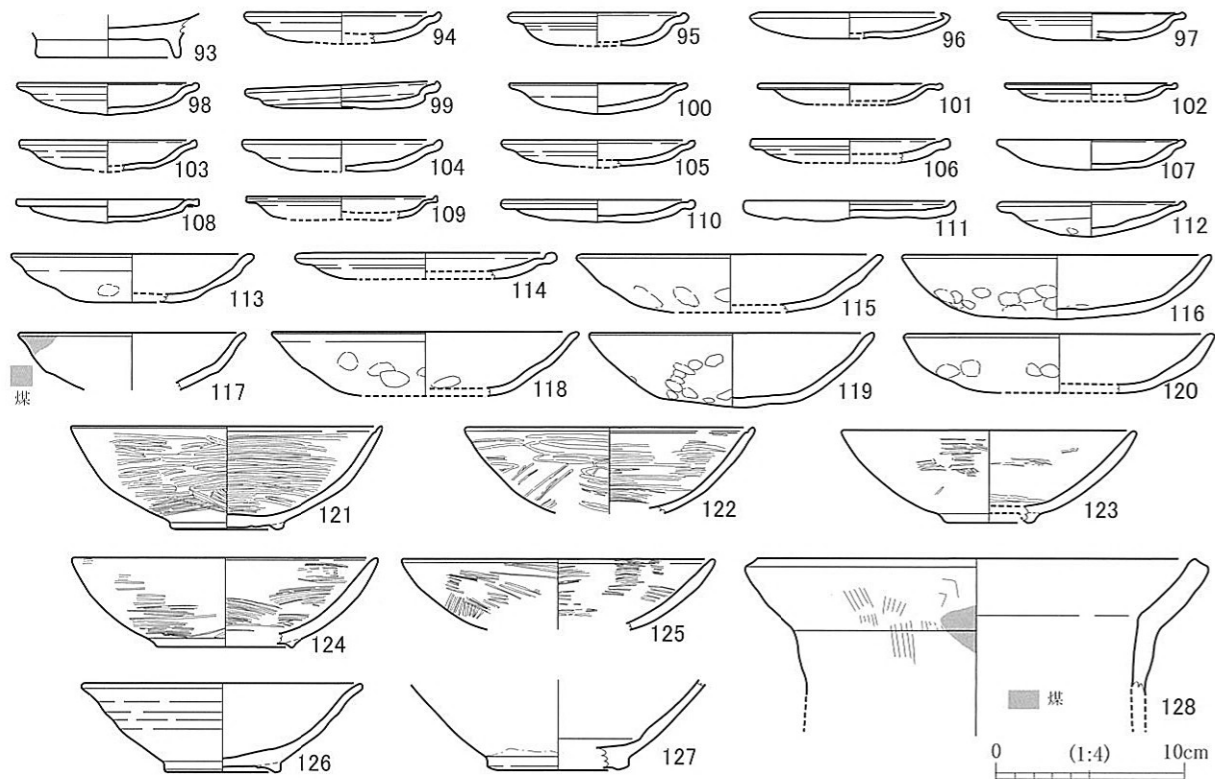


図32 3区239溝出土遺物

甕に把手が付くもので、器形的に類例をみない。胎土も独特で、黄褐色の胎土の中に赤色酸化粒が混ざ
 るものである。また、土師器高杯と思われる破片もいくつか出土しているが、須恵器高杯に比べ圧倒的
 に少なく、図化可能なものがなかった。212 落ち込みから出土している遺物は概ね同時期性を有して
 おり、5 世紀中頃に位置づけることができる。

217 落ち込み (図 19) 2 区の北半で検出した不整形な落ち込みである。西に溝状に伸びて 216 溝と
 繋がっていた可能性がある。217 落ち込みからは 52・54 (図 29) の遺物が出土している。52 (図版
 25) は須恵器高杯、杯部外面に波状紋を施し脚部には 4 方向のスカシがある。脚部の裾には 2 つの段
 がある。54 は須恵器甕の口縁部片である。54 は正確な時期はわからないが、52 は 5 世紀中頃のもの

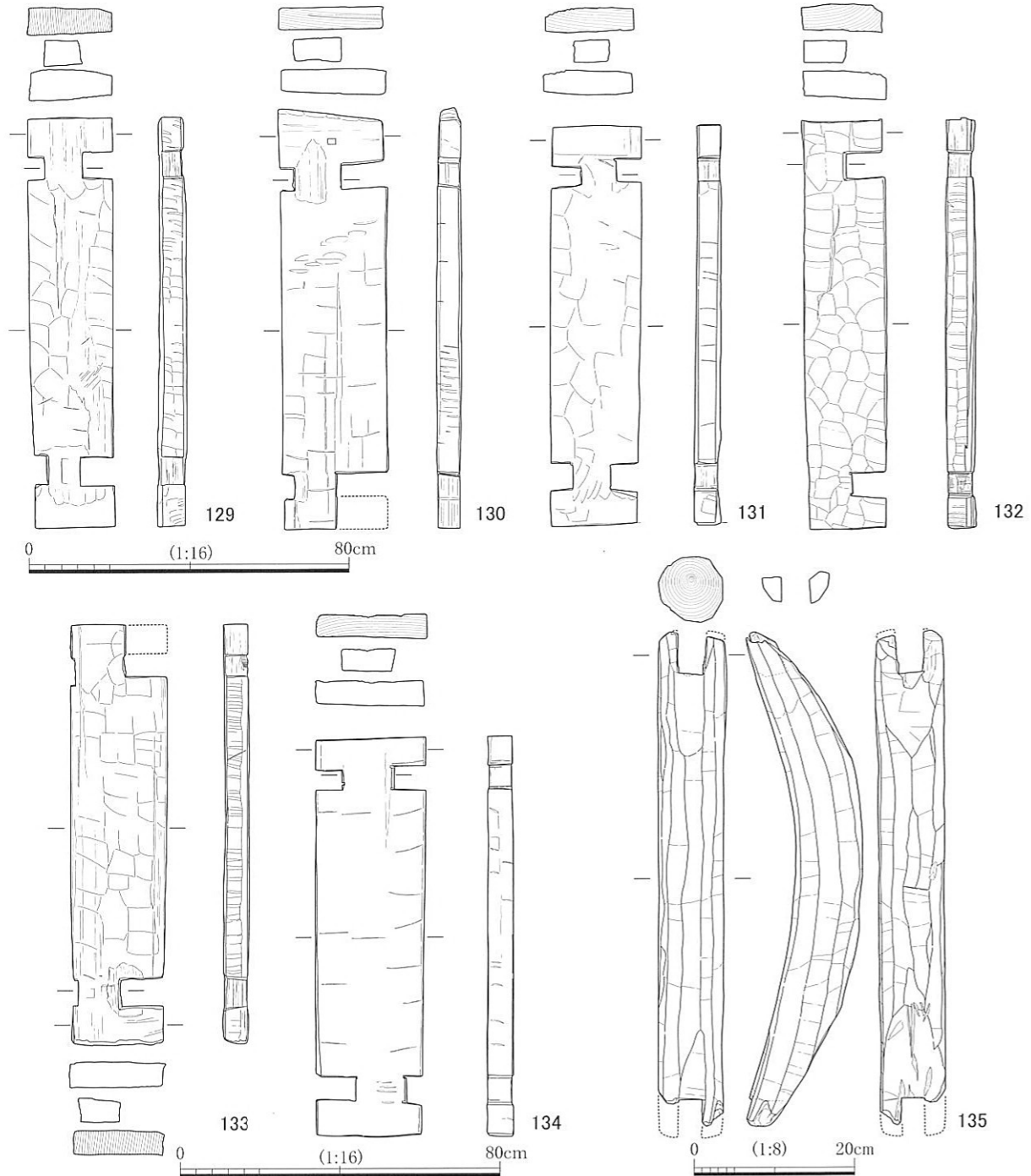


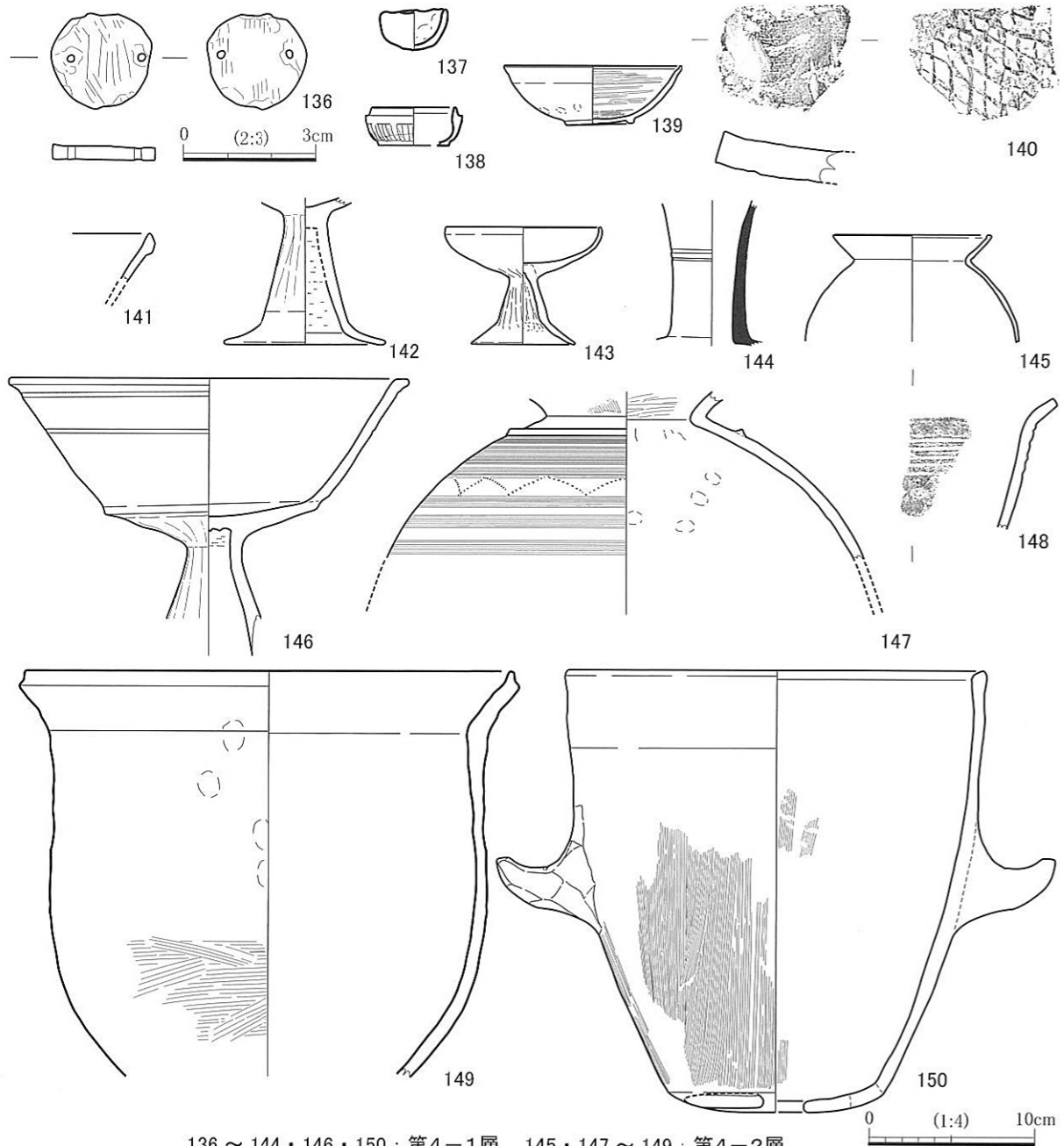
図 33 2区 233 井戸出土木製品、235 井戸枠使用板材

と考えられる。

③3区

3区では溝2条を検出した。なお、南端部は現行の水路の護岸を目的としたため掘削を控えている。
239溝(図20・27、図版11-2) 3区の中央部で検出した溝である。平成25・26年度の調査(その1調査)[センター2015]で検出された110溝の西側の延伸部分と考えられる。埋土はオリーブ黒褐色の細砂で炭化物や細かな土器片を含む。同じ面で検出した238溝とほぼ直交する。238溝の埋土は灰色の細砂で239溝のそれとはまったく異なること、検出した段階で明らかに重複関係があったことから238・239溝は同時に機能していたとは考えられない。238溝が埋まった状態で239溝が開削されたといえる。

239溝からは93～127(図32)の遺物が出土している。94～98・99(図版22)・106・107(図



136～144・146・150：第4-1層、145・147～149：第4-2層
図34 第2・第3面遺構検出時出土遺物(第4-1・第4-2層出土遺物)

版 22)・108 (図版 22)・108～111・112 (図版 22)・114 は土師器の皿、113・115・116 (図版 22)・117・118・119 (図版 22)・120 は土師器の椀、121 (図版 22)・122～125 は黒色土器 B 類の椀である。126 (図版 22) は灰釉陶器の椀で、釉は内面と外縁口縁部付近にかかる。127 (図版 23) は白磁碗Ⅱ類の底部から胴部にかけての破片で、見込みの底部に段を持つ。高台は削り出し高台で露胎となっている。128 は土師器の甕である。外面の口縁部下端にコゲが付着している。あまり類例を見ない甕であるが、本遺跡の平成 25・26 年度の調査でも 1 点出土している [センター 2015、p. 75]。上記の遺物のうち時期判別が可能な土師器皿をみると、94・95・97～100・103・104・109・113 は 10 世紀後半のもの、96・101・102・105～108・110～112・114 はやや下って 10 世紀末～11 世紀前半のものである。いっぽう黒色土器はいずれも 10 世紀後半のもので、126 の灰釉陶器椀も同様の時期である。いっぽう 127 の白磁碗は 11 世紀中頃に位置づけられる。以上のように 239 溝から出土した遺物は 10 世紀後半を主とし、11 世紀中頃まで下るものもある。さらに溝の埋土中に瓦器椀が含まれないことも勘案すると、溝の開削時期は 10 世紀の後半で、埋没時期は 11 世紀の中頃と考えられる。

④ 4 区 (図 21、図版 9-2)

4 区と第 1 次調査 (その 1 調査) [センター 2015] の調査区との区境には 12 世紀代に遡る畦畔が伸びており、そこから西側 (4 区) は第 2・3 層が厚く堆積していたため第 4 層はほとんど残存していなかった (図 7 の 4 区北壁断面参照)。そのため、調査面積の割には遺構が希薄で、検出できたのは東端で 2 条の溝と北端で落ち込み状の土坑 1 基だけであった。いずれの遺構からも出土遺物はなく、時期は決め難い。

⑤ 5 区

5 区では以下の溝 2 条を検出した。

29・30 溝 (図 21) 157 溝と同様、第 4 層を除去した段階で検出したため、調査時は第 2 面に帰属すると認識していたが、調査後に断面・出土遺物・既往の調査成果との照合をおこなった結果、第 2 面・第 3 面いずれにも帰属することがわかった。157 溝同様、第 2 面の段階でも、29・30 溝は埋没過程にありながら機能していたと考えられる。出土遺物などは第 3 面の項で扱う。

⑥ 6 区 (図 22、図版 11-3、図版 12-1～3) 6 区で検出した遺構は第 1 面同様、溝が主である。ただし北半では溝と溝の間に柱穴や土坑が集中している箇所がみられた。ただし 6 区の第 4 層が耕作土であることから、遺構内から出土する遺物は細片ばかりで、柱穴や土坑の時期を明確に表すものは殆どなかった。

101 溝 (図 22・28) 6 区の南側で検出した溝である。102 溝と隣接し並行しており、どちらも埋土が似通うことから、101 溝と 102 溝は併存していたと考えられる。101 溝からは 51 (図 29) の須恵器短頸壺が出土している。7 世紀代のものと考えられる。

118 土坑 (図 22・28) 6 区の中央部西壁際で検出した土坑である。方形の土坑と推測されるが、殆どは調査区外に出る。埋土は灰色の極細砂である。この土坑からは 56 (図 29、図版 25) の竈片が出土している。竈の上部にあたる廂部分ないしは、焚口付近の側縁部のいずれかと考えられるが、鏝の出が均一の幅でないため、上部の廂の可能性は低い。胎土中には砂粒を多く含み、外面の鏝の部分に煤が付着している。明確な時期はわからないが、周辺から出土している遺物から古墳時代中期 (5 世紀代) と考えられる。

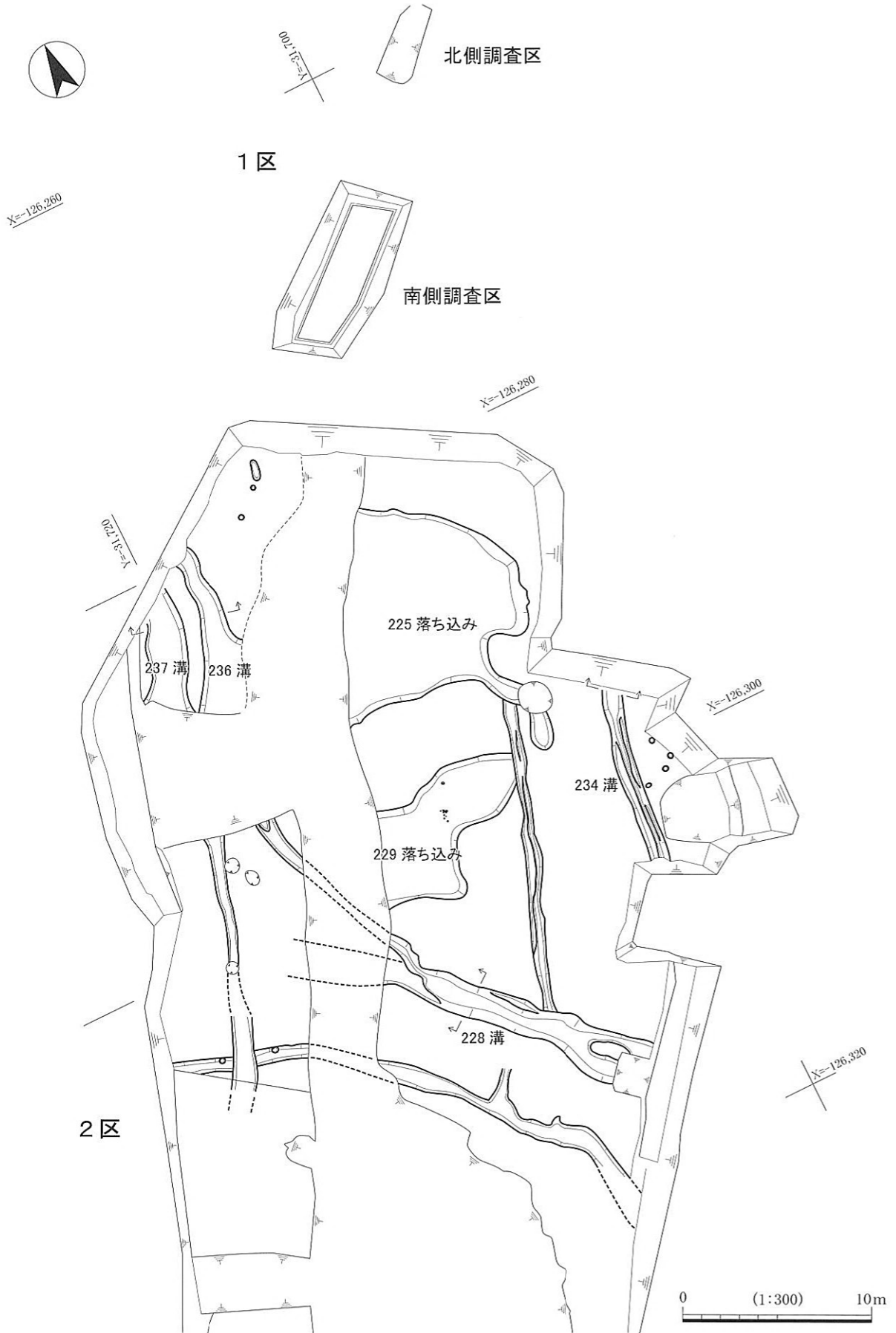


图 35 1区・2区北半第3面遺構配置図

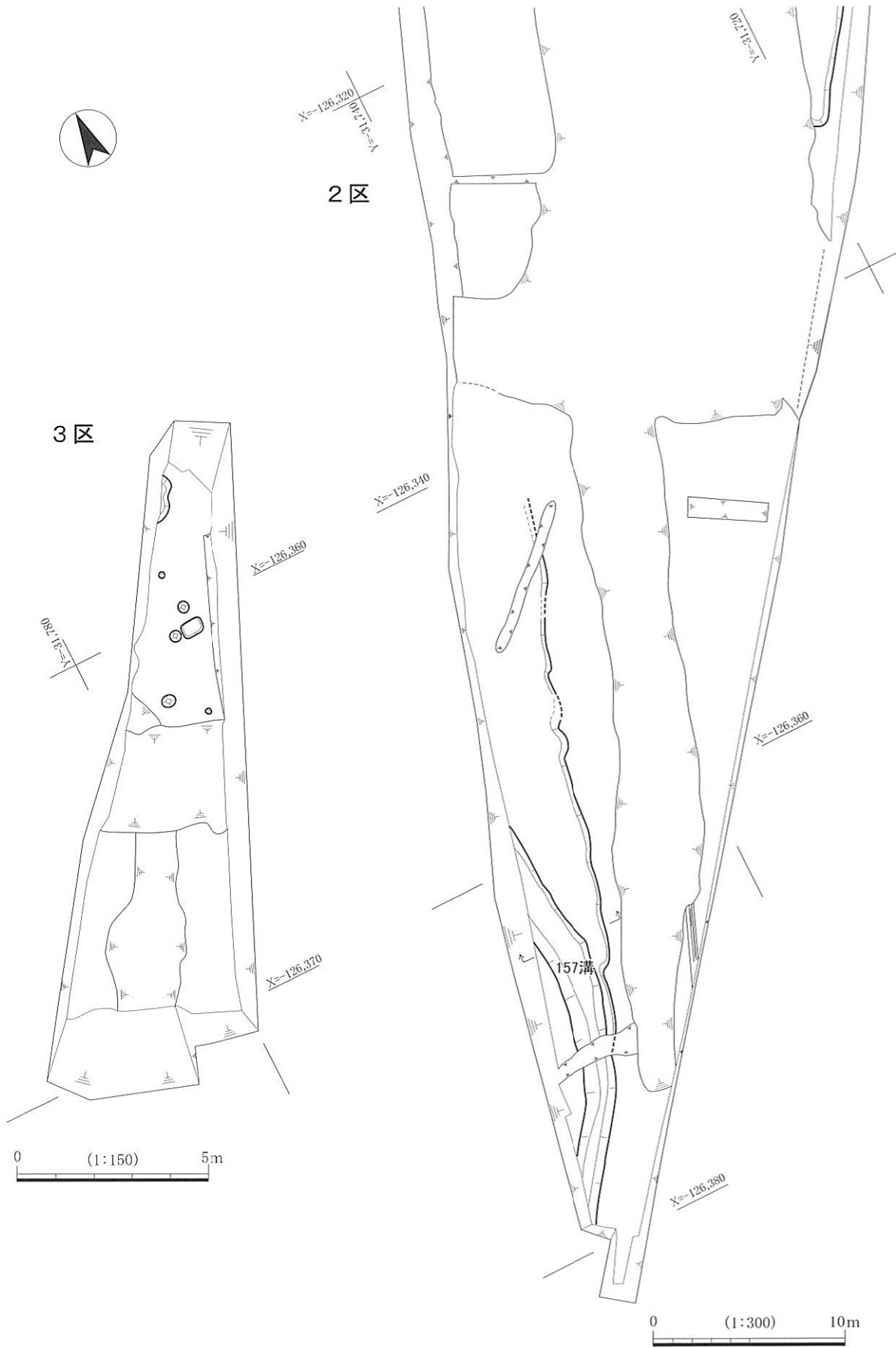


図 36 2区南・3区第3面遺構配置図

⑦包含層出土遺物（図 34） 第 2 面の遺構検出時、すなわち第 4 - 1 層掘削時に 136 ~ 144・146・149・150 の遺物が出土した。136（図版 25）は滑石の有孔円盤で、端面と穿孔部分の処理は粗い。第 2 次調査（その 2 調査）[センター 2017] でも 2 点出土している。137（図版 25）は土師器のミニチュア土器。136・137 とともに古墳時代中期（5 世紀代）のものと思われる。138・141（いずれも図版 23）は輸入陶磁器で 138 は青白磁の合子、141 は白磁碗Ⅳ類の口縁部片。どちらも 12 世紀前半のもの。139 は黒色土器 A 類の椀で 10 世紀代のもの。140（図版 23）は凸面に格子目タタキ痕を有する平瓦片で、7 世紀後半のもの。梶原寺所用平瓦に類例がある。142・143・146（図版 32）は土師器高杯で 5 世紀代のもの。144 は大形の須恵器長頸壺の頸部で 7 世紀代のもの。149 は粗製の土師器甕。第 1 次調査（その 1 調査）[センター 2015] で 11 世紀後半の土器と共に数多く出土している。150 は 150 土器としてすでに述べた。以上第 4 - 1 層から出土している遺物は古墳時代中期（5 世紀代）から中世前半期（12 世紀前半）のうちに収まる。この時期幅が当該層の形成期間と考えられる。

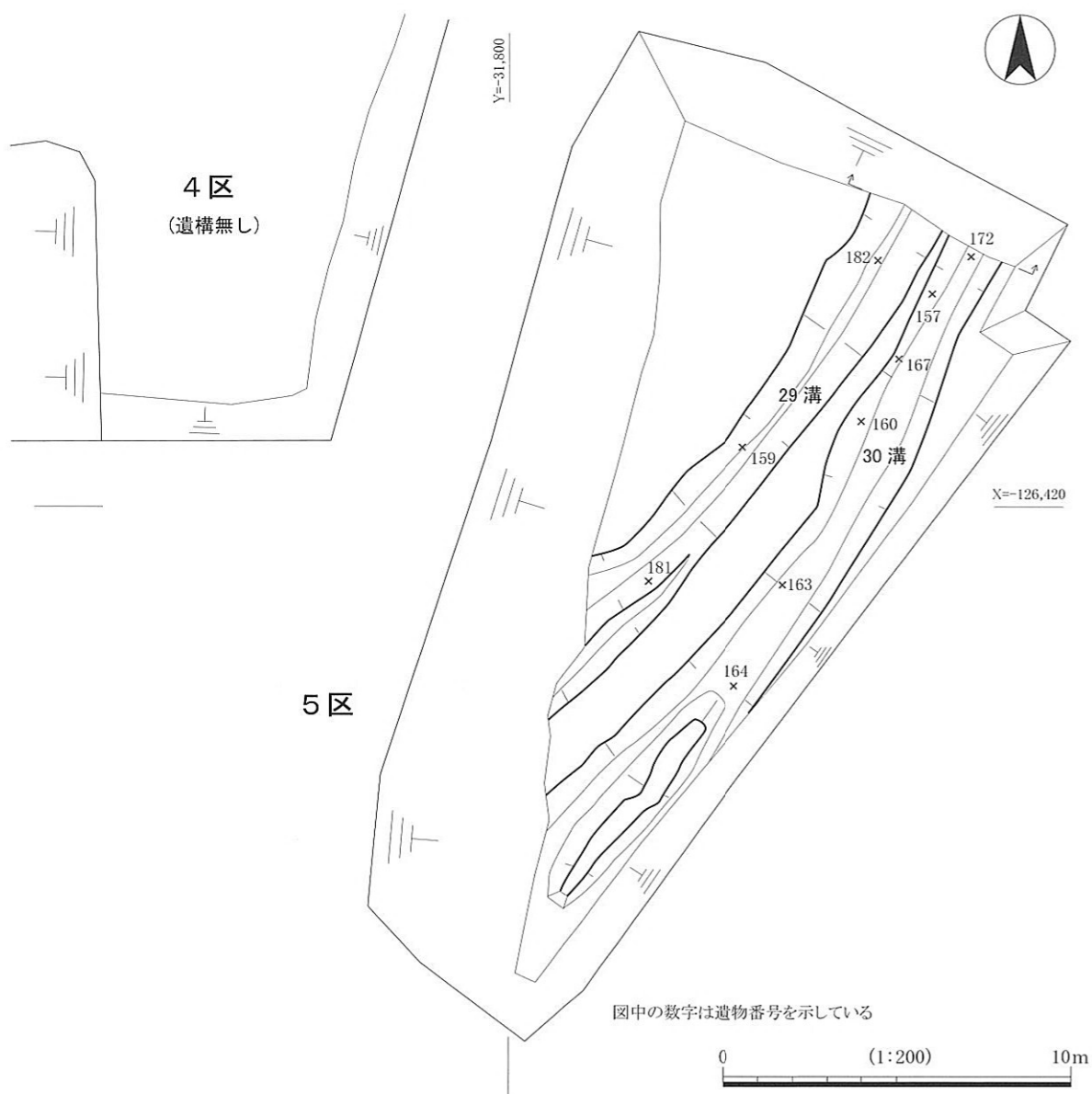


図 37 4区・5区第3面遺構配置図

(3) 第3面

第3面は、古墳時代前・中期の遺物包含層である第4-2層を除去した遺構検出面である。第4-2層は地形的に低い場所に残っており3区や6区で確認できた。ただし、地形的には高い場所にあたる1区や2区でも第4-2層が残っている箇所がある。とはいえ、1区・2区で確認できた第4-2層は氾濫堆積の様相を呈しており、3区や6区で確認した第4-2層と異なっている。1区・2区の第4層は山地から流入した土砂の末端と考えられ、おそらく付近を流れていた古墳時代前期の水路からのものと考えられる。いっぽう3区・6区の第4-2層は土砂の流入の届かない範囲で形成されたもので、どちらかという安定した状況下で堆積したものだといえる。そのため、2区の第4-2層と3区・6区のそれは同一ではなく、遺構面としても一続きにはならない可能性が考えられる。第3面は第2次調査の第

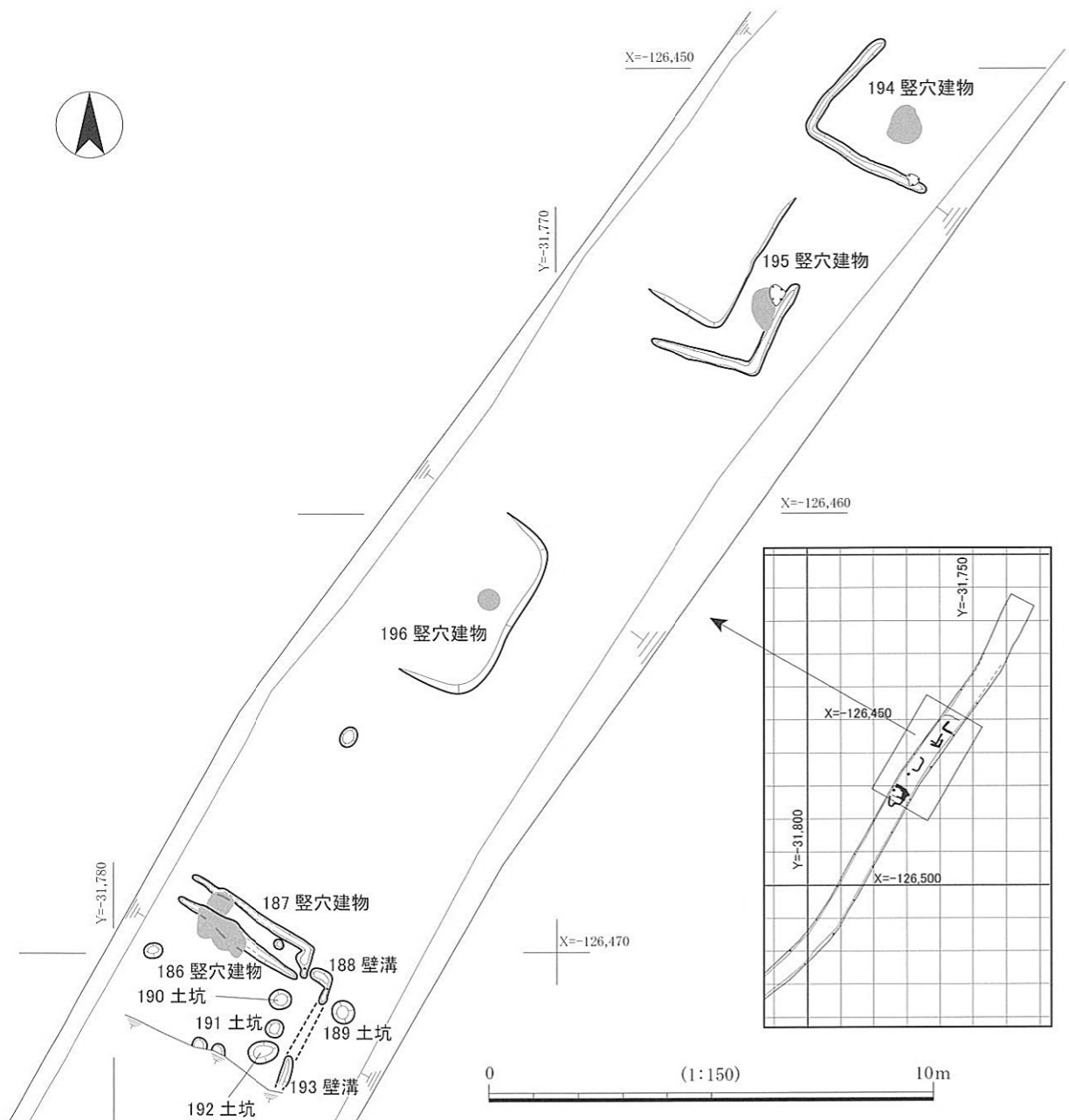


図 38 6区第3面遺構配置図

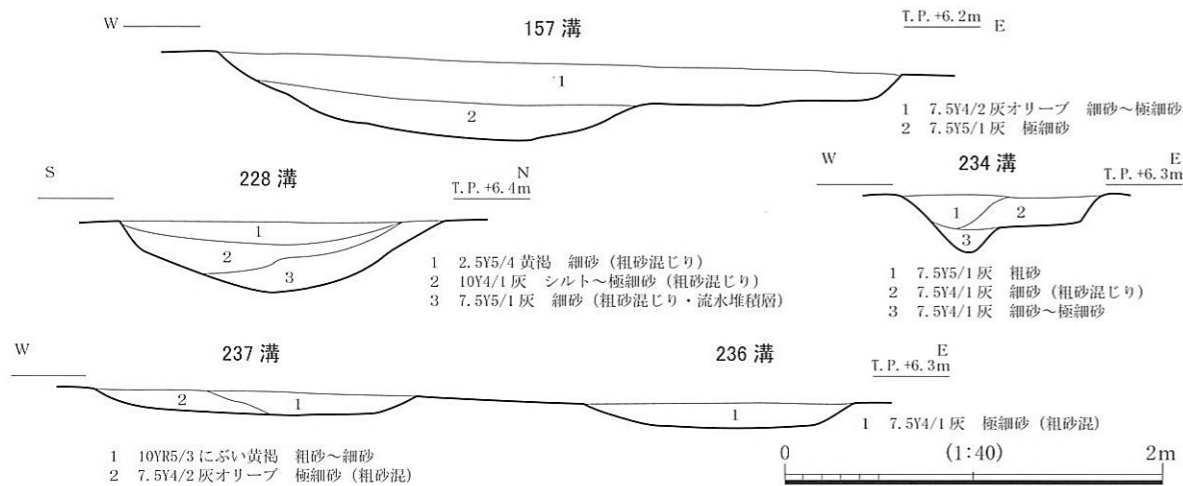


図 39 2区第3面検出溝断面図

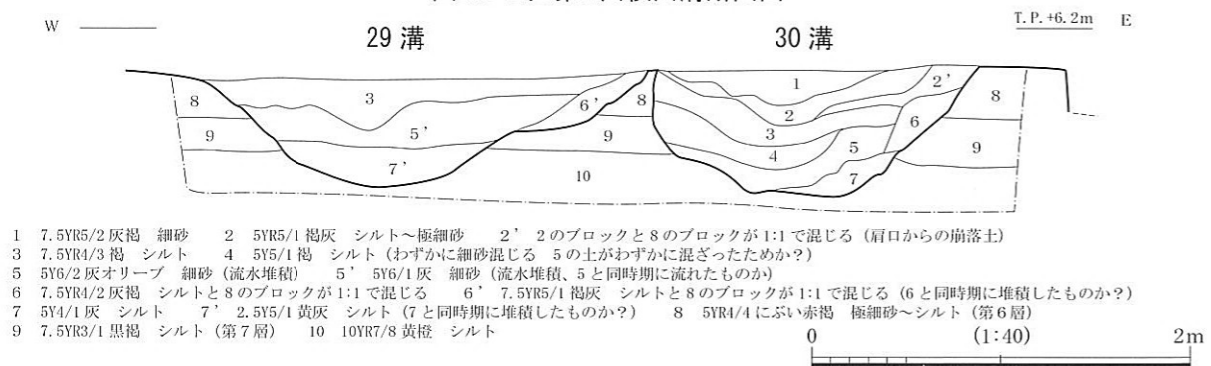


図 40 5区 29溝・30溝断面図

5面に相当するが、第2次調査では相当する遺構面がない。

① 1区

1区では第4-2層相当層が部分的に残存していたが、顕著な遺構は検出できなかった。

② 2区 (図 35・36、図版 16-2・3)

2区で検出した遺構は溝と落ち込みである。

157溝 (図 36・39) 2区の南側で検出した溝である。157溝の東側には東から西に向けて一段低くなる落ち込みがあり、157溝はこの落ち込みと一体であったと考えられる。この溝は第2次調査(その2調査) [センター 2017] で検出された 258溝とも繋がるとみられる。第2次調査の 258溝は調査区以北にも伸びていたと考えられるため、今回の 157溝と合せて考えると 90m以上にわたって伸びる溝ということになる。埋土は上層が灰オリーブ色の細砂、下層が灰色の極細砂で、下層は南側(下流)にいくにつれ流水作用によってもたらされた砂粒の割合が増える。157溝からは 162・165 (いずれも図版 30)・166・167・168 (図版 32)・169 (図版 31) の遺物が出土している(いずれも図 45)。出土層位はすべて下層である。162は壺の口縁部で外面に竹管によるものとみられる円形の圧痕を施している。東部瀬戸内地方からの搬入土器か。163は土師器の高杯、164～169は土師器の甕で、164の胴部中央には人為的な穿孔が施されている。いずれの土器も古墳時代前期(4世紀後半)のものである。なお 157溝東側の落ち込みからは図化できなかったが、黒色土器の細片が僅かながら出土している。東側の落ち込みもこの溝の一部と考えるならば、157溝は少なくとも第2面の段階でもかろうじて機能していたと考えられる。

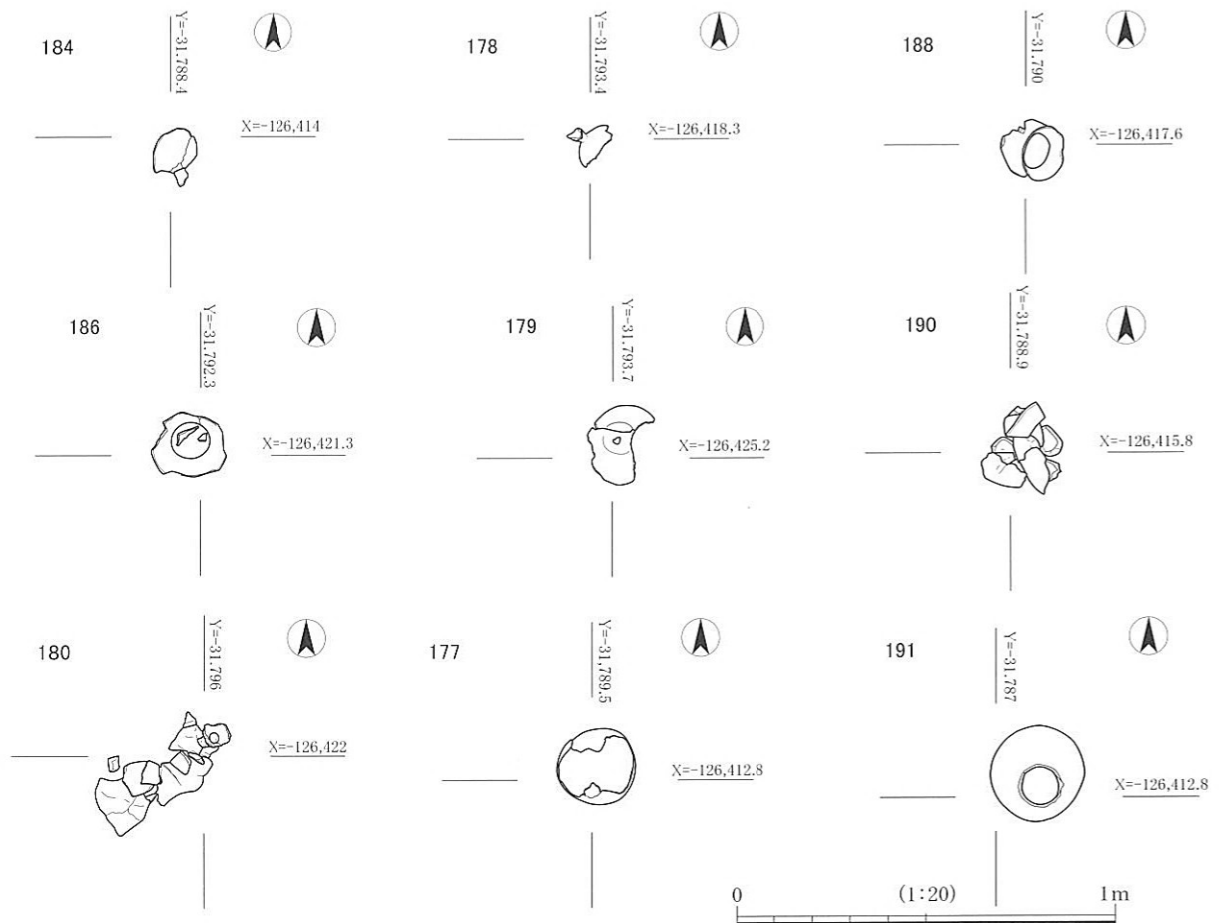


図 41 5 区 29・30 溝土器出土状況

228・236 溝 (図 35・40、図版 21 - 3・7) 2 区の北半で検出した溝である。近世の水路により分断されているが、本来 228 溝と 236 溝は繋がっていたと考えられる。236 溝の埋土は灰色の極細砂で単層だが、228 の埋土は 3 層に分かれる。228 溝埋土の上層は黄褐色の細砂、中層は粗砂の混じるシルト、下層は灰色の細砂で、中層と下層は明らかに流水作用による堆積である。北から南東に向けて排水する目的をもった溝であったと考えられる。228 溝からは 156・157 (図 45) の遺物が、236 溝からは 155 (図 45) の遺物が出土している。156 は須恵器高杯の脚部、157 は土師器高杯の脚部、155 は土師器高杯の杯部口縁部の破片で下部に段を有する。いずれも古墳時代中期 (5 世紀中頃) のものである。

234 溝 (図 35・40、図版 21 - 5) 2 区の北半東端で検出した溝である。埋土は 3 層に分かれ、上層は灰色の粗砂、中層は灰色の細砂、下層は灰色の極細砂、上層と下層は流水作用による堆積である。溝底のレベルからみて、北から南へ向かって流れていたと考えられる。234 溝からは 159・160 (図 45) の遺物が出土している。159 (図版 25) は須恵器甕の胴部片、160 (図版 25) は須恵器器台の口縁部片である。160 は口縁部の直下に突帯を 2 条巡らせてその下に線刻を施す。類例を参照すると、線刻で三角形を表現し、さらにその下段に連続した半円状の紋様いわゆる「コンパス文」を施していたと推測される (笹栗 2018)。いずれも古墳時代中期 (5 世紀中頃) のものである。

225 落ち込み (図 35) 2 区の北端で検出した落ち込みである。不整形な円形で、西側部分は近世の水路により攪乱を受けている。埋土は灰色の細砂で第 4 - 2 層に相当する。遺構というよりは、旧地形の落ち込みに第 4 - 2 層が堆積し、上層からの削平を免れて第 4 - 2 層が残存したと考えられる。225 落ち込みからは 161 (図 45) の須恵器壺の口縁部片が出土している。古墳時代中期 (5 世紀中頃) の

ものとみられる。

229 落ち込み (図 35、図版 21-8) 225 落ち込みの南側で検出した。埋土は灰色の細砂で、225 落ち込み同様落ち込んだ地形に第 4-2 層が堆積し、上層からの削平を免れて形成されたと考えられる。229 落ち込みからは 151~153 (図 45、153 は図版 25) の遺物が出土している。いずれも土師器高杯の杯部で、古墳時代中期 (5 世紀中頃) のものである。

③ 3 区 (図 36、図版 17-1) 3 区では南半が中世の耕作土により削平されており第 4-2 層の残存は認められなかった。いっぽう北半では土坑 7 基を検出したが、遺構内の埋土中からは遺物が出土しておらず明確な時期は不明である。

④ 4 区 (図 37) 4 区は 3 区の南半の状況が調査区全体に広がっており、第 3 層に削平されて第 4-2 層は残存しておらずまた、第 3 面に相当する遺構も皆無であった。

⑤ 5 区 (図 37) 5 区も 4 区同様、3 層に削平されて第 4-2 層の残存はない。ただし前述したように、以下の 29・30 溝は溝内の埋土および出土遺物を見る限り、第 2・第 3 面の両時期にわたって機能していたようである。

29・30 溝 (図 37・40・41、図版 17-2・3、図版 18・19) 29 溝は 5 区の中央を縦断する溝、30

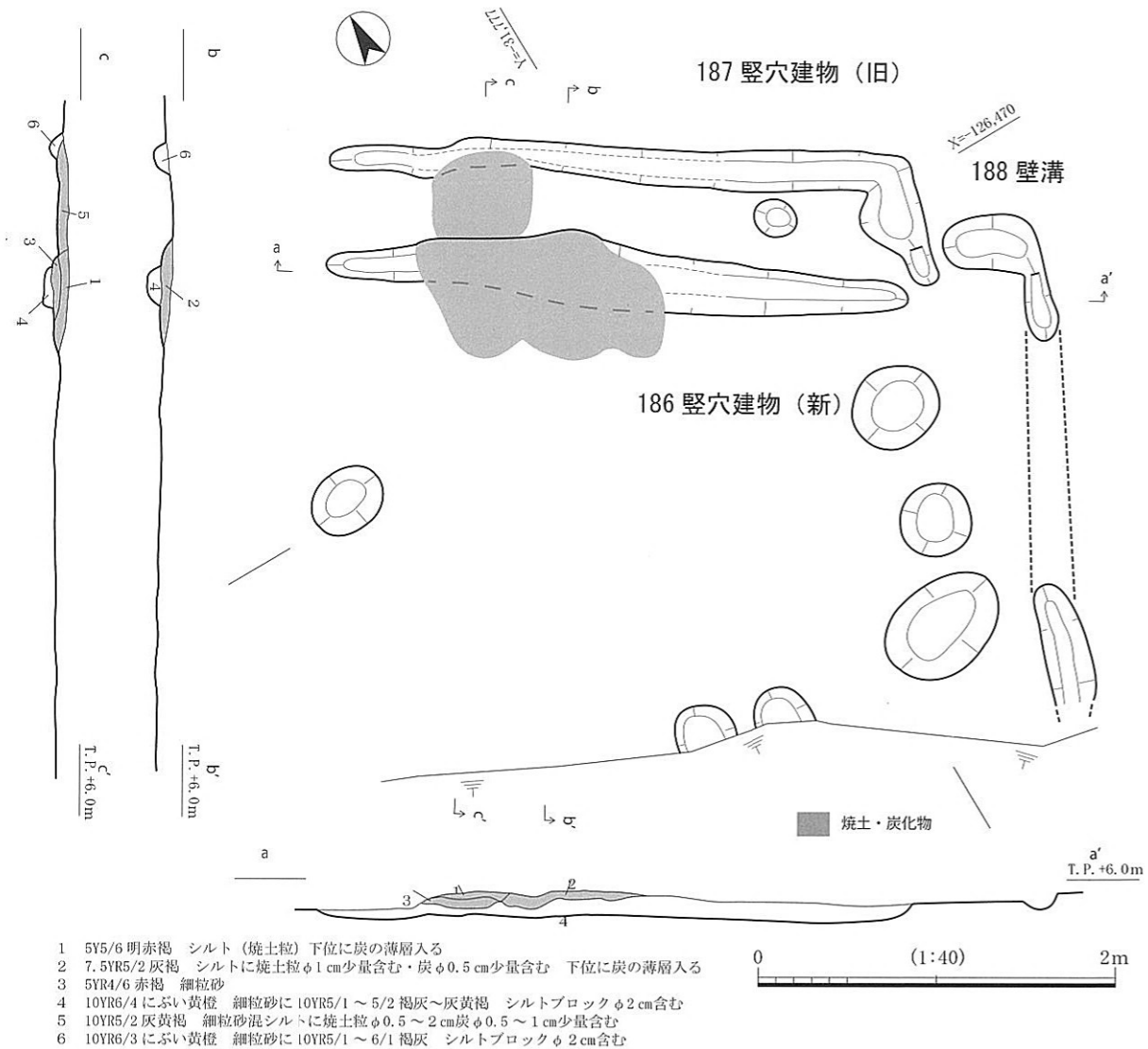


図 42 6 区 186・187 竖穴建物平面・断面図

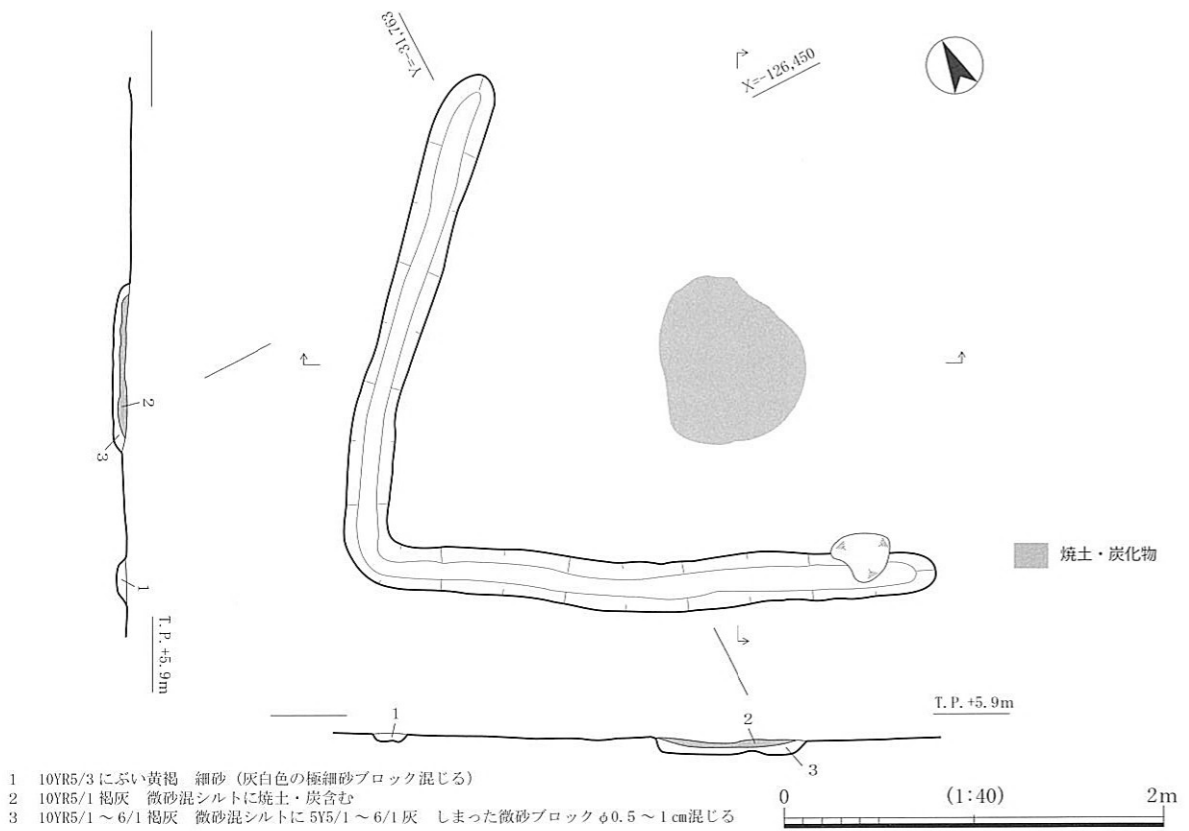


図 43 6区 194 竖穴建物平面・断面図

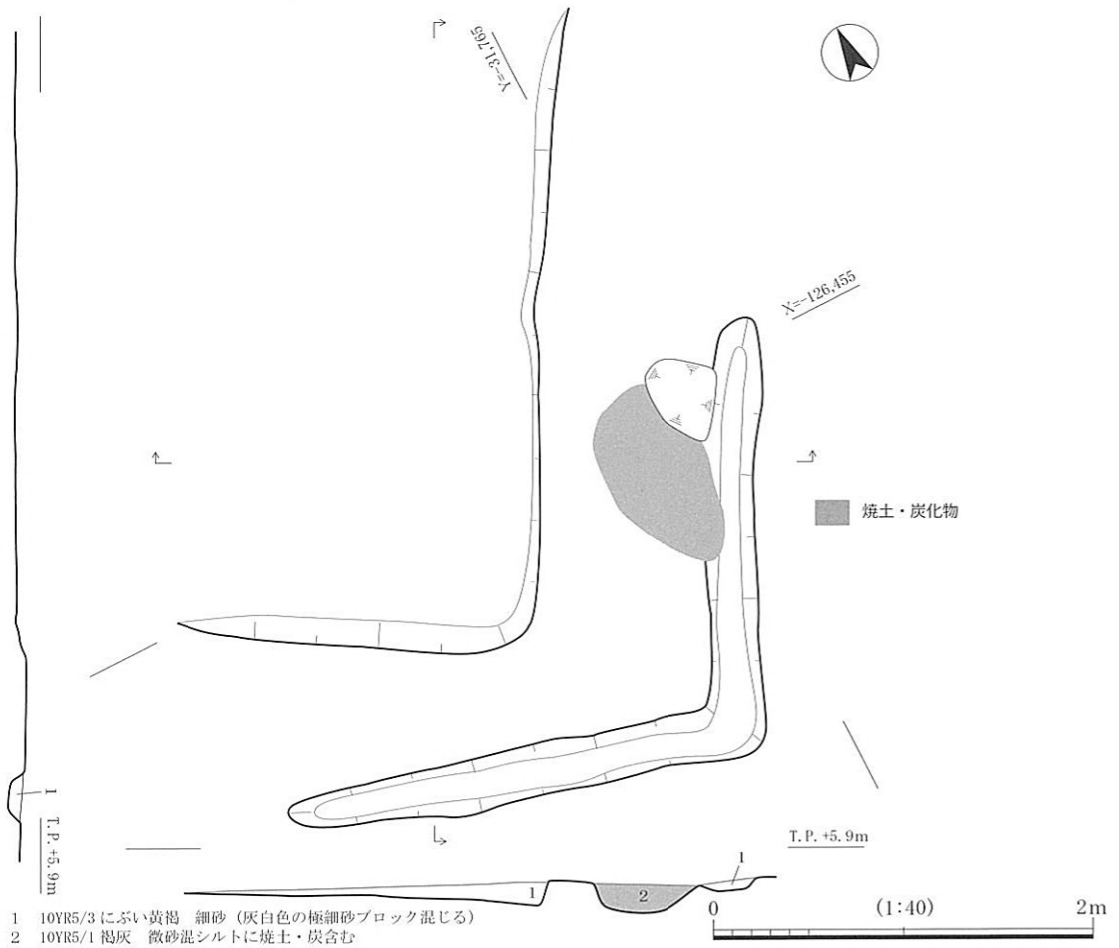


図 44 6区 195 竖穴建物平面・断面図

溝は 29 溝の東側を走る溝。両溝は並行すること、埋土の堆積状況が部分的に類似することから、同時併存して機能していたと考えられる。図 40 (図版 18 - 2・3) をもとに両溝内の埋土堆積状況を見ると、溝 29 の 3・5'・6'・7' が溝 30 の 3・5・6・7 に対応する。これより、29 溝のほうがさきに埋没し、30 溝はその後にも機能していたことがわかる。平成 25・26 年度の調査 (その 1 調査) [センター 2015] では 5 区の北側が調査され、29・30 溝の北に伸びた部分が検出されている。そのなかで、30 溝の埋土上層 (図 40 の 3 よりも上層に相当) から 11 世紀代の瓦器碗が出土している。このことから 29・30 溝は古

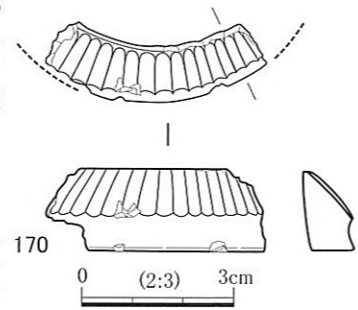
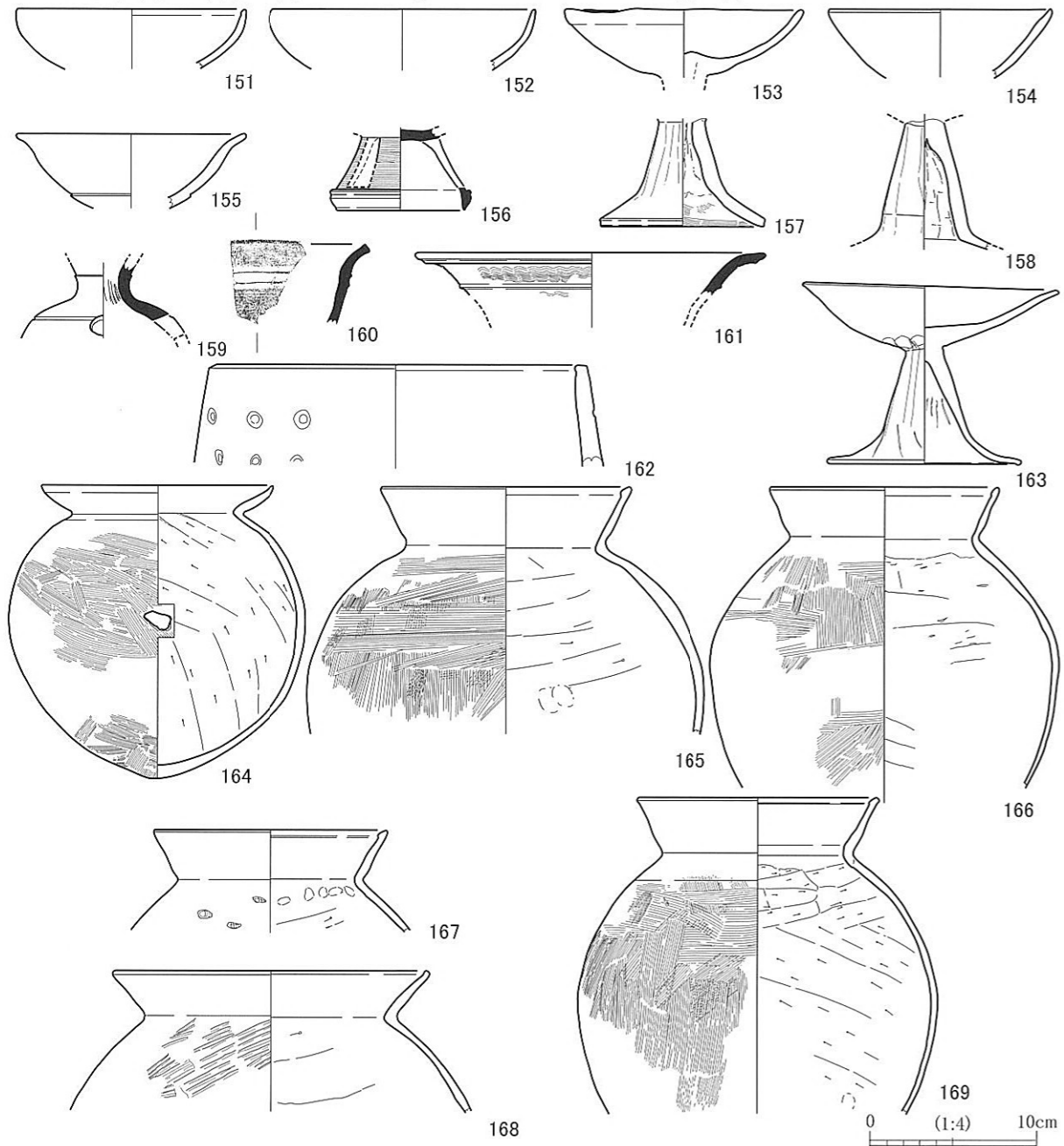


図 46 195 竪穴建物壁溝出土石製品



151 ~ 153 : 229 落ち込み、154 : 187 竪穴建物壁溝、155 : 236 溝、156・157 : 228 溝、158 : 195 竪穴建物壁溝
159・160 : 234 溝、161 : 225 落ち込み、162 ~ 169 : 157 溝

図 45 第3面検出遺構内出土遺物

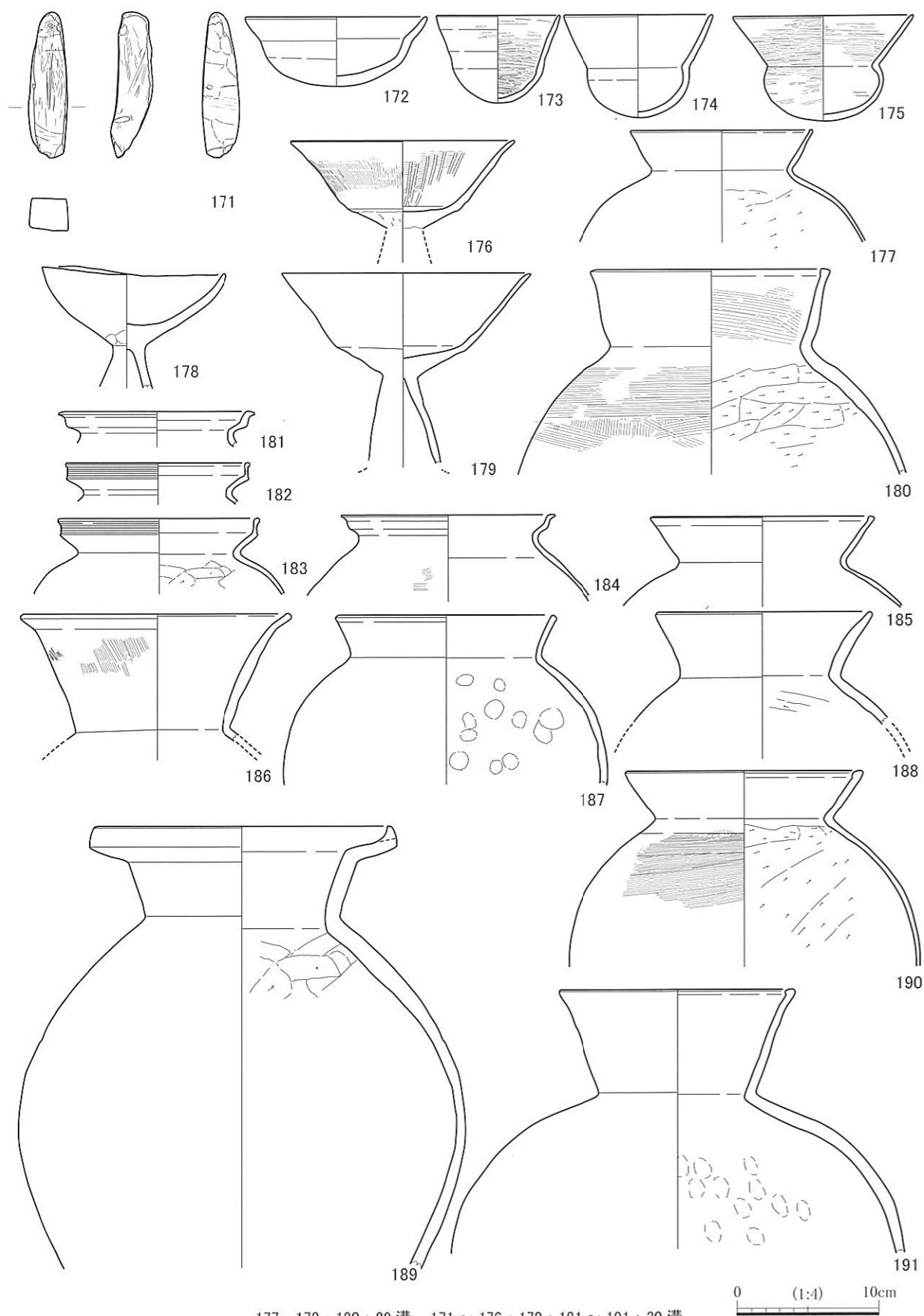


图 47 5区 29 溝 · 30 溝出土遺物

墳時代以降も落ち込みの状況を呈していた可能性が考えられる。

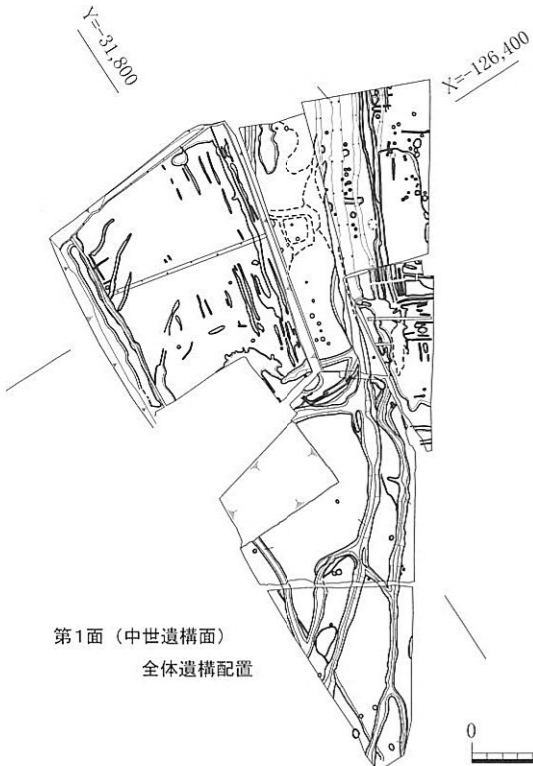
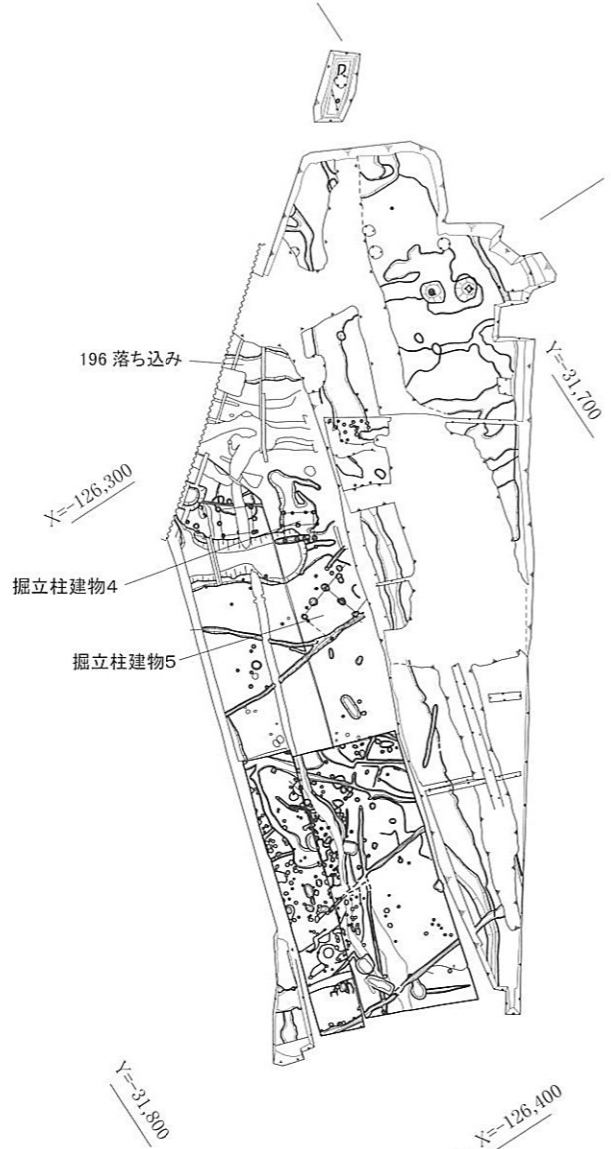
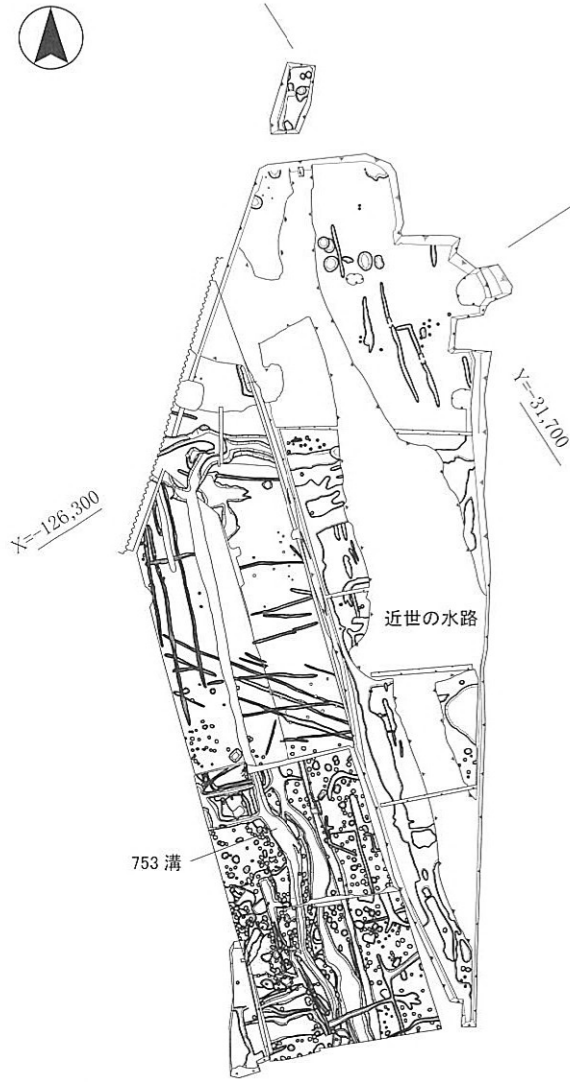
29 溝からは 177・178・180 (図 47) の遺物が、30 溝からは 171～176・179・181～191 (図 47) の遺物が出土している (図版 19-1～7)。177・180 は土師器甕、178 は土師器高杯でいずれも古墳時代前期 (4 世紀後半) のもの。171 は砥石、断面形はほぼ正方形で 2 面に使用痕跡が確認できる。172 は有段口縁を持つ鉢で、173～175 は土師器の小形丸底壺、173 と 175 には内外面にヘラミガキを施している。176・179 は土師器高杯で、176 の杯部の内外面にはヘラミガキを施す。180・186 (図版 32)・188 (図版 32)・191 (図版 33) は土師器の広口の壺、189 は複合口縁を持つ土師器壺で、胎土中に砂粒を多く含む。189 は東部瀬戸内地方 (紀伊・阿波) からの搬入品と考えられる。181～185、187・190 (図版 33) は土師器甕。このうち 181・184 はいずれも受け口状の口縁を持ち、南近江もしくは山城地方からの搬入品の可能性がある。182・183 はいわゆる「吉備型甕」(秋山ほか 2000) と呼ばれるもので、吉備もしくは播磨西部地方からの搬入品とみられる。上記の資料はいずれも古墳時代前期 (4 世紀後半) のものといえる。

⑥6 区 (図 38) 6 区では調査区の北半で、竪穴建物を 4 棟検出した。これは 2 区とは異なった様相で、後述するように時期差はあるものの、北側の 2 区と南側の 6 区での土地利用の違いを物語っているといえよう。また、今回竪穴建物を検出できたのは、第 4-2 層の残存が認められる箇所に限られる。このことから、本来あった竪穴建物が上層の第 4-1 層で削平された状況を想定することができ、今回の検出箇所以外にも建物が広がっていた可能性は十分にある。

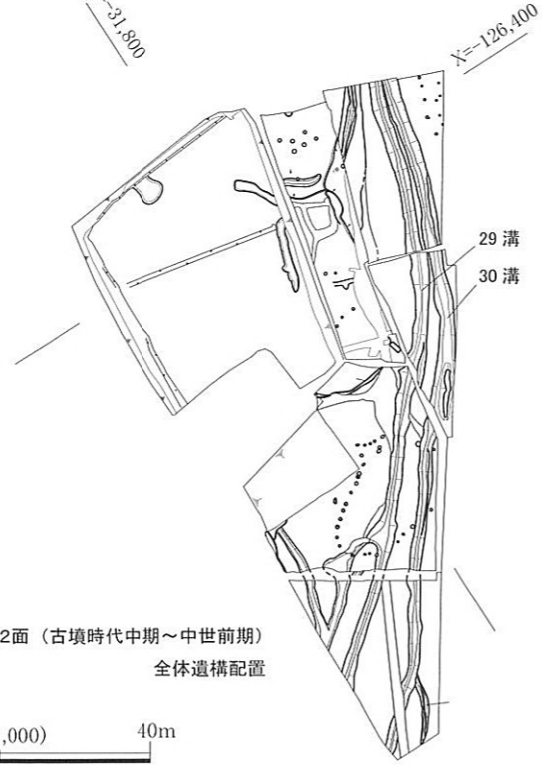
186・187 竪穴建物 (図 38・42、図版 20-1・3～6) L 字状に残った壁溝と壁溝上でカマド状施設を検出した。いずれも壁溝の残存長からみて一辺 3.2 m 以上と推測される。カマド状施設の前後関係から、最初の壁溝を有するものを 187 竪穴建物、付け替え後の壁溝を有するものを 186 竪穴建物とした。まず 187 竪穴建物の壁溝上にカマド状施設があり、その後 186 竪穴建物の壁溝が内側に掘削された際に、外側のカマド状施設は掘り込まれ、186 竪穴建物の壁溝上に新たなカマド状施設が設置された。188 壁溝と 193 壁溝はカマド状施設の下に伸びる 2 条の壁溝のいずれかに接続していた可能性が考えられるが、直接の接続関係は確認できなかった。186 竪穴建物の壁溝の最大検出幅は 20cm、最大の深さ 8 cm、187 竪穴建物の壁溝の最大検出幅は 32cm、最大の深さ 12cm である。どちらの建物の壁溝も埋土は黄燈色の細粒砂である。カマド状施設は主として炭混じりの焼土粒で構築されている。186 竪穴建物のカマド状施設では下層に薄い炭層が入る焼土粒の前後関係が認められることから、東から西へカマド状施設が作り替えられた可能性がある。いずれのカマド状施設も明らかな袖部はなく、燃焼部のみのものであるが 186 竪穴建物の西側のカマド状施設にみられる焼き締まった微砂は、通常のカマドの燃焼部においてみられるものであり、構築前に乾燥を目的に予め焼いた可能性が考えられる。通常のカマドは壁溝が途切れた箇所に構築されるが、今回検出したカマド状施設はいずれも壁溝上にある。そのためこの建物では、構築後にカマド状施設を新たに設けた可能性がある。カマドの構築方法が確立する以前の初源的なカマド状施設といえよう。

建物内では土坑を 7 基検出したが、いずれも浅く柱痕跡がなく、さらに掘り込みの角度から見ても支柱穴に相応しいものではなかった。187 竪穴建物の壁溝からは 154 (図 45) の土師器高杯の口縁部が出土している。

194 竪穴建物 (図 38・43、図版 20-7・8) L 字状に残った壁溝を検出した。方形の建物と推測され、壁溝の残存長からみて一辺 3.2 m 以上と推測される。壁溝の最大検出幅は 24cm、最大の深さ 5 cm で、



第1面（中世遺構面）
全体遺構配置



第2面（古墳時代中期～中世前期）
全体遺構配置

0 (1:1,000) 40m

図 48 古墳時代中期～中世の全体遺構配置図

埋土は黄褐色の細砂である。建物の内部に不整形な円形を呈した凹みがあり、その中に焼土と炭層が混じった状態で堆積していた。186・187 竪穴建物のカマド状施設に比べると、焼土の割合が少なく炭化物が多い。焼土をカマドの天井や袖部が崩落したものと考えれば、焼土の割合が少ない 194 建物にはカマドに類する構築物があった可能性は低い。また、建物内では支柱穴になりそうな遺構は検出できなかった。壁溝および建物内からの出土遺物はない。

195 竪穴建物（図 38・44、図版 20－7・8）L 字状に残った壁溝を検出した。方形の建物と推測され、壁溝の残存長からみて一辺 2.6 m 以上と推測される。壁溝の最大検出幅は 27cm、最大の深さ 5 cm で、埋土は黄褐色の細砂である。西側の壁溝沿いに楕円形をした凹みがあり、その中に焼土と炭層が混ざった状態で堆積していた。これは 194 竪穴建物内部の遺構に類似する。また、建物の内側には壁溝とはやや向きの異なる L 字状の段差を確認している。この段差はおそらく、建物構築時の掘り込み面が中央に向かってやや窪んでいたためにできたものと考えられる。壁溝内の埋土からは 158（図 45）の土師器高杯の脚部片、170（図 46、巻頭図版下段、図版 25）の腕輪形石製品の石釧片が出土している。170 は緑色凝灰岩製で硬質、風化は殆どみられない。表面は被熱ないしは酸化の影響かやや褐色味をおびた緑色であるが、断面は淡緑灰色を呈する。断面形状は 4 面で内側の面は僅かながら内傾する。放射状の刻みは斜面のみに施し、斜面と側面の間に溝は廻らない。158 の土師器高杯、170 の石釧ともに古墳時代前期（4 世紀後半）の範疇に位置づけられる。

196 竪穴建物（図 38）コの字状の段差を検出したのみで壁溝は検出できなかった。一辺約 4.0 m の方形の建物と推測される。196 竪穴建物からの出土遺物はない。

⑦第 4－2 層出土遺物 第 4－2 層からは 145・147・148（図 34）の遺物が出土している。145 は土師器甕、147（図版 24）は土師器の加飾壺でいずれも古墳時代前期（4 世紀後半）のもの。148 は弥生土器の甕の口縁部で、弥生時代前期のもの。以上のように第 4－2 層から出土している遺物は、弥生時代前期から古墳時代前期までのものであることがわかる。

第 5 章 まとめ

今回の調査では、古墳時代前期から中世までの時期を中心として様々な遺構・遺物が検出された。今回の調査は一般国道 170 号（十三高槻線）の道路築造に伴うものとしては 3 次目の調査となる。以下では合計 3 次にわたって実施した井尻遺跡の調査成果を時代別にまとめることにする。

（1）中世以降

調査成果の章では詳細にふれられなかったが、1 区と 2 区では近世以降の水路が調査区を縦断している。この水路を北へ延伸すると五領小学校東側の道路沿いの水路に突き当たる。本来は山地から真南に水路が下り 1 区・2 区を縦断していたのだろう。水路からの遺物は 18 世紀代後半から 19 世紀初めのものが多いことから、この時期に大規模な洪水があり水路は塞がったものとみられる。ちょうど五領公民館の北側で現在の水路は不自然に屈曲しているが、これは調査地の水路が塞がったため付け替えられた結果といえる。

（2）中世（図 48 左）

出土遺物から中世の遺構は 11 世紀後半から 15 世紀の期間にわたる。第 1 次調査では 11 世紀代の

屋敷地を巡る溝と想定される 753 溝が検出された。今回はその溝の西側を調査したが、屋敷地に直接関わるような遺構はなかった。おそらく屋敷地は調査地の西に広がっていたものと推測される。ただし、今回の調査区が屋敷地から離れるとはいえ、調査では同時期の輸入陶磁器が多く出土している。このことから、西側の屋敷地へ運び込まれた物資の運搬ルート沿いにあった溝が 2 区で検出した溝であった可能性もある。いっぽう今回調査した 6 区は、調査直前までは農道であった。調査では、この農道の方向と軌を一つにする溝が多数検出された。溝の開削時期は 51 溝・53 溝からの出土遺物より 13 世紀前半頃と考えられる。このことから、6 区付近の現今の水田区画は 13 世紀前半まで遡るといえる。

(3) 古墳時代中期～中世前半 (図 48 右)

今回の調査で特筆されるのは 2 区の北端で検出した 212 落ち込みである。落ち込みからは古墳時代中期 (5 世紀中頃) の須恵器が大量に出土した。器種構成は杯と高杯といった小形器種が多くを占め、甕や壺といった大形器種が明らかに少なかった。また、人為的に打ち欠かれて投棄された須恵器高杯にみられるように、これらの須恵器群は当時の生活行為の結果投棄されたというのではなく、どちらかといえば祭祀的な行為の結果投棄されたと解釈できる。この落ち込みの南西では第 2 次調査において、大量の土師器高杯と石製模造品、鉄製品などが出土した 196 落ち込みが検出されている。さらにその調査では、神社建築の初源的構造を持つ掘立柱建物 4 が 196 落ち込みの南側で検出されている。これらの成果を合わせて考えると、今回の調査地の西側に古墳時代中期 (5 世紀中頃) の祭祀場が広がっていた可能性が高い。

また、234 溝から出土した「コンパス文」を有する器台をはじめ、今回の調査では幾つかの器台片が出土しているが、このことも当遺跡における古墳時代集落が単なる一般集落ではなかったことを想起させる。第 2 次調査の報告書では、「井尻遺跡には祭祀を執りおこない得る権力を持った人物がおり、集落が形成されていた」[センター 2017、p. 61] としているがまさにそのとおりだろう。ただし残念ながら、第 2 次調査で検出された 196 落ち込みと、掘立柱建物 5 の延伸部分は近世以降の水路・池により削平されていることが今回の調査でわかった。

(4) 古墳時代前期 (図 49)

この時期の調査成果が今回の調査で得られた当遺跡に関する新知見といえる。これまでの調査で明らかになっている古墳時代前期の遺構は、第 2 次調査で検出された 258 溝のみで、集落域などについては情報が皆無であった。それが、今回 6 区の中央部で竪穴建物を 4 棟検出したことで、集落域の復元が可能となった。まず古墳時代前期の遺構を整理してみると、北側の 2 区で検出

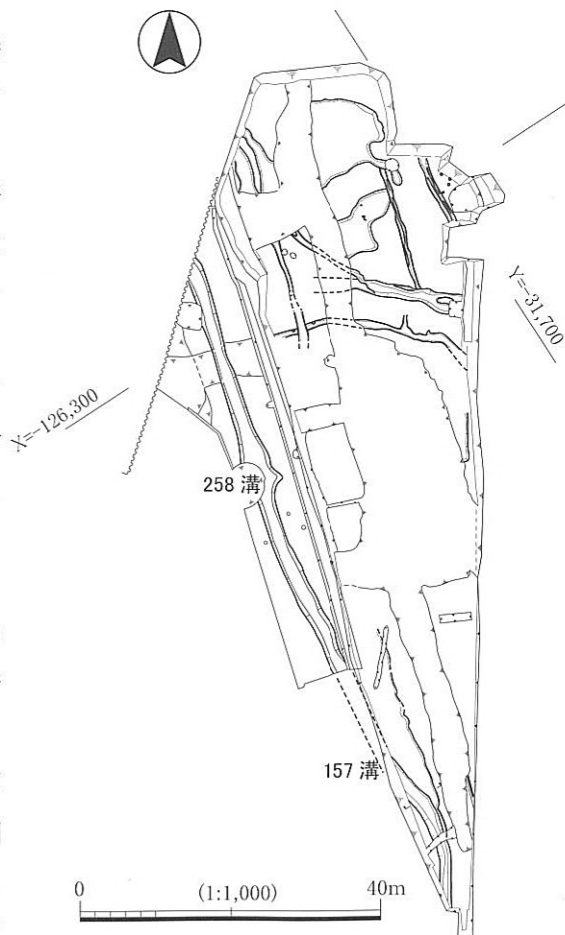


図 49 調査区北半古墳時代前期の遺構配置図

した157溝が挙げられる。この溝は位置関係と出土遺物の時期から、第2次調査検出の258溝と繋がるものと推測される。つぎに5区で検出した29溝・30溝が挙げられる。この溝は第1次調査検出の401東溝・401西溝と繋がるものと推測される。ここで、これらの溝について興味深い事実気づく。まず157溝が南に伸びていたとするならば、第1次の調査区もしくは今回の5区でその延伸部分が検出されるはずである。しかしそういった遺構は皆無である。つぎに29溝・30溝（401東溝・401西溝）が北に伸びていたとするならば第1次の調査区でその延伸部分が検出されるはずだがこれもない（図48右）。どちらも現存の道路および、道路北の水路部分（図2に示した水路）で途切れている。そこで推測されるのは、この現今の水路自体が、古墳時代の水路を淵源としている可能性である。北からの157溝はこの水路でT字状に交わり、やや西に折れて29溝・30溝が派生し南に下ったと想定しておきたい。

つぎに、6区の中央部では竪穴建物が4棟検出された。前章で報告したように、このうちの1棟は本格的なカマドが普及する前の原初的な形態のカマドを有しており、まさに出土遺物と相まって4世紀後半の集落の様相を示している。北側の1区・2区および第1次・第2次調査区では、古墳時代前期の集落は見当たらないことから、さきに述べた現行の水路以南に同時期の集落が広がっていたと想像される。

さらに重要なのは、195竪穴建物の壁溝から出土した石釧である。石釧の出土は第2次調査に続いて当遺跡では2例目となる。石釧が集落から出土するという事例は、淀川沿岸のみならず大阪府内でもまれな例と言え、当遺跡の集落がこの地域の首長層と直接関わりあっていた事実を如実に示している。このことは、当遺跡の古墳時代中期の集落が地域の有力者を中心としたものであった事実と相通じており、時代を通じて、この地域の有力層があえてこの地を選択して居を構えたということが推察されるのである。

参考文献

秋山浩三・小林和美・後藤理加・山崎頼人 2000 「近畿における吉備型甕の分布とその評価」『古代吉備』 第22集

笹栗拓 2018 「コンパス文器台考」『大阪文化財研究』 第51号 公益財団法人 大阪府文化財センター

公益財団法人 大阪府文化財センター 2015 『井尻遺跡』

公益財団法人 大阪府文化財センター 2017 『井尻遺跡2』

写真図版

1. 2区 北壁断面（南西から）



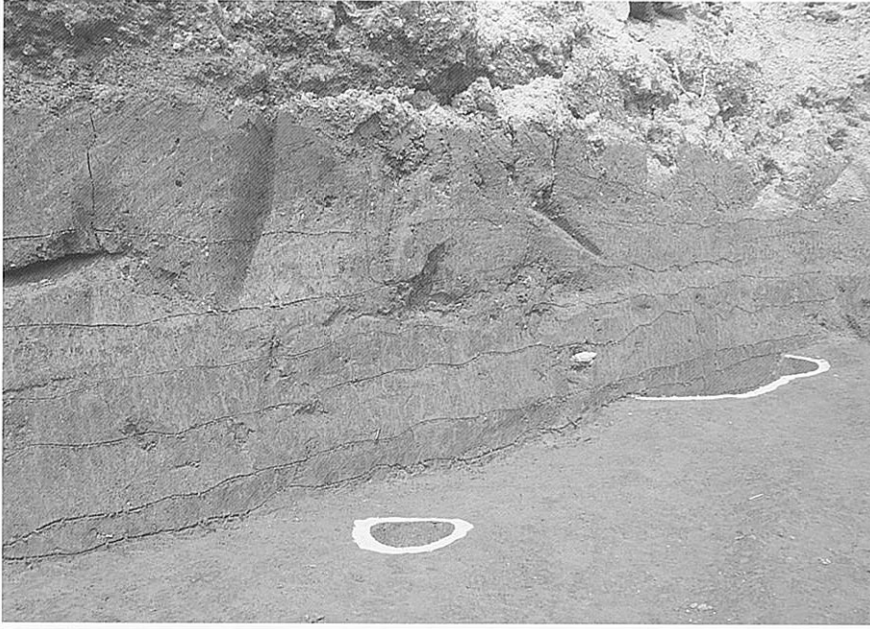
2. 2区 東西断面（南西から）



3. 3区 西壁断面南側（南東から）



図版2



1. 3区 西壁断面北側
(南東から)



2. 4区 北壁断面 (南西から)



3. 6区 中央部東西断面
(南から)

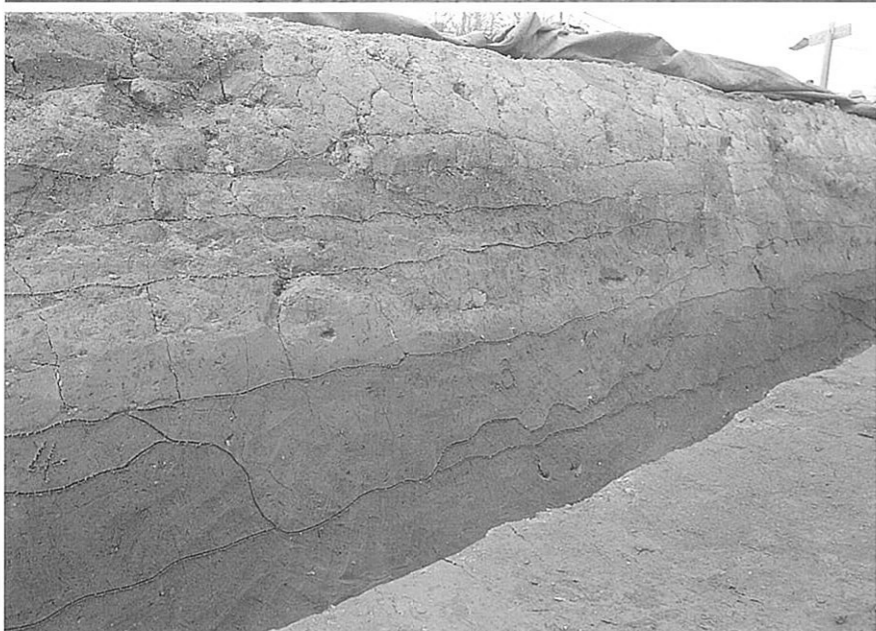
1. 6区 中央部西壁断面
(南東から)



2. 6区 中央部南寄り西壁断面
(南東から)



3. 6区 南端西壁断面 (南東から)



図版 4



1.2区 北半第1面 (南西から)



2.2区 南半第1面 (北から)



1.2区 南半第1面 (南から)



2.5区 第1面 (北から)



1.3区 第1面 (南から)



2.4区 第1面 (南東から)



3.6区 北端第1面 (南西から)

1. 6区 北半第1面 (北から)



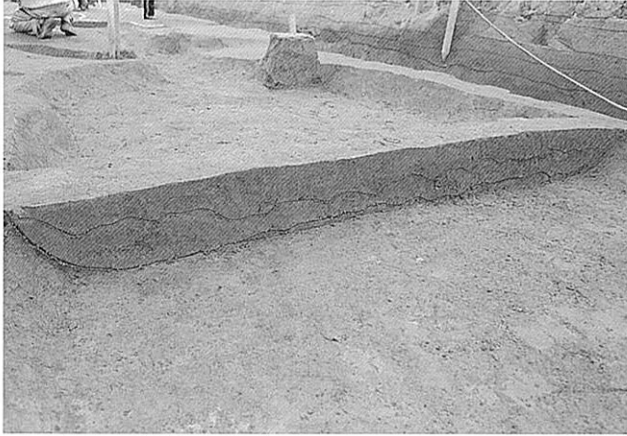
2. 6区 中央部第1面 (北から)



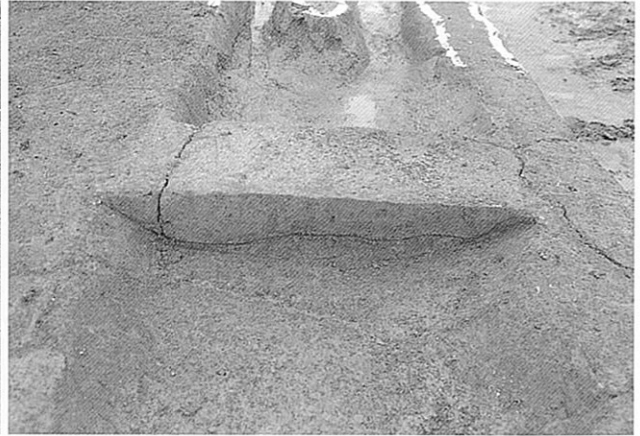
3. 6区 南半第1面 (南から)



図版8



1.6区 51 溝断面 (北東から)



2.6区 53 溝断面 (北から)



3.6区 221 柱穴断面 (東から)



4.2区 204 溝土器出土状況 (南から)



5.2区 北半第2面全景 (南西から)



1. 2区 南半第2・第3面全景（南から）



2. 4区 第2面全景（東から）



1.5区 第2・第3面全景（北から）



2.5区 第2・第3面全景（南から）

1. 1区 南側調査区第2面全景
(南から)



2. 4区 第2面全景 (南東から)



3. 6区 北側部分第2面全景
(北から)





1.6区 中央部北側第2面全景
(北から)



2.6区 中央部南側第2面全景
(北から)



3.6区 南側第2面全景
(南西から)

1. 2区 212 落ち込み検出状況
(北西から)



2. 2区 212 落ち込み
土器出土状況①(南西から)



3. 2区 212 落ち込み
土器出土状況②(南から)





1. 2区 233 井戸上層断面
(西から)



2. 2区 233 井戸下層断面
(西から)



3. 2区 235 井戸上層断面
(東から)

1. 2区 235 井戸
井戸枠検出状況(西から)



2. 2区 235 井戸
井戸枠内遺物出土状況(東から)



3. 2区 235 井戸断面(東から)





1. 2区 235 井戸底検出状況
(西から)



2. 2区 北半第3面 (南西から)

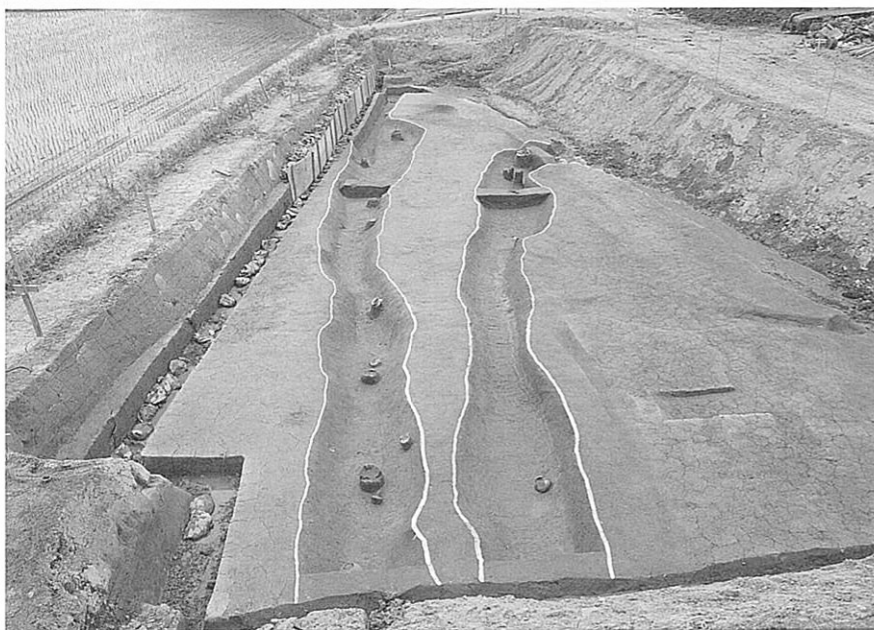


3. 2区 北半第3面 (北から)

1. 3区 第3面 (北東から)



2. 5区 29・30溝
遺物検出状況 (北から)



3. 5区 29溝遺物検出状況
(南から)





1.5区 30溝遺物検出状況
(南から)



2.5区 29溝断面(南から)



3.5区 30溝断面(西から)



1. 5区 29溝 177 出土状況 (東から)



2. 5区 29溝 178 出土状況 (東から)



3. 5区 30溝 191 出土状況 (東から)



4. 5区 30溝 188 出土状況 (東から)



5. 5区 30溝 190 出土状況 (東から)



6. 5区 30溝 179 出土状況 (東から)



7. 5区 30溝 186 出土状況 (東から)



8. 5区 150土器出土状況 (南東から)

図版 20



1. 6区 中央部第3面全景 (西から)



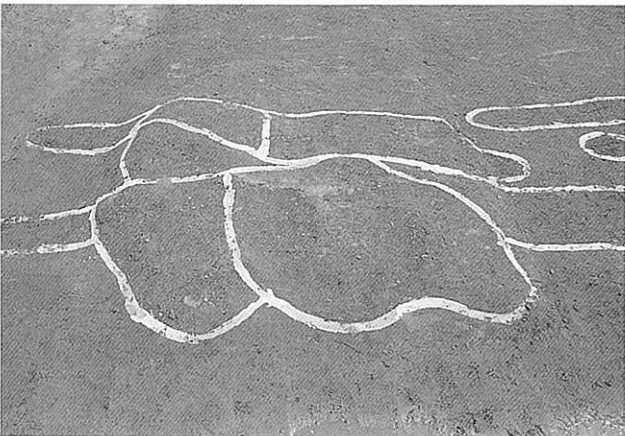
2. 6区 中央部第3面全景 (東から)



3. 6区 186 竪穴建物検出状況 (西から)



4. 6区 186 竪穴建物完掘状況 (西から)



5. 6区 186 竪穴建物火処 (西から)



6. 6区 186 竪穴建物火処横断面 (西から)



7. 6区 194・195 竪穴建物周辺 (西から)



8. 6区 194・195 竪穴建物周辺 (北西から)



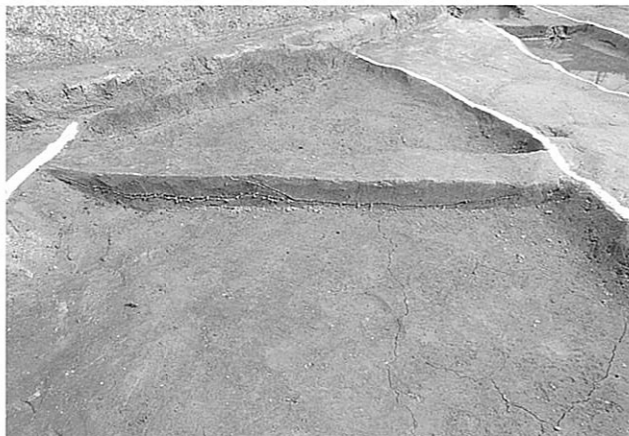
1. 6区 195 竪穴建物 (西から)



2. 2区 236 (右)・237 (左) 溝 (南から)



3. 2区 236 溝 (南から)



4. 2区 237 溝 (南から)



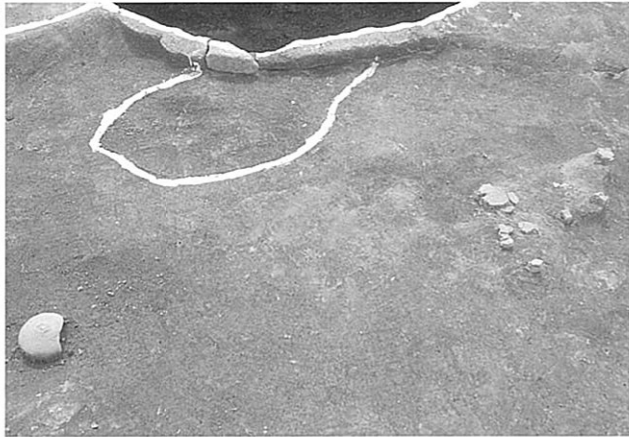
5. 2区 234 溝 (南から)



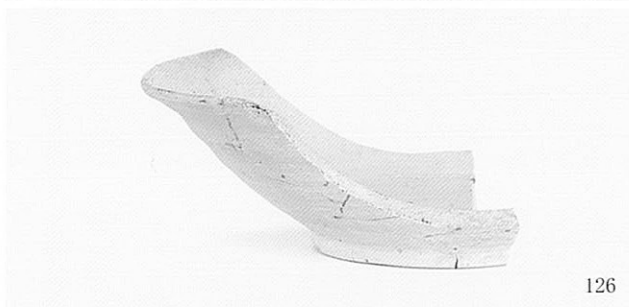
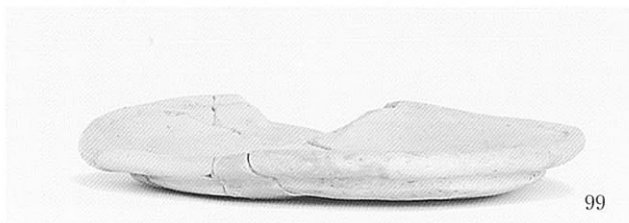
6. 2区 232 溝 (南東から)



7. 2区 228 溝 (南東から)



8. 2区 229 落ち込み (北西から)





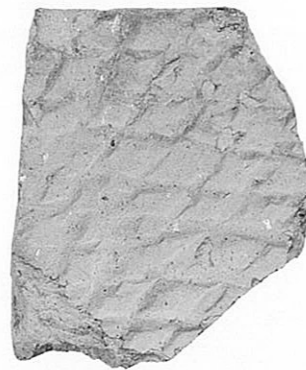
50



47



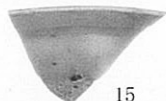
140 凹面



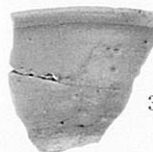
140' 凸面



138



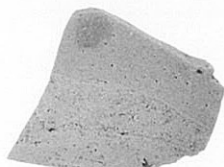
15



32



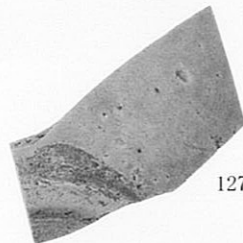
141



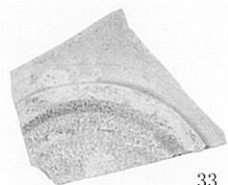
35



30



127



33



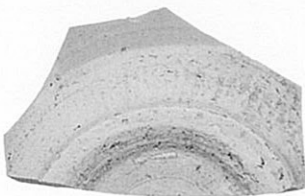
31



39



1



34



37



21



55



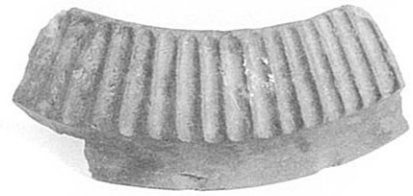
147



136



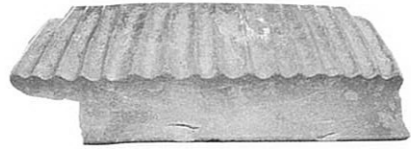
160



170 上面



170' 内面



170'' 外面



137



153



159



52



56





66



63



81



74



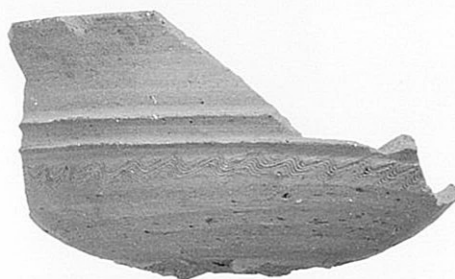
73



78



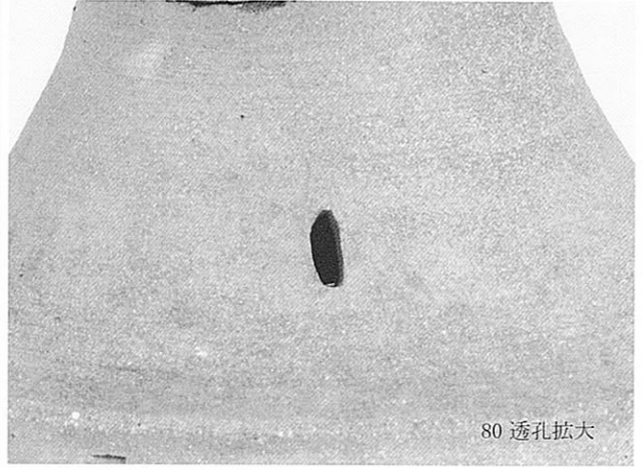
79



84



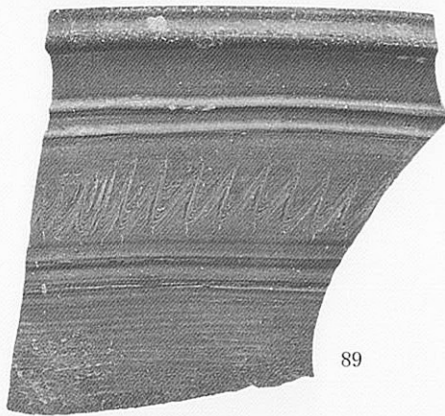
80



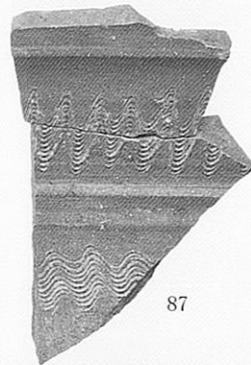
80 透孔拡大



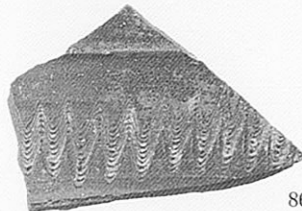
83



89



87



86



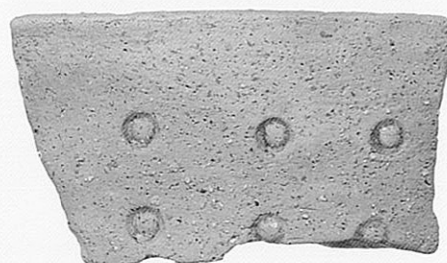
92 外面



92 内面



163



162



165



164



169



150



168



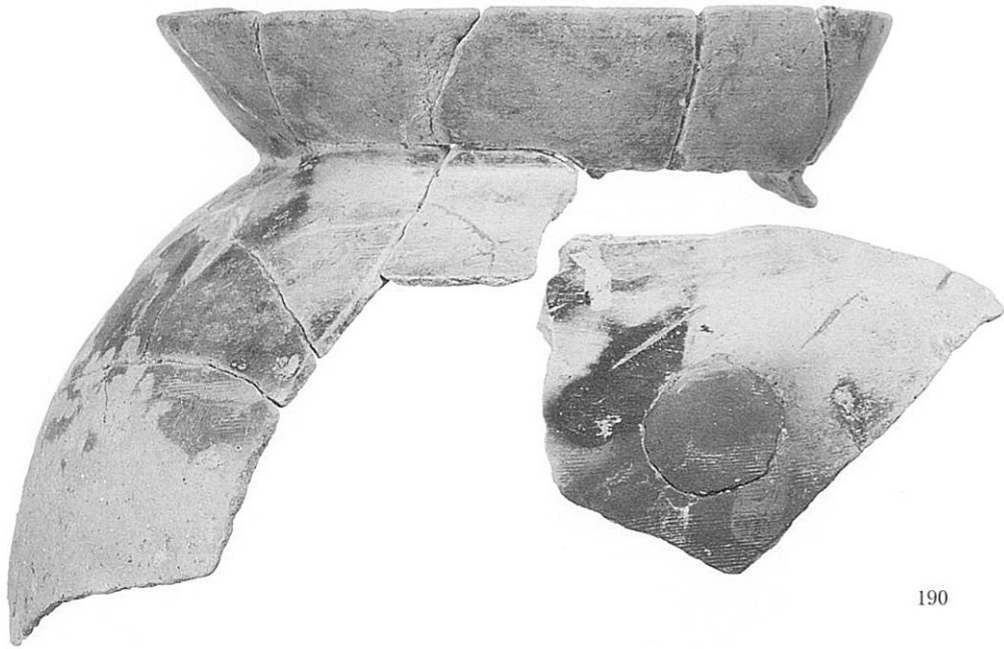
188



186



146



190



191

報告書抄録

ふりがな	いじりいせき							
書名	井尻遺跡3							
副書名	一般国道 170 号（十三高槻線）道路築造事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第296集							
編著者名	奥村茂輝							
編集機関	公益財団法人 大阪府文化財センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 TEL072(299)8791							
発行年月日	2019年3月15日							
ふりがな		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
いじりいせき 井尻遺跡	おおさかひたかつきし 大阪府高槻市 いじり 井尻1丁目	27207	9580	34° 51′ 39″	135° 39′ 10″	2018.5.1 ～ 2018.8.31	3,894	一般国道 170 号 (十三高槻線) 道路築造
所収遺跡名	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物			特記事項	
井尻遺跡	集落 生産	古墳 中世	竪穴建物、井戸 溝、落ち込み	須恵器・土師器・ 石製腕飾品・黒色土器・ 輸入陶磁器・灰釉陶器・ 瓦器・瓦・木製品			古墳時代の建物 古墳時代の溝 平安時代の井戸	
要 約	<p>今回の調査では古墳時代前期の竪穴建物・溝、古墳時代中期の須恵器が多く出土した落ち込み、平安時代初頭の井戸、中世の溝群などを検出した。</p> <p>古墳時代前期の建物は南側調査区の6区において4棟検出した。これまで当遺跡では古墳時代前期の集落域が不明であったが、今回の調査でその位置が明らかになった。また竪穴建物の壁溝から石製腕飾類の石釧が出土したことは注目に値する。</p> <p>調査地の北端、2区では古墳時代中期の須恵器が一括投棄された落ち込みを検出した。この落ち込みはこれまでの調査で明らかになっている同時期の祭祀遺構と関わるものとみられ、井尻遺跡のなかに祭祀空間があったことを裏付ける。</p> <p>平安時代初頭の井戸は調査区の北端、2区において2基検出した。このうち1基は横板組の井戸枠を有していた。またほぼ調査区全域で、12世紀から15世紀にかけての溝群を検出した。</p>							

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第296集

井尻遺跡 3

一般国道 170 号（十三高槻線）道路築造事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 / 2019 年 3 月 15 日

編集・発行 / 公益財団法人 大阪府文化財センター

大阪府堺市南区竹城台 3 丁目 21 番 4 号

印刷・製本 / 株式会社 明新社

奈良市南京終町 3 丁目 464 番地